

# 関山

かんざん

第7号

中尊寺開山1150年祭記念



寺報 中尊寺



中尊寺開山慈覚大師坐像

目次

寺報ぐらびあ	頁首	千田 孝信	2
千載一遇		10	8
ミレニアム対談「新世紀につなぐ心」			
基調講演「慈覚大師円仁にまつわる伝説と信仰」	木内 堯央	33	
パネルディスカッション			
「伝記・伝説に関わる史実と信仰」			
桜の花の歌	藤岡 武雄	46	
平泉の片鱗	八重樫忠郎	67	
季語に寄せて		72	
研究／出版		83	
風信／語録		96	
別所老僧追録 佐々木教育師	菅原 光中	98	
陸奥教区宗務所報		100	
執務日誌抄		102	
新讚衡蔵落慶式		106	
新讚衡蔵の建設に当たって	鈴木 嘉吉	128	
新讚衡蔵建設浄財寄進結縁御芳名		129	
不動尊篤信御奉納者御芳名		133	
伝教大師最澄の書を集字作成		138	
「紺紙金字般若心経」奉納について		139	

〈表紙〉  
紺紙金字交書経（中尊寺経）  
「華嚴経」（見返絵）（高野山金剛峯寺蔵）  
慈覚大師坐像（西村公朝彫）



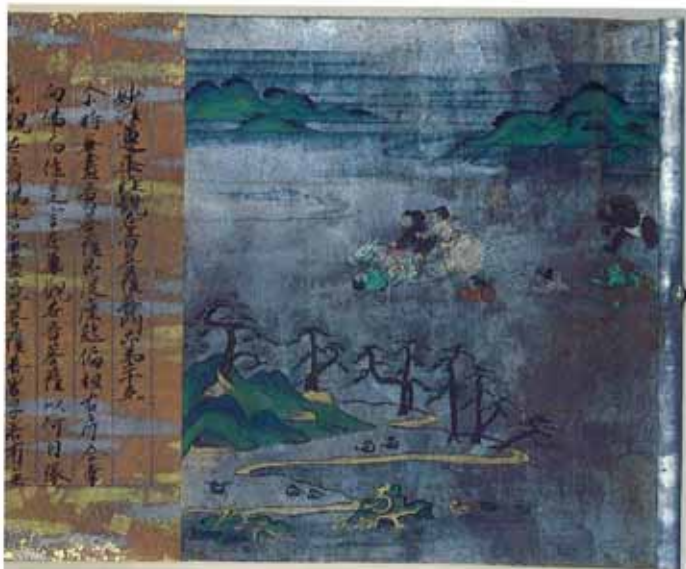
同 企画展「信の美 写経のこころ」図録 (10月10日~11月10日)



新讚衛藏竣工 3月24日



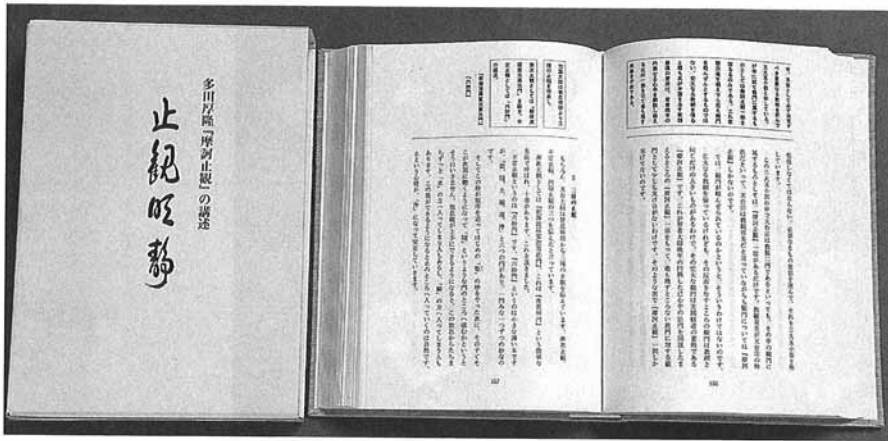
同 落慶法要



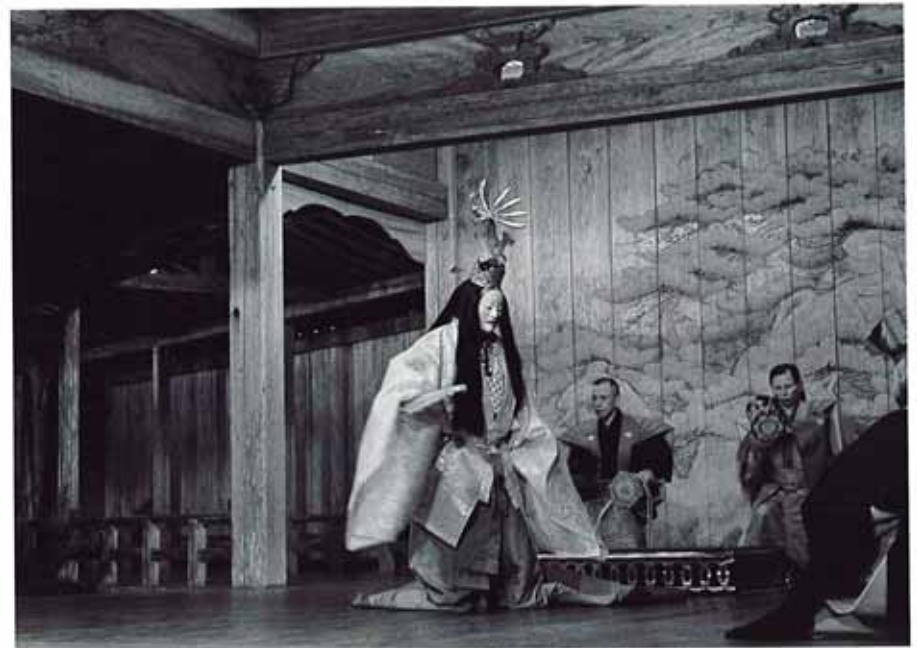
同 企画展には装飾経の白眉「平家納経」(厳島神社蔵)など都合五十七巻が公開された。



同 七宝荘厳堂柱の復元を観覧される日光御門主



前貫首多田厚隆大僧正講述『止観明静』（多田孝正・孝文編）発刊される。 6月4日  
一妙法院門主大久保師の序文は 本誌〈風信/語録〉に収録—



第二十四回中尊寺新能「殺生石女体」（佐々木宗生師） 8月14日 菅佐原智治氏撮影



さんげ 山家学会を招致開催 6月17・18日



平山郁夫画伯素描 中尊寺能楽堂



般若心經金字写経会 9月23日



法華経一日頓写経会 6月11日



十種供養写経奉納(教区法要) 11月10日



慈覚大師報恩 開山1150年慶讃大法要 7月14日

# 千載一遇

貫首 千田孝信

紅葉と菊花の彩りを添えて、開山記念行事の有終の美を飾ったのが、「信の美―写経のころ」展であった。参観者は、ひたすら感嘆・鑲仰の面持ちである。敵島神社蔵の「平家納経」・比叡山延暦寺蔵「紺紙金銀字法華経」・日光山輪王寺蔵「一字宝塔法華経」・浅草寺蔵「法華経巻第五」・東京国立博物館蔵「竹生島経」等々、和様書体の一字一字、見返扉絵の一点一画に籠められた平安の信と美の結晶に、世紀末の汚泥に塗れた心が、おのずから洗われる思いだったのである。

このような国宝・重文級の平安装飾経が豪華にも一堂に展示されたのは、東北いや全国でも稀有のためではないか。これが可能になった背景には、去る三月竣工した「新讚衡蔵」の最新施設の完備がある。改めて、中尊寺を愛する多くの方々と共に、その落成の慶びを噛みしめたいと思う。

さらに、平安装飾経の絢爛たる展示を可能にした、もうひとつの素地がある。藤原清衡公の紺紙金銀字交書一切経をはじめ、歴代入魂の写経遺宝が当山に蔵存する重みである。藤原三代の信と美は、春秋あまたを経ても、揺らぐことのない深みと重みを蔵しているのである。数あるなかで、辺境からの上向きの気概を孕んで、凜然たる氣迫と氣品を湛えていたのが、わが中尊寺経であった。

藤原三代の偉業は、単に写経作善にとどまるものではないが、その「写経のころ」の淵源を探ねれば、紛れもなく開山慈覚大師の「如法写経」の信の精神であろう。写経は、開山大師から藤原三代にわたって歴然として継承された、当山草創の古風、中尊寺独自の寺観なのである。

折から、宗祖伝教大師最澄の「集字般若心経」が、ある篤志家から奉納された。集字とは申せ、清澄な墨線には、宗祖大師最澄の高潔な人柄が生き生きと滲んでおり、宗祖大師をまのあたりに迎えたような感動がある。表紙の宝相華文様と見返しの法華説相図は比叡山延暦寺蔵の「紺紙金銀字法華経」の復元で、思えばそれは最も情理に適った選択であった。この平安の美学を意識した装飾経は、残り少ない現代名匠たちの彫心鏤骨の労作であるが、造経の一切を企画して立会った願主の書道家の解説で、一卷の装飾経の蔭に、いかに渾身の営為が潜んでいるかを如実に認識し、ゆくりなくも平安の工房の熱気にまで想像の翼を広げさせられた次第だった。

開山千五十年を記念し、開山大師と藤原歴代諸公のご宝前に、さらに宗祖大師のご宝前にも、これら写経の「信の美」を献げることのできた喜びは、まさに千載一遇の法悦といふべきであろう。

千年単位でものを考える機会をもつことができた今年は、それだけでも千載一遇の有難い仏縁である。しかし、来年も、再来年も、一日一日が、実は千載一遇なのである。開山大師の開山は、千載の彼方に消え去った歴史の過去では決してない。われわれの一日一日の今が、新しい山を開く「いま」なのである。みちのくに初めて光を掲げた清衡公の高い志を、遺宝だけに留めてはならない。

一日一日の今が、高い志に生きる、かけがえのない、千載一遇の「いま、このとき」なのである。

## 「新世紀につなぐ心」

岩手県立大学学長 西澤潤一氏  
 平泉・中尊寺貫首 千田孝信氏

司会・山岸健岩手日日新聞社社長



対談する岩手県立大学学長・西澤潤一氏㊦と、中尊寺貫首・千田孝信氏㊧。  
 司会は山岸健岩手日日新聞社社長＝ホテルメトロポリタン盛岡新館＝

【司会・山岸】 今年はミレニアム（千年紀）の年であり、二十一世紀を目前に、大きな節目の年でもあります。岩手日日新聞社では、二十世紀を振り返りながら新世紀への指針を得るため連載企画などを紙面に展開中であります。

きょうはそのメインテーブルとして、岩手県立大学の西澤潤一学長と、中尊寺の千田孝信貫首のお二人に「新世紀につなぐ心」といったテーマで、対談をお願いします。

千年前といえば、日本では藤原道長、頼通が権勢を振るい、ヨーロッパでは、バイキングが北欧を中心に活躍していた時代であります。また、

みちのくでは、藤原三代が花咲かせたのが十二世紀ですから、その前段、古代から中世への大きな転換期に差し掛かった時代と言えましょうか。

それから一千年、とくに近代における、科学技術や教育などについて西澤先生に、また、日本の宗教、日本の文化を踏まえて心の問題などにつきまして千田貫首から、お話を願いたいと思います。

西澤 お話のようにヨーロッパとアジアの展開の仕方を比べてみると、なかなか面白い点があります。ヨーロッパには闘争的な点が多くて、武器ができたということが文明を変えてしまった。日本でも鉄砲が入ってきて、近代兵器というものができ、合戦そのものが大きく変容したわけです。さらに、江戸期に入ると一八五一年に野垂れ死にした岡山の浮田幸吉という人が、飛行機を造って丘の上から飛んで、みんなを驚かした。慌てて重箱をひっくり返して逃げたところに降りてきて、むしゃむしゃ食べて大騒ぎになり、所払いになったという話があるんです。ヨーロッパの飛行機の元

祖といわれるリリエンタールは、その数十年後の一八九六年です。それをみると随分東洋も優れたところがあつたわけで、そう引け目を感じることはないんだと思うんです。

ただ二十世紀に入り科学技術の方で、大変な遅れをとってしまったことは、否定はできません。十九世紀から始まっていると思いますが、科学技術の成功に酔っちゃって、がむしゃらに展開してきました。結局、気が付いてみれば、後始末が全然片付かず、いよいよ二十一世紀に入る時になつてしまわ寄せがきている。環境問題やら人間性の喪失と言われるような問題、そういう時代状況にあるということではないかと思うんですね。

今は、科学技術の進み方も様変わりし、その後始末とか、新しいことを見つけても後始末を考えながらやらなければいけないというように、思想的に変わってきたんですね。基本的には宗教を初めとして、文化というものを大事にしなければいけないかったのを、ないがしろにしてきたということでしょうか。

千田 千年代は、道長を中心に摂関政治、宮廷サロン文化が繁栄した時代。瀬戸内寂聴さんの源氏物語にもあるように、ものの哀れというものを追求する非常に感度の高い、日本風の文化が都でできた。平安朝で平仮名とカタカナを生んだということだけでも、日本民族の優れた創造力が分かります。それから百年ほどたって、このみちのくの平泉に、全国的に見ても特例だと思わんですが、都に匹敵する仏教美術文化が花開いたわけですね。これは、東北にとって非常に高い誇りであり「平泉の世紀」と言ってもよい。

しかも、これは清衡公ご自身の発願なのですが、敵味方の区別なく、あるいは人間だけではなくて、動物、鳥類、魚介類に至るまで区別なく、過去の戦争の犠牲者すべてを供養するという、深い平等の供養の仕方が中尊寺に清衡公によって打ち立てられた。精神の丈というよりも心の深さ、そこが私どもにとっても非常に誇りに思われる。

ただ、当時は浄土思想と言いますか、来世に願いをかけた時代でございます。金色堂もそのよう

な発想で造られております。それが鎌倉時代に入りますと、個人の魂が来世に行ってどのような救われるかという問題に焦点が絞られ、仏教が庶民的、個人的になってきた。

その一方では、日常生活の中で、お釈迦さんと同じような生き方をしたい、どうすればできるかということと道元さん、曹洞宗の日常生活の中で仏法というものが、染み込んでくる。その意味で鎌倉時代は、初めて仏教が日本人の心の中に、生活の中に降りてくる、染み込んでくる時代だったと思います。

それから、室町、戦国時代になりますと、「幽玄」といった日本的な文化の、あるいは心の美しさが追求されるようになって参ります。それはそれなりの大変な創造だったと思います。

江戸時代に入り、鎖国の中でエネルギーも太陽のエネルギーだけで間に合わせた。西澤先生がお話された資源の「後始末」も完全にリサイクルできた。それが明治以降になり、野放し状態になる。そこで今度は後始末できなくなるくらい科学万

能、科学依存の風潮にどっぷりと浸かってきてしまったわけですね。

江戸時代、文化的には「わび」とか「さび」とか「粹」といった他の先進諸国の文化にない、日本のオリジナルな文化、心というものを生んだと思う。

明治そして、それ以後、日本の庶民の中に眠っている才能が完全に開花して、日本は近代化の道を強引に進んでくるようになった。その近代化は大きな成果を生んだけれども、バブルがはじけマインスの面が一気に噴出してしまった。

これをどのように二十一世紀に解決する方向に持っていくか。日本人が過去において伝統的につくり上げてきたいろいろな心の特色、こういうものを果たして二十一世紀に維持できるかどうか。そういった問題が日本人の、これから二十一世紀に生きる誇りの問題と絡んで、難しい状況に直面しているなど、感じさせられます。

西澤 日本人は江戸時代に二十一世紀の先取りをやっていたことになりませぬ。

千田 完全リサイクル、あるいはレンタルをやっていたんですね。

### 岩手の特徴は「先見性」

驚くべき学問の高さ——西澤

山岸 西澤先生が講演の中で、この地方の産物は、という話の中で、「人物じゃないか」とお話されたことを聞きました。みちのくには大槻玄沢、建部清庵、宮沢賢治、そのほか日本の指針を変えるような、大きな立派な人物が生まれ育っています。

西澤 日本が外国とのコミュニケーションの場として長崎だけが許されていたというのに、お話になった大槻玄沢、建部清庵というような立派な方が、蘭学をベースにしてグループをつくっておられた。レベルが高く、しかも長崎から非常に離れた東北の、この地にあるということも、甚だ不可思議な話ですね。

高野長英とか林子平とか、国際問題を見た人た



ちは、この辺にかかわって生きていたんですね。一説には佐久間象山に影響を与えたとか、吉田松陰も来たとか。信じ難い点もありますが、突出したような判断を持っていた。



それから東北地方の特徴は、アメリカに一番近い所だと言って、東北地方こそこれから国際的な仕事にどんな発展して行くべきじゃないかと言ったら、ある方にし

かられました。東北地方なんて一度たりとも国際的だった時代はないーと言うものですから、私も「伊達政宗がいるじゃないですか」とやり返しました。藤原時代、その前までさかのぼると、北方民族との接触の第一線でもあり、国際的感覚というものが、この地方に根差していたんじゃないかと思うんです。

とにかく新渡戸稲造先生にしても、田中館愛橘先生、後藤新平先生などいっぱいいらっしゃる。

今の大東京など、後藤先生あつての話で、先見の明とか大所高所から物事を見る方々が出ています。そこが岩手の大きな特徴じゃないかと思うんですね。

その基礎が一体どこから生まれて来たか、ある意味で国際的問題から離れた所にありながら、こうした人たちを生んだということ、最先端のグループが発生したことは、大きな特徴ですね。

千田 飛行機の操縦、特に離着陸の時は、中から外を見て障害物を避けるインサイド・アウトの操縦法なんだそうです。

ところが、いったん上空に入ってしまうと、自分の位置を外から確認するアウトサイド・インになる。アウトサイド・インの視角が今、必要だとひろさちやさんが言っておられた。

首都圏、東京都の中心にいる人間にとっては、インサイド・アウトですね。ぶつかってしまいうすから、邪魔ものを排除するのが大変なんです。

ところが中央から離れ、東北という地方に腰を据えると、大きな全体からものを客観的に見る、ア

ウトサイド・インの見方ができるんですね。

地方性の良さってものは、大きな宇宙の広がりの中で、自分の位置を確かめることができる。そういうことが可能なのは、東北の、ある意味で地方性の持っている強みではなかったか。宮沢賢治が東京にいたら、それができたでしょうか。

西澤 「貧すれば鈍する」という言葉があります。が、やはり人間として一番大事なことは貧に負けずに育っているということ。子供の時、親父がよく言っていたのは、嫁さんもうなら、没落した名家の娘をもらえーでした。それは名家というのは筋の通った生活をし、それでいて没落した苦い経験があるからおっとり構えていられなく、結局現実社会に、今まで生まれ持って養われてきた人間として一番大事なことをしっかり保てた上で、現実社会に対応していくことだと思っ

てですね。岩手の方はそういうことを、ちゃんとやってらしたのではないかと、私は思うんですけど。

千田 宮沢賢治がお父さんに書いた書簡集を読む

と、宗教のことで大げんかなさったわけですが、しかしきちんと父上に礼を立てている。今の若い人たちに読ませたいくらいです。人間的に基本的なことは、ちゃんと身に着けておられたということですね。

宮沢賢治の話になりますが、「農民芸術概論」を書かれたのは一九二六年（大正十五年）、私の生まれた年なんです。大きな銀河の意思を持たなくちゃいけないとか、あの大きな視角をあつて時代を持っておられたというのはいすごい。都会の詩人、都会の科学者じゃなかなか持てない。やっぱり東北だから、東北でもまた賢治だから、という資質がありますね。

直感的なつかみ方とか、宇宙に対するセンスとか、今、賢治さんが欲しいですね。

西澤 この間、ドイツ・ワイマールの大学から学長が、岩手県立大学に来られましてね。盛んにゲーテの自慢をするもんですから、私は「日本のゲーテは宮沢賢治」だということを言ったんですよ。私たちは高等学校の時から童話の本を買ってき

て、夢中になって読んでたんです。高等学校の生徒が涙を流しながら読んでいたんですから。やっぱりああいうところに、日本人の心の美しさを非常に的確にエッセンスを抜き出したのが、賢治文学だと思っんですね。

### 弱肉強食に悩んだ賢治——千田

山岸 童話作家としての宮沢賢治という意識が強いんですが、宗教家でも、あるいは地質学でも成果を収め、農学者でもあったんですよね。

西澤 私たちは童話として読むのではなく、童話の中に出てくる、宮沢賢治の宗教観、人生観というものが、われわれに大きな感銘を与えるわけです。

農学者として生きたと言っても、農村の娘さんたちが取り入れ時に心配で田んぼの稲を見る。凶作だ、自分たちは今年売られちゃうんじゃないか、お姉ちゃんは運が良かったから、お嫁さんに行けただけ——と涙を流しながら見ている。そういう気

持ちが賢治に訴える。その上で農学をやるから、農学者になるのであって、今は、基本になる出発点が無くなっちゃったんですよ。

原子炉の事故や、ロケットが落ちこちると引っぱり出されて、後始末をやらされる。私自身は工学者でもありませんし、もっと凶々しく言わせてもらえば、人間というものと、科学というものの関係が、ある程度分かったつもりでおりますけれど、そういうものを少しは認めて、ただけるから、対策に引っぱり出されるわけです。

ロケットの構造とか、原子炉の構造では専門家はいっぱいいるんです。そうした専門家を差し置いて引っぱり出されるのは、やっぱり基本である人間とか、宗教との結び付きがあると、認めていただけたからだ、と私は思ってますけれども。

千田 賢治の童話の中で、一番賢治自身が悩んだ問題が弱肉強食でしょう。鳥を大きな鷲が食べてしまふ、魚を鳥が食べる。それを権力的な弱肉強食の世界と肯定するのに抵抗があったんでしょう。どうして動物が他の命を奪って生きていかなけ

ればならないのか、人間も、動物や魚類の命をいただかなければ、生きて行くことができない。その問題に随分悩んだんですね。弱肉強食を当たり前の事実として、納得できなかったんですね。その問題が童話の中に、命の本源に触れる業の悩みとして繰り返し、繰り返し出てきます。

そういった問題は、宗教性の根本に触れているんですね。どのように理解していったらいいのか、宗教と科学の総合性、美しい意味でのドッキングを賢治は夢見ていたんだろうと思います。それが二十一世紀に懸ける人類の願いでもあると思うんですが、あの時期に既にこういう考えを持って悩んでいた。先見性があったと思いますね。

### ココロジを大切に——千田

山岸 科学技術が進歩し、また、物も金も豊富になりましたが、その過程の中で、人の心のすさまじ見え始めました。また、環境の問題が大きくなり上げられております。二十一世紀に何をどのよ

うに持ち込んだらいいのか、真剣に考えなければなりません、科学技術の問題、そして教育、心の問題などにつきまして、お話し合いをお願いします。

千田 近年の生命科学、宇宙科学、地球物理学などの進歩はものすごいですね。生命の誕生が三十六億年前、その中で人間が生まれ、人間の中に意識が生まれ、そして知性が生まれた。そうすると、生物生命の歴史ももちろんですけれども、宇宙そのものの全部が進化なんです。絶えず進化している。結局、それが近代以降の進歩主義、発展主義の謳歌につながってくるんですね。

しかし、核兵器まで生んだ現在、このまま右肩上がりに無限に進歩していったら破滅です。その一歩前のところまで来ていますね。

ところが、仏教の場合には、進歩はある意味では避けられない人間の業だが、とにかく一遍止まって考えようとする。未来でもない、過去でもない今、われわれが当面しているのは、現在なんです。

今ここにあるものに打ち込んだ時、充実感が得られる。そういうものを仏教は目指してきた。このまま進歩発展志向でいたら破滅します。二十一世紀は、とても後始末どころではないですよ。

他の生命を食っているわけで、避けようが無いわけですよ。

人間は伝統的にカモを食べてきたんだから、それをやめなさいと言うのは不可能だと。食べる時はかわいそうだと思いながらも、残さず無駄なく味わってもらおうというのが、われわれの取るべき態度じゃないですかと言って、とりあえず収めたいですね。

昔、仙台で講演会がありまして、永六輔さんが来たんです。私も出たんですが、そのころ、カモに矢が刺さった「矢ガモ事件」があったんですね。あるご婦人の方が、「永先生、矢ガモ事件をどう思いますか」と言ったら、永さんが憤然として「あんな物、殺して食べてしまえばいいんだ」と。ご婦人がびっくりなさった。

千田 仏教の立場においては、(花瓶の花を指し)これを物質と見ないわけです。全部仏と見る。だから全部この世の中の物は、無駄な物は何一つない、それぞれの、その部署において、自分を生かしているんだ。だから、生かしているということは仏なんだ、というふうにして見ると、この世の中のすべてが曼陀羅、仏様のつながりの中で生きているんだ、というふうな見方なんです。

言い方がちょっと激しかったこともあり、私にその場の取りなし役が回ってきました。人間は、植物だったらコメは食物であったり、ある意味で

よね。結局、一人の人間の中に、地球が全部入っている、あるいは宇宙が全部入っている。私は地球の子であり、宇宙の子である—という意識が科学的にも可能なんです。

物質でもそうなんです。一つの石ころの中にも宇宙の歴史が入ってますね。それは結局、宇宙は仏ということになる。

西澤 日本では「八百万の神」と言いますから。

みんな神が入っているという考え方なんです。

一つの東洋の特徴じゃないかと思うんですが、千田 儀式的な礼拝をすとか、しないとかという問題になると誤解されるが、結局人間はどこから来て、どこへ行くのか。なんのために



生きていくのかというところが、究極の問題ですね。哲学も、宗教も、科学もこれ

を追究している。結局、宇宙以外に生まれるところはないですね。

帰って行くところも宇宙ですね。それを感じることでできれば、安心がありますね。

西澤 文明と科学技術との融合ですね。私自身も貢献することになったのですが、光通信で世界中の情勢、映像が同時に見られるなんてこれまで不可能だったわけですが、それが手のひらに乗せているみたいに世界中の情勢が分かるわけです。

航空機が進歩したこともありまして、孤立して岩手だけで生きるなどということは不可能です。全世界とともに生きるということが、すでに科学技術の世界でも展開しつつあるわけです。ようやく仏教に少し追い付いてきた、ということでしょうか。

千田 非常に感動的だったのは、NASA(米航空宇宙局)のボイジャーが、計算された日時に、太陽系全体の写真を六十四枚撮って送ってきたことでした。人間の知性がそこまでいったことに、深く感動したんですが、結局その時感じたのは、人間は宇宙の中から脱出できない、宇宙の中にいるから安心できる、ということでした。

西澤 まさに科学技術と宗教が、今、融和しつつあるんですね。

千田 そうしないといけないですね。宇宙だけでなく、バイオテクノロジー（生命工学）の進歩にも実に目覚ましいものがありますが、その一方では人間性の内面的崩壊が危惧されている現代でもあるわけですね。私流に申しますと、エコロジーよりココロロジー、環境より心境、ですね。

### 物を考える教育を——西澤

山岸 二十一世紀へ持ち込む負の遺産も作っただれども、いろいろな進歩もみられた、というわけですが、子供たちにどういう視点で、どのような教育をしていくべきなのでしょう。

西澤 日本の、教育に対する考え方でいけないのは、過去の経験を大事にしないことですね。うたい文句につられて間違いをしでかす。一人ひとりがちゃんとした個性を持っているんだということをお忘れしてしまって、同じ形にしてしまおうとする。

知識の画一構造なんです、今のやり方っていうのは。

具体的に言えば入学試験も、教師が相手の子供たちのことをよく見て、自分にはこの子のいいところが分かるから、これをぜひ育ててみたいーと思っただけで、入れなかった方だって、自分（教師）には能力がないからこの子の長所は見つけかねる、他へ行ってみてはー、と言うべきなのに、「この子はだめよ」と言うからおかしなことになってしまふ。

人間にはいろんなDNAがあるわけですね。その中からどこが伸びるかを見抜いて伸ばしてやるのが教育だろうと思うんです。ウィリアム・アーサーワードというイギリスの教育哲学者が言っているんですけど、「凡庸な教師はただしゃべる」というわけですね。今、文部省の指導要領の通りにしゃべっている先生が多いですから、凡庸な教師になってしまふんです。

少しましな教師は、理解させようと勧め、もう少しましな教師は、自らやってみせるというんで

すよ。そして、ここまではなかなかいかないですが、最高の教師は心に火を付けるというのがあるんです。

その話が出てきたのは、日本が欧米式の勉強の仕方を取り入れようと、明治維新の後、世界中に出て行った。ロンドンに行った教育者がびっくりして帰ってきた。それは、ロンドンの教育学会が熱心に調べていたのは吉田松陰だった。たった一人の田舎の男が自分の命を捨ててまで、日本の近代化に短期間で成功したかーがイギリスの教育学会の疑問だったわけですね。

それは言うまでもない、さっきの若者の心に火が付いたんですね。日本の中にも素晴らしい教育があったわけですね。それがどうして、こういうふうになったかという方がむしろ疑問で、そこを考え直してみると、これからの方向が分かってくるんじゃないでしょうか。

日本人のいろんな才能を持った人を、とことん伸ばしてやって、全体に世界と競争していかなければならぬ時代に来ているわけですね。そこを

もう一遍思い出してみるべきではないかと思うんです。

山岸 千田貫首は、中尊寺の見学においでになった子供さんと触れて、最近つくづく思うようなことがありませんか。

千田 戦後の日本で、いい意味で普及したと言えれば、平等思想だと思います。ところが教育も画一化された。その一方で個性の重視を言っていますね。個性というのは「違い」ですよ。ところが生徒の中に一人でも違った子がいると、教師自身が安心できない。それで統一化しようとする。教わる方でも、先生が自分と違う教え方を他の子にすると、やっぱり落ち着かない。同じように教えてくれということになる。

「あなたと私は違う」この違いに耐え得る力、これが今の日本の教育に絶対必要ですね。自分と違う生徒の存在を認めて力を出させる教師が欲しい。

西澤 ロボットを育てているんじゃない。みんな同じにしたから、ちょっと変わった動きをしようと

「このロボットはだめだ」ということになる。むしろ貧困の時の方が相手の立場が分かるんですね。自分が身の痛みを感じるわけですから。それが今、みんな幸せなものですから、人の悲しみが分からないんですね、だから、非常に人間離れた、同じことをみんなやれやれというようなことになってしまふ。

物を考えない人が多いですね。教わったことだけをやってる。人間ロボットだと私は言っているんですけど、それだけに、何かあった時に対応能力がない。

原子炉が動いている時にも、そこで何が起きているかを考えないでやっている。教えられたことだけです。事故が起こりそうな状態になっても気が付かない。教わってないことは何もできないんだ。というのが今の教え方ですから、その辺に非常に大きな間違いがあったんではないでしょうか。

千田 西澤先生は大学生の時から先進的な業績を上げられてきた。東北にとって、ものすごい勇氣

を与える存在なんですよね。今の子供たちは才能が眠っている、それを開発できる体制になっていない。

今は、ゆとりある教育ということで、授業時間を減らしている。難しい数学を考えるよりも、やさしい方に行ってしまう。円周率も(文部省の方針では)3.14159までやらす小教点以下は切っちゃうんだそうですね。

将来の日本は、技術産業立国しかありませんよね。にもかかわらず理科、数学を敬遠するような態勢になっている。一から十までの力がある内で、その下の方に合わせていますから、これは将来の日本にとっては危ういことですね。

西澤 画一化ですね。日本人の持っている才能を伸ばしていかない。この間テレビで、狂言師・野村萬斎さんが出身小学校に行つて子供たちに狂言を教える授業を見ました。その時、萬斎さんは、「日本の芸道では、まず古典的なものを押しつけるんだ。型にはめるんだ。型にはめるといふことは、そこからどういふ自我が吹き出してくるかといふ

ことを考えて、自我が出やすいのをまず型にしてはめ込むんだ」と言っておられた。なかなか面白いなと思いますね。

しかし日本というのは、子供であれエキスパートであれ、みんな同じく「十」にするときには「十」にしてしまふ。つまり萬斎さんが言うように、始まったばかりの時は型にはめなさい、そのうちに自我が出てくる。要するに芸道で言えば「守・破・離」ということ。

そういう教育の過程は、時と場合に依じて、本当の才能を伸ばすために変えていかなければいけない。これがないんですね。

### 教育の原点、やはり家庭

山岸 最近、学校内や家庭内で多くの問題が起こっております。学校教育の前段階で内因する問題も結構あるのではないかと思うのですが。

千田 学校教育の歴史は百五十年位ですか。家庭教育は人類の歴史始まって以来ですから、数十万

年の歴史があるわけです。家庭に責任があるとか、学校に責任があるとかという責任問題ではなくて、一言えることはまず家庭です。

西澤 そのところをみな忘れてしまってますね。このごろの流行言葉で言うと、「複雑系」ってやつで、簡単な法則で結び付くものではないですから、やってみる、やってみて直していくというの、実は科学ということなんであって、一番科学的な手法を導入しなきゃいけない。そのためには長い間の歴史で積み上げて来たものを軽率に、捨ててしまつていいものではない。もう少し見直してみる必要がある。

子供の時に何をしつけるか、ということ、大人になって何をやらせるか、ということは全然ちがう面なんです。やっぱり家庭で、教えることはちゃんと教えなければいけない。

## 教え方で違う目の輝き——千田

山岸 教わった先生や、心の中に残る教育について、お伺いしたいのですが。

千田 教師という人がどれほど重要な結果を生むかという一つの例ですが、私が小学校四年の時に算数、そのころは算術と言ったんですが、答案を持って行ったら、「千田は算術はできねえな」と言われました。「デッキねえな！」この一言で算数が嫌いになってしまった。

そういう意味で感心したのは、西澤先生と同じ東北大の勝浦捨造先生です。私がかつて勤めていた高校で、大学進学のために夏休みに五年間連続でお招きしていた。ところが勝浦先生の数学に対する情熱、愛情はものすごいんですよ。燃えているんですね。陪席している私まで引き込まれてしまふ。

数式を書きながら、「数式っていうのは、美しいですねえ」「数学っていうのは素晴らしいですねえ」と、独り言のように絶えずおっしゃっている。

るんです。それが、生徒の数学への興味、関心、情熱を無限にかきたてることになるのですね。そういう意味で教師は自分の専門については、とにかく人一倍の情熱と愛情を持たなければいけないと教えられました。また、工夫もありましてね。

「このところが大切だから、小さな丸を付けておきなさい」と言うのです。大切なところは大きな丸を付けるのなら分かりますよね。何だと思ったら「忘れちゃ困る」と言う「小丸」なんです。

私も真似して、歴史を教えていたので、「歴史って面白いな」「人間ってのは面白いね」と努めて言うようにしたんです。すると違いますが、生徒の目が輝いてくる。

西澤 偶然ですね。勝浦先生に私は中学校の一年と二年で数学を教えてもらっているんです。今のお話、非常によく分かります。あれだけ子供たちに対する愛情を持った先生は、あまりおられませんか。だから本当の教育者ですよ。

子供たちに分からせてあげようとか、どう説明したら子供たちが面白がって分かってもらえる

か、というのが、いつも勝浦先生の考えていることだったんですね。実は私も、大学に入るときに数学基礎がやりたいなと思ったのも、相当、勝浦先生に負うところが多いですね。

千田 それぞれの違いを教師はちゃんと見抜いて、それはそれなりの教え方をして伸ばしてやらなければいけない。

西澤 私はよく言うんですけど、教育は、原則的に一対一だと。多数と一人ではないんですね。だから一人一人の子供を先生が見てなければいけないですよ。ただ全体として講義をずっとやるわけですから、その時の子供たち一人一人の反応をつかんでいて、授業が終わってからでもいいです。から、一声掛けてやるということが、その子に非常に大きな将来を与えてくれるんじゃないでしょうか。

千田 私が初めて教壇に立った時に、大先輩の先生が、「一番心掛けなければいけないのは、なんだか言って見る」という。何だか分からない。すると「えこひいきはいけない。生徒は敏感だから、

すぐ分かってしまふ。とにかく公平にと心掛けろ」と言われました。

「しかし、それだけじゃない。もう一つ言ってみろ」と言う。それが先ほどの一対一でした。生徒は全部違うんだから、同じに扱ってはいけません。その違いを見極める、見極めてその子のいいところを、一対一で伸ばしてやる。その目が必要だと。教育の本質に触れることを一番最初にその先生に教わった。

考えてみると、平等に見る平等性智、個人の違いを見る妙観察智、これはお釈迦様の教えにちゃんとあるんですね。その二つが必要だと。

## 少子化を考える社会に——西澤

山岸 厚生省によると平成九年の特殊出生率は一・三九であります。将来の国民の生活に深刻な影響を与えるだろうと言われる少子化問題につきましてお聞かせ願いたいと思います。

西澤 今、あえて申し上げたいのは、ご婦人方が

男性に負けずに立派な仕事をされる方がいらっしやるのは、よく分かるんです。が、子供を産んで育てることは大変な大事業だと思っんですが、大事さを忘れかけているんじゃないかという気がするんです。人口が足りなくなるから産めと言っても、なかなか産んでくれないわけです。自分たちの可愛い子供たちを産むことに対して、本当に考える気になってくれる社会が早く戻ってこなければいけないと、私は思っていますよ。

千田 日本の母親が子供を産まなくなりました。活力がなくなっている。亡国の兆候です。子供を産むことが嫌だ、育てる苦労をしたくない…本来人間が持っていなければならぬ活力が今の日本の女性になくなってきた。

西澤 自分の子供を産んで育てることの、本当の幸せを見失っているんじゃないですかね。産むときの、産んで育てる時のうれしさ、満足感というものを見失ったということが、おかしな方向に走りだしている根本的な問題じゃないかと思うんですけれどね。

山岸 それともう一つ、最近、街を歩いたり、いろいろな会話の中で、日本語の乱れを感じることはありませんが。

西澤 第二公用語を英語にしろと言う人が出てきているんですが、人間は言語でモノを考えるらしいですね。ですから日本語でモノが考えられない人たちが、その後、英語を勉強したからといって、通じようがないわけですよ。『英語明せき意味不明』になりかねない。

日本がまさに国際的にならなければならぬんですが、日本語で自分の考え方をちゃんと考えるというベースがなかったら、これは外国に行ったら通用しないね。いわゆる「変な外国人」にされてしまう。自分たちの生まれ育った国の言葉で、しっかり勉強しておくということが必要だと思っ

んですね。  
この間、「美しい日本語」というテレビ討論会に引っぱり出されたんです。あいつは言葉が汚いから、あいつにしゃべらしてやろうと思われたんじゃないかと一ひがんだのですが。

いつも家で言っ嫌な顔をされるんですが、子供たちが「追い抜く」「追い抜かず」という言葉を使うんですね。私たちの世代で追い抜くというのは、自分がその車の先に出るということですが、このごろは、「追い抜かず」と言うんですね。

どうしてそんなことになってしまうのか分からないのですが、これは実用的に困りますよ。例えば隣の座席の人が、運転している人に向かって、「追い抜かせ」と言ったら、われわれの世代では、自分がわきに寄って他の人を先にやるというのが「追い抜かず」なのであって、それこそ言葉の意味が違ってくるんですね。交通事故にだってなりかねないじゃないですか。

そこまで日本語は乱れている。同時に困るのは、人間のモノの考え方に、論理性が欠如してきていることです。家でよく言われるんですよ。「そんな考え方、流行らないの」って。流行で考えられたいらしないのであって、考え方は考え方でちゃんとお互いにびしっと決めておかなければいけない。

論理的にモノを考えると地道な積み上げが日本人の中から消えていってしまったんじゃないかと、心配しています。

きちんとした英語力を——千田

千田 早稲田大の原子朗先生が、宮沢賢治の語い(兼)ボキャブラリーを全部調べて、「新宮沢賢治語彙辞典」(東京書籍)を昨年出版されました。

西澤 私も持っています。  
千田 この中で宮沢賢治が、コメという言葉が嫌いだから使わないという。イネは出てくる。コメは商品ですね。賢治は商品に関心を持たない。好きじゃない。生産者の立場だからコメでなくてイネです、というお話しです。

語彙辞典を作るくらいだから言葉には敏感な方なんですが、講演をお願いした後の懇親の席で、つい私が鼓舞するという意味で「インスパイア」と英語を使ったんです。そしたら「いや、貫首さん、なるべく日本語で話してください」。しかし

「鼓舞する」という言葉を普通使えない。人の心を鼓舞する「コブ」は、文字を思い浮かべないと理解してくれない。だから英語のインスパイアの方が分かりやすい、と。

日本の学者が書く論文は、英語で書かないと外国から評価されない。アメリカの学者も日本の学者の書いた論文を読んでくれない。その面でも日本人が英語が出来ないために、立ち遅れているということがあるそうですね。それで第二公用語の問題が出てきたと思うんですが。

そういう意味で英語の必要性が求められていることもあるんです。私は、正しい意味の日本語を理解し、そしてそれを伝えていくという誠に重要な意義を十分に分かってはいますが、しかしこれからは、英語も必要であると思います。

ギリシャ大使が来られて私が英語で案内したんです。金色堂を出ましたら、「私今、西行を読んではまして」って言うんです。初めからそうおっしゃってくればよかったのに。念のために「願わくば」と言ったら、「花のしたにて春……」。これに

は参りましたね。以来、案内に英語は使わないんです。大使さんはタイシタもんですね。(笑)

われわれは日本語だけでいいか。相手に通じる英語を勉強していかないと、相手の好意にこたえる善意が通じない。

西澤 中間子論を発表された湯川秀樹先生がノーベル賞をもらったころ、外国の学者が日本語を勉強しようとしたんですよ。それは湯川先生の中間子論を直に読みたい、そのために日本語を勉強したいと言う人がいるんです。

貫首さんがおっしゃった通りなんですが、日本語がみんなに理解されないから英語で語るということと同時に、中身の方を上げていけば、そういう問題が逆に外国の人が日本語を勉強してくるようになる面もあるんですね。中身がないうちに英語を勉強するというのは最低なんですよ。

千田 五月雨、時雨とか、ああいう日本語の微妙な使い方というのは、ものすごい豊富ですよ。色でも、萌葱色とか、縹色、茜色とか言います。ぜひとも残したい言葉ですね。

西澤 当用漢字は結構だけれども、それ以外の漢

字も使わせると言ったんですよ。ルビをふってね、そうすれば言葉で理解するベースができるんですよ。それを、使つてはいけない、と言う。最低限これだけは知ってなさいということはいいけれど、それ以外のことをむしろやっちゃいかんというような決め方をしたらいけないと思うんですね。

深い自分を見る大切さ——西澤

千田 西澤先生は旧制の二高、私は旧制浦和高です。当時、学校の授業は出なくていいと先生が言うんですね。人生観なり、科学観といったものを他人まかせでなく、自分の力で築いてみる——というふうなことを、しきりに言う。学校の成績がいと、あまり幅が効かない、

それがいいか、どうかは別として、それくらい在意気込みがあった。学校の授業にきちんと出て、成績がいい、そしてどこかいいところへ行くという功利性を打破するわけ。今は全部功利主義になっている。

一遍、若い時に功利的な考え方を捨てて、裸になつて考える時期が必要ですね。

西澤 本当にやりたいことを、自分の中で見つかるんですね。

千田 心の時代だなんて言われますが、禅の坊さんの言葉で「心を主とするなかれ」って言います。心を主人公として頼ってはいけない。「心の主



「一念法界」  
読み下し  
意訳

(いちねん ほうかい)  
念を法界に 一にす  
念は 散りやすく 集まりにくい。  
その念を 一つに 集中する。  
法界は 当面する おのれの 所作。  
この所作の中に すべての 人生と世界がある。



となれ」：心を動かす主人公にならなければならぬ、という言葉があります。

「心の時代」に一番いい言葉だと思うんです。モノじゃない、心が大事、心が大事と心にばかり頼っていたのではいけない。心ほど不安定で頼りないものはない。

自分の心、意識にアイデンティティー（主体性）をもって、いつでも自分を統制できる—その統制の仕方、自分の欲望を制御できる—一種の様式がだんだんできて来るんですね。そこに「自我」の確立があると思うんです。

西澤 結局、深い自分を見ることなんです。若者だから友達も欲しいし、金も欲しいと思ってる。しかし、本当にそれが一番大事なものと、自分の心の中で読むわけですね。

私たちが高等科に入った時、失礼ですが三流文学者の小説があり、非常に身近な話なんです。

だから高等学校に入ったばかりの男の子たちが持つ煩惱をみな書いてあるわけですよ。そういう身近なところからモノを考えさせたいんですね。

ある意味で陽明的なところがありまして、自分に格好つけていない。自分そのものの欲望を整理するところから始まっているんですね。

しかも、これはだめだからやめなさいと言われるんじゃない、比べてみて自分は本当はどっちを取るかなというところから自分の中でやって、やっぱりこっちななところから自分の中でやっていますね。それがロマンだと思うんですよ。

### 広大な自然、岩手の財産

山岸 そこで、岩手県立大学の建学の精神である「素心知困」について、お聞かせ願いたいのですが。

西澤 「素心」というのは、自分の気持ちを素直に見直さないという事ですね。「知困」というのは、漢時代の『礼記』という本にあるんです。自分が一つのロマンを持ち、それを具体化していると思う時に力が足りないことに気付く。農村で売られてしまう女の子を助けてやろうと思っ

た時、凶作でコメが取れない、その時に農学的な知識、技術があればそれを助けてやる事ができる。

そういうときに自分の技術的な力をなさを、自ら悲しむわけですよ。それを「知困」と書くんですね。

だから、ぜひ岩手の若者たちみんなに自分たちが培われてきた美しい気持ちというものを、もう一度見直して、知識や技術を把握してほしい。その上でその技術を世界中の人たちに分けてあげるために、しっかり勉強するという気持ちを確認してほしいというのが、「素心知困」の気持ちなんです。

千田 広大な自然が岩手の財産ですね。特に賢治が愛した多くの自然を大事にしていかなければいけない。日本人の伝統文化の中の基本ですからね。

さきほどの「後始末」の話、環境を大事にし、公害問題を収束できるように科学の分野を、東北の若者、岩手の若者に切りひらいてもらいたいものですね。

山岸 改めて、岩手のこれからの若者に、何か熱いエールを送っていただきたいと思いますが。

千田 東北は、歴史的にも気象的にもマイナス要素があったようですが、そのマイナスをプラスにするというところに、人間すべて生きがいがあるんじゃないかと思うんです。事実、われわれの先輩が、マイナスをプラスにする努力をしてきてくださった。西澤先生しかりです。ものすごい負の要素を持って、それを突破してたくさん業績を上げてくださった。そういう意味で「マイナスをプラスにしていけ、若者よ」と言いたいですね。

西澤 岩手の人たちは、よく自分を見つめたり考えたりするチャンスは多い。美しい自然環境の中で、お互いに美しい気持ちを持った人たちがいるということが、これは岩手の若者にとって、大変恵まれた境遇ですよ。物理学者・仁科芳雄先生の誕生の地に行きますと、記念館に「環境は人をつくり、人は環境をつくる」という碑が建っているんです。まさに岩手は人をつくっているんですね。そういうベースの上から、ある日、自分が思った

ロマンを、この世の中に確立し実現していくという情熱に、かき立てられてほしい。その上でやったら、大変素晴らしい仕事をする方がますます出て来るんじゃないでしょうか。岩手の若者に期待していますよ。

山岸 新世紀を目前にして、岩手の若人に、誇りとそして、しっかりした指針をもってもらうために、内容の濃い、まさに記念碑的対談を、ありがとうございました。

千田孝信氏

大正十五年（一九二六）江刺市出身の孝海氏の長男として栃木県日光市に生まれる。昭和二十二年（一九四七）京都大学文学部哲学科卒。二十三年（一九四八）日光観音寺住職に就任。また長年にわたり高校教諭を勤める。日光保護司会長、栃木県保護司連盟副会長、日光市文化協会会長なども歴任。平成元年（一九八九）更正保護功勞により藍綬褒章受章。同五年、中尊寺貫首に就任。同時に一切の公職を辞す。現在、天台宗「一隅を照らす運動」副会長。

西澤潤一氏

大正十五年（一九二六）仙台市生まれ。昭和二十三年（一九四八）東北大学工学部電気工学科卒。同大学院特別研修生として研究のあと、三十七年から同大教授。名著

教授を経て平成二年（一九九〇）から八年まで東北大学総長。この間、半導体研究所長、電気通信研究所長などを歴任。同十年から岩手県立大学長。日本学士院賞、ジャック・A・モートン賞、文化勲章など受賞、今年六月に日本人初のエジソン賞を受けた。工学博士。ミスター半導体の異名をもち、著書多数。

本対談は、本年七月二十二日付「岩手日日」新聞一面・8、10面に掲載されたものである。読書諸氏より好評をいただき、県外の方にも広く読まれる機会をとの声に応え、同新聞社のご承諾・ご協力を得てここに再録した。

〔編集子〕

## 基調講演 『慈覚大師円仁にまつわる伝説と信仰』

大正大学教授 木内堯央

基調講演というんですけれども、これから三崎先生はじめ諸先生が蘊蓄を傾けていろいろお話をいただきます、その問題提起というところが大きいです。そんなことをさせていたきたいと思いません。この間、東京電力提供のスポットを見ておりましたら、ギリシャのソクラテスという町があるんですね。その街の灯りというのをやってまして、見ておりました。シンポジウムというのはギリシャの言葉で、お酒を飲みながら談論風発をしたというのがもったったそりでございます。そうした雰囲気が進められたらと思います。いただいた題は、『慈覚大師円仁にまつわる伝説と信仰』です。

はじめに、①「慈覚大師の伝記にまつわる伝説」です。慈覚大師円仁様の伝記というのは寛平法皇

ご撰述の『慈覚大師伝』に書いてあることは、おむね史実なんでしょうけれども、そこに触れながらそれ以上にプラスアルファしてあるようなことと、あるいはそこないこと、そんなことを世の中で慈覚大師伝説として取り上げています。そういうものを覗いてみようと思います。

②は慈覚大師の開基伝説ということで、ご当山の「慈覚大師開山千五十年」を初めとして全国的に慈覚大師円仁のご開基という言い伝えを持っているお寺さんが、天台宗のみならず各宗にわたって随分ございます。そういうお寺さんの開基伝説の紹介というよりは、問題点というようなことを挙げさせていただきます。私のところは東京は浅草の観音様からみて隅田川の対岸でございますが、浅草の観音様もそうですけれども、私のところも慈覚大師の開基でございます。千五十年のお祭りをし損なって、今慌てているところがございますが、そういう寺伝を有する所が沢山ある。東北、関東、あと表にございますけれども、全国的にそういう開基の寺伝がある。そういうところの



開基伝説に関する取り扱い方みたいなお話を話していくことに致します。

三番目に、今までの①と②の取り扱い方というようなことで、シンポジウムの大きい表題であります『伝記・伝説に関わる史実と信仰』ということに、少しでも皆さんにお考えいただく材料が提供できたらと思っております。

つぎに、地図と表が④と⑤と二種ございまして、④は徳一菩薩の開基と伝える東北地方を中心とした寺院でございます。資料④これは『全集日本の古寺』の「中尊寺と東北の古寺」という中で、ちよっと私が書いた中へ、出版社の人が綺麗にト

レースしてくれましたのがこれでございますが、これは塩入亮忠先生の「徳一法師雑考」という論文の中にあった一覧表を写させていただき、地図の上へ落とさせていただいたものです。

最後の⑤が、慈覚大師円仁の開基というふうに伝わっているものです。これは不完全で申しわけありませんが、東北地方にしましても、後でお話するようにもっとたくさんございますけれども、現在天台宗の寺院として存在する所を確かめて、地図に落とせるものを落としていったら、二十四カ寺しか確認できなかったということです。

この資料⑤の依拠になりましたのは、一九六四年に福井康順博士の編纂になる『慈覚大師研究』（天台学会編）の中に、関口眞大教授が「慈覚大師鑽仰の一側面」という論文を提出されてまして、わが同級生の本間孝康氏が、大正十一年（一九二二）刊「全国寺院総覧」の中から慈覚大師開基のものを、関口先生のご指導で拾い上げて一覧表にしてくださいましたものがあります。それに依ったものでございます。

□

地図の説明を先にいたしましたけれど、もとへ戻りまして、まず、①の慈覚大師の伝記にまつわる伝説、そちらのほうを探してみました。

a 誕生の奇瑞から始まりまして、b 伝教大師摩頂の夢、これは慈覚大師が幼いときに夢に身の丈六尺ぐらいたいへん色の白い立派な面立ちの僧形の夢を見て、そしてその僧に頭を撫でられた。「この方が誰かわかるか」とそばの人に言われて、「わからない」と言いましたら、こちらが比叡山の大師（最澄）様だというふうに言われた。後に廣智に連れられて比叡山へ行きまして、その目の前にいらっしやっただ澄さま（伝教大師）とそっくりであったという、そういう話を並べました。

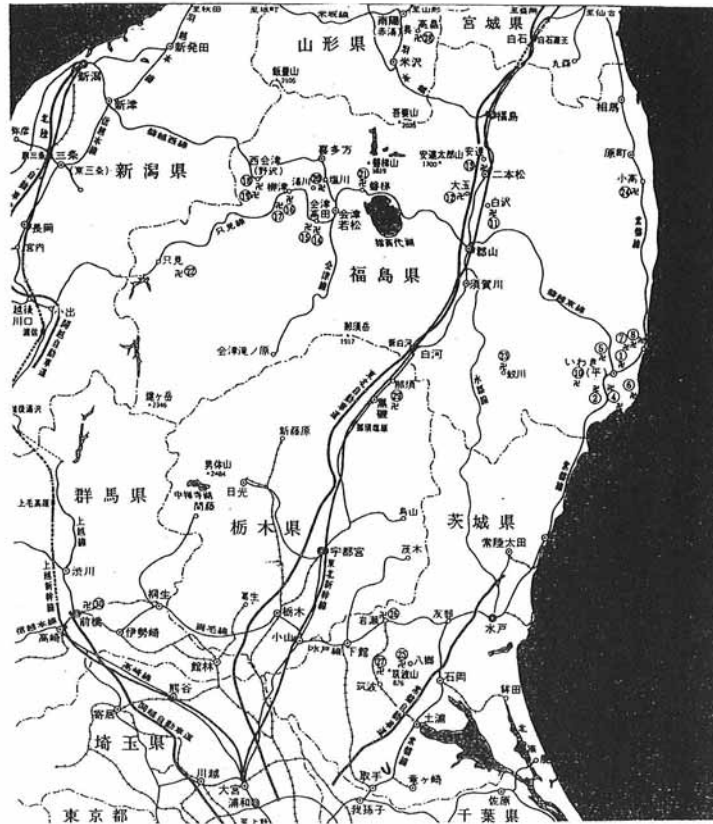
c は天の甘露で平癒というのは、慈覚大師が体の具合が悪くなって横川へ籠もって、その病気が治ったと、そのような話。d 往生、慈覚大師が往生された話とか、e は一道という方が、慈覚大師の院に妙音を聞いたという話です。f は横川の椶

資料① 慈覚大師の伝記にまつわる伝説

- |                          |                                    |
|--------------------------|------------------------------------|
| a. 誕生の奇瑞                 | 三宝絵下、往生極樂記5、法華驗記上、今昔11、私聚百因縁集（因縁）7 |
| b. 伝教大師摩頂の夢              | 三宝絵下、法華驗記上、今昔11、因縁7                |
| c. 天の甘露で平癒               | 往生極樂記6、法華驗記上、因縁7                   |
| d. 往生                    | 往生極樂記6、法華驗記上、因縁7                   |
| e. 一道、円仁の院に妙音を聞く         | 法華驗記上                              |
| f. 横川の椶木の空において如法經をおく     | 今昔19                               |
| g. 会昌の難にあい不動の加護を受ける      | 今昔11、打聞集10、宇治拾遺13                  |
| h. 額額城に捕らえられ薬師に助け出される    | 今昔11、打聞集10、宇治拾遺13                  |
| i. 音声足りず尺八にて阿弥陀經を吹き伝える   | 古事談3                               |
| j. 渡唐のとき鬼界ヶ島の難を觀音を念じて免れる | 因縁7                                |
| k. 立石寺、松嶋寺を建立            | 因縁7                                |

資料④ 徳一の仏教文化圏

『全集日本の古寺』全18巻 第1巻「中尊寺と東北の古寺」  
昭和59年7月18日 第1刷発行より



寺院名	所在地	寺院名	所在地
① 忠教寺	福島県いわき市平四ツ波	⑩ 妙心寺	安達郡白沢村
② 竜勝寺	常磐白鳥	⑪ 観音寺	安達郡白沢村
③ 禪長寺	小名浜玉川町	⑫ 相応寺	大玉村
④ 法海寺	常磐	⑬ 円東寺	安達町
⑤ 常福寺	平赤井	⑭ 法用寺	大沼郡会津高田町
⑥ 密蔵院	平豊間	⑮ 仁王寺	河沼郡柳津町
⑦ 葉王寺	四倉町葉王寺	⑯ 光泉寺	福島県河沼郡柳津町
⑧ 恵日寺	四倉町玉山	⑰ 如法寺	耶麻郡西会津町
⑨ 波立寺	久之浜町	⑱ 勝善寺	河沼郡湯川村
⑫ 相応寺	大玉村	⑳ 勝常寺	耶麻郡磐梯町
⑬ 円東寺	安達町	㉑ 恵日寺	耶麻郡磐梯町
⑭ 法用寺	大沼郡会津高田町	㉒ 成法寺	南会津郡只見町
⑮ 仁王寺	河沼郡柳津町	㉓ 高蔵寺	東白川郡鮫川村
⑯ 光泉寺	福島県河沼郡柳津町	㉔ 慈徳寺	相馬郡小高町
⑰ 如法寺	耶麻郡西会津町	㉕ 西光院	茨城県新治郡八郷町
⑱ 勝善寺	河沼郡湯川村	㉖ 月山寺	西茨城郡岩瀬町
⑳ 勝常寺	耶麻郡磐梯町	㉗ 筑波山中禪寺	筑波郡筑波町
㉑ 恵日寺	耶麻郡磐梯町	㉘ 大聖寺	山形県東置賜郡高島町
㉒ 成法寺	南会津郡只見町	㉙ 正福寺	栃木県那須郡那須町伊王野
㉓ 高蔵寺	東白川郡鮫川村	㉚ 西光寺	群馬県前橋市
㉔ 慈徳寺	相馬郡小高町	㉛ 長国寺	(不明)
㉕ 西光院	茨城県新治郡八郷町		
㉖ 月山寺	西茨城郡岩瀬町		
㉗ 筑波山中禪寺	筑波郡筑波町		
㉘ 大聖寺	山形県東置賜郡高島町		
㉙ 正福寺	栃木県那須郡那須町伊王野		
㉚ 西光寺	群馬県前橋市		
㉛ 長国寺	(不明)		

資料② 慈覚大師の開基伝説

関口眞大「慈覚大師讃仰の一側面」『慈覚大師研究』(1964) 東北地方 91カ寺

円仁開創・中興寺院の分布

地方	県	寺院数				合計 (割合)
		開基	中興	その他	計	
東北	青森	1	0	3	4	91 (19.0%)
	岩手	13	1	17	31	
	宮城	9	2	9	20	
	秋田	1	1	4	6	
北	山形	8	4	5	17	170 (36.0%)
	福島	12	0	1	13	
	茨城	10	2	8	20	
	栃木	20	4	3	27	
関東	群馬	7	0	3	10	67 (14.0%)
	埼玉	20	1	1	22	
	千葉	24	7	8	39	
	東京	20	3	29	52	
	新潟	3	0	5	8	
	長野	12	2	4	18	
中部	静岡	4	0	5	9	95 (20.0%)
	石川	0	0	5	5	
	福井	0	0	4	4	
	愛知	2	2	16	20	
近畿	岐阜	0	0	3	3	41 (9.0%)
	京都	4	4	16	24	
	大阪	8	0	32	40	
	兵庫	3	0	5	8	
	和歌山	4	2	9	15	
中国	鳥取	0	0	1	1	3 (0.6%)
	岡山	2	0	1	3	
	広島	2	0	1	3	
四国	香川	0	0	2	2	5 (1.0%)
	高知	0	0	1	1	
九州	福岡	0	1	1	2	5 (1.0%)
	佐賀	0	1	0	1	
	大分	0	0	2	2	
計		211	40	221	472	

道塩千尋氏著『日本中世の説話と仏教』所収「慈覚大師廻国・寺院草創伝説について」による

伊沢不忍「慈覚大師と東北文化」山寺村役場刊(1951) 東北地方133カ寺

\*蝦夷地大白山善光寺縁起(文化3年 1806)

\*奥州南部宇曾利山釜臥山菩提寺地藏大士略縁起

資料③ 慈覚大師伝説のよみかた

勝野隆信「慈覚大師入定説考」『慈覚大師研究』(1964) …勸請開山

道塩千尋『私聚百因縁集』の慈覚大師説話

「慈覚大師廻国・寺院草創伝説について」『日本中世の説話と仏教』所収(1999)

和泉書院

塩入亮忠「徳一法師雑考」『新時代の伝教大師の研究』(1943?) 大東出版

木の空中に如法經がおかれたというお話。そういう項目がありました。gとhは慈覚大師が入唐の折に、前は武宗の法難、会昌の法難にあつて、逃げる途中で不動明王のお堂に隠れた。そうしましたら、追手がわからなくなって難を逃れることができたというお話であります。

その次のhは、**纈**（つむぎ）城というんでしょうか、これは入唐の途中で、恐ろしい鬼がいるところへ捕らえられて、薬師如来に助けられたという話。「纈」は、「きくとじ」などとも読みますけど、この纈という字は『今昔物語』の一本では、糸偏に頼むという字になっているのもありますが、纈纈というのが多いと思います。fは音声足りず尺八にて阿弥陀経を吹き伝える。これは比叡山でよく聴かせていただくお話がありまして、慈覚大師が声明などをお伝えになるときのことに関わる。

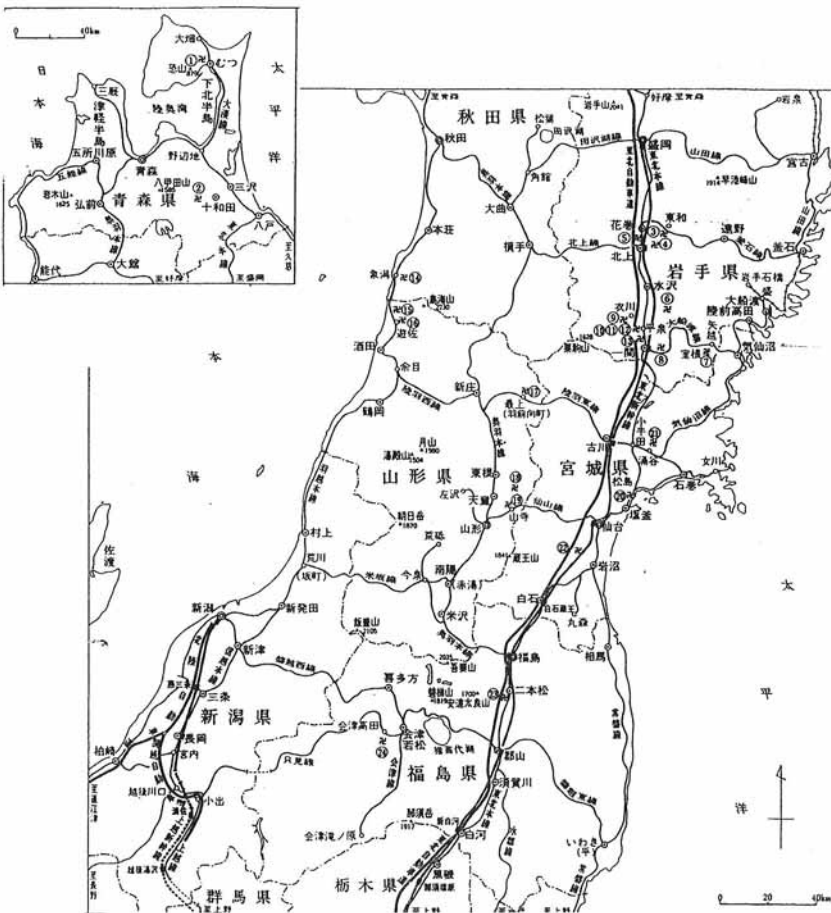
それからjが渡唐のとき、これも纈纈城みたいな話ですけど、鬼界ヶ島の難を觀音に念じて免れる。kは、これは殊さら書きましたのは、因縁と書いたのは、一番上のほうにあります『私聚百因

縁集』という本の中に一括して出てくる話で、第二の項目とも関係があるでしょうが、松嶋寺、立石寺の建立の話という事です。これ以外はないんじゃないかと思うんですけど、説話として残っているものでは、こんなところが、伝記をちょっとはみ出た話というところではないか。それがどういう本に出てくるかというのを下に示しておきました。

また後でも触れることがあると思いますが、この中で『私聚百因縁集』という本は、今の茨城県あたりに住んでらっしゃった浄信という方が書いたものらしい。鎌倉時代というだけで、いつごろの成立だかよくわからないのですが、鎌倉も後期だろうと思われる。この浄信という方は勧進聖であったというんですね。勧進聖というのは、それぞれのお寺さんの復興や何かの募財、勧財、そういうことをして歩くために、そのお寺の縁起とか仏教のことなんかを皆さんに伝えて歩くという、そういう聖であります、そういう一人であった。こう見ていきますと、この『私聚百因縁集』

資料⑤ 慈覚大師の開基

関口眞大「慈覚大師讃仰の一側面」『慈覚大師研究』より



寺院名	所在地	寺院名	所在地
① 門通寺	青森県むつ市田名部	⑭ 紺満寺	秋田県由利郡象潟町
② 正法寺	十和田市切田下切田	⑮ 剣積寺	山形県飽海郡遊佐町
③ 毘沙門堂	岩手県和賀郡東和町	⑯ 永泉寺	同上
④ 極楽寺	北上市稲瀬町	⑰ 東善院	同上
⑤ 染黒寺	北上市黒沢尻町	⑱ 法善寺	同上
⑥ 黒石寺	水沢市黒石町	⑲ 立石寺	山形市山寺
⑦ 建高寺	東磐井郡室根村矢越	⑳ 瑞巖寺	宮城県宮城郡松島町
⑧ 観福寺	一関市舞川	㉑ 篁峰寺	遠田郡涌谷町
⑨ 雲際寺	胆沢郡衣川村	㉒ 岩蔵寺	岩沼市志賀
⑩ 中尊寺	西磐井郡平泉町	㉓ 鏡石寺	福島県二本松市亀谷
⑪ 千手院	西磐井郡平泉町	㉔ 竜興寺	大沼郡会津高田町
⑫ 常住院	西磐井郡平泉町		
⑬ 毛越寺	西磐井郡平泉町		

(『全国寺院名鑑』による)

というのは、慈覚大師のこういう伝説、伝記に関することは、まだたくさんあるんですけど、熱心にこれだけ一生懸命書いていらっしゃる。こんなところを気をつけて見る必要があるのかな、というのが第一番目のことでございます。

□

第二番目は、言うまでもなく開基伝説で、先ほど申しました関口先生と本間氏とが一生懸命調べになってつくってくれた慈覚大師開基というものの一覧表がございまして、北海道教育大学の追塩千尋先生が論文の中で表にしていた、それによって整理させていただいたものです。九州、四国、中国、近畿、中部、関東、東北というふうに、これだけ慈覚大師の開基を伝える寺院が合計二一〇カ寺、それから中興と称しているもの四〇カ寺。その他というのは、たとえば仏像を刻まれたとか、何かおやりになったというようなことが二二一件、合計四七二例になります。その表から追塩先生はパーセンテージまで計出しておられます。東

北だけまとめると、合計九一例で一九％に当たる、こういうような、合計割合を出していただきっており、こういう分布でございます。それで関東、東北で慈覚大師円仁のその開基ないし中興とするのは、これだけたくさん、二八一という例が見えるということになります。

もう一つ、われわれが注意しなければならないのは、これも前の慈覚大師のご遠忌のときですか、その折に山寺村役場のほうで伊沢不忍先生の『慈覚大師の東北文化』というのが一九五一年に出されておりました、こちらのほうはさらに東北地方にしまして、関口先生の九一に比べると一三三例もあるとしますのでね。どうしてそれだけの差が出てくるのかというと、さきに申しましたように『全国寺院総覧』というのはお寺さんにカードを配って、みなで申告してできたものですよね、ですから、中にはお宗派が変わったりいろいろしまして、そういう寺伝も消えたり、あるいは失礼な言い方かもしれないけど、隠されたり、そういうこともあったかもしれないですね。それから、以

前はあったけども、廃寺になった所もあった。それらは関口先生の手法の中では捉えられてこないわけですけども、伊沢先生のほうはそういうものまで、調査されまして、一三三という数が出たということでしょう。

一例をあげますと、北海道のあの有珠山のところの「蝦夷地大白山善光寺縁起」というのがありますが、この有珠山の善光寺の慈覚大師開基というの、関口先生の方の表では、拾ってないわけですね。伊達町の町史なんかにその原文が出ておられます。あるいは、関口先生も拾ってありますけれど、「奥州南部宇曾利山釜臥山菩提寺地藏大士略縁起」、いわゆる恐山のことでございますが、こういうようなものもございまして。

□

ここで、問題はその東北地方のことでございます。東北地方について言いますと、正規の伝記といいたし、『慈覚大師伝』で見えていきますと、果たして慈覚大師は一体いつ東北へいらっし

やったか、という最重要の一点が、まあはっきり言えば、うまく読み取れないですね。よく言われることは、伝記の中におおよそ横川を復興されました、それから天長年間（八二四年～三四年）、その辺に当たる部分のところに、「爾後」と書いてありますね、その後という意味でしようかね。「遙かに北土（北）に向かい、広く妙典を宣揚し」と書いてあるんですね。遙かに北土、北の国に向かって、広く妙典、法華経でしょう、法華経を宣べられた、こういう書き方をしているんです。これが一つの便りでございます、しかしこの天長年間ということになりますと、それぞれたとえば関東、東北のお寺さんの開基の年号と合わないというところがずいぶんあると思いますね。

たとえば私のところ（東京都墨田区の如意輪寺）は嘉祥二年開基というんですね。面白い話でありまして、私のところが嘉祥二年なんですけど、成就寺といううちの本寺があるんですが、その成就寺の本寺は寛永寺でありまして、つまりうちは東叡山寛永寺の孫末になります、その本寺さんの方は、

嘉祥元年の開基というんですね。辻褄が合うようにご本寺さんと末寺とでは一年の差をつけるのか、よくそんなことがあります。あとは浅草寺の方の中興の年代なんかとも係わって考えなければならぬのかというふうに思います。

事ほどさように、その慈覚大師の開祖とか中興とかというその年号というのは、『慈覚大師伝』だけで割り切って、「このところへ入れればちよいどいい」という、そういうことにもならない。一番困りますのは、あれだけの十年にわたる入唐求法されてお帰りになって、そんなに早い時期に東国の方まで来られたらうか、なんてそういうことを思ったりもいたしますね。

そんなこんなで、拙寺でも慈覚大師開基ということは、檀家を初めみんな申しあげてはおりませうけれども、その確信はなかなか得られない。ましてやその頃のもの何か、傍証でもあればともかくですが。そういうことで、しがたない私のお寺のことだけで言いますと、それを全部の例にしちゃ申しわけありませんが、慈覚大師の開基という

ことについては、いろいろ問題点がそれぞれにあるのかもしれませんが。

しかし、とにかくそういうふうな開基伝説というものを、言い伝えどおりにまとめてみると、史料②の表のようにもなるということですね。

東北地方の地図に落とされたのを、先ほど見ていただきましたけれども、かつて、私が真言宗智山派の杉崎先生のお寺に招かれたことがあります。埼玉の白岡というところですね。もう少し行くと栃木県、あるいは群馬県とも近いところですね。そこをご本堂落慶に「円仁のことを話せ」と言っていたのです。他宗、真言宗智山派のお寺さんで申しわけないなと思いつながら、天台宗の、延暦寺三世座主に就かれた慈覚大師のことをご紹介いたしました。そしてその後で近所のお寺さんと一緒にご飯をいただいたりして、その折に「うちも慈覚大師の開基ですよ」「うちもそうだとみんな仰っしゃる。曹洞宗の方もいるし、真言宗智山派の方もおられますし、天台の方もいらっしやいました。そのときに、関東地方で古い荒川の

流れに沿って、ずうっと慈覚大師開基のお寺が並んでるんじゃないかなんていう話が出たのです。これをもっと厳密に調査でもやってみますと、あるいはその実態がわかるのかもしれませんが。そしてそれがいろいろなことにつながるのかもわかりません。

そんなことを含めて、まだまだ慈覚大師開基という寺伝をつなげていくと、いろいろなことが出てくると思うわけですね。

最後に、慈覚大師伝説のよみかたとして出してみましたのは、勝野隆信先生が『慈覚大師研究』の中で、「慈覚大師入定説考」というのをお書きになってます。これはご存じのとおり日蓮上人が「慈覚大師の事」という御遺文の中で、慈覚大師の御首が羽州（山形市）の立石寺にあるという、そういうことを書いてらっしゃる。これは逆なことを言いますと、立石寺で慈覚大師様がお亡くなりになった、入定されたという伝説の一番古い例なんですね。一番古く伝わってる例、それから以降

の言い伝えとかそういう書いたものはほつぽつ出てきたりするんでしょうが、間違いなく日蓮上人という方が書いたという、そういう年代から推すと、その辺が一番古い。残っている史料という意味ではそういうことになります。

□

そこでちょうど勝野先生もご紹介になっておりますとおり、立石寺の下から見ても岩が突き出てる、あの下例の入定窟でありますけれども、その調査が昭和二十三年（一九四八）十一月に山形県史跡名勝天然記念物調査委員会が、その翌年六月二十四日に東京国立博物館の小林剛技官等が調査されました。さらにその年十月に東京大学医学部人類学の鈴木尚先生も一緒になって、調査されております。そうしましたら、いわゆる慈覚大師のお棺といいましゅうか、その中にはお骨がってますが、例の木彫の御首があったわけです。そういうことを勝野先生はご紹介くださいまして、山

形立石寺には慈覚大師入定説と開宗の寺伝、この両方の伝説が残っている。立石寺の開基は慈覚大師円仁さんのお弟子さんといましようか、その流れをくむ次のお弟子さんですが、安慧あんゑという方が、羽州講師、承和十一年（八四四）に出羽の講師に任ぜられた。それがきっかけで師僧である慈覚大師円仁のお名前を勧請して、ご開山として崇めたのではないか、要約すると、こういうふう論文の中で考証されております。これは、一つ立石寺だけに限ったことではなくて、この、そういうことが一つの事例ではないかと思うわけです。それでは慈覚大師円仁が「北土」この東北地方に実際に来ているのか、いないのか、いろいろ問題でございしますが、北海道の有珠山の善光寺の場合を考えてみますと、寺では慈覚大師のご開基とされています。が、下北半島の恐山や、他にも津軽の十三湊というところがございます。言い伝えではそちらのほうに山王十三宗寺というお寺があって、そこも慈覚大師の關係であったというんですね。そうしますと、あちら側、北海道の道南松前

藩の方まで、江差のほうまで一つの範中に入ってくるわけでございますよね。そこにその一つの流れというか、地域的な關係で有珠山にも慈覚大師開宗伝説というのが起こったのではないかと、ということが言われております。これは北海道教育大学の追塩先生の論文で、その辺のところをいろいろ検討をしてくださっております。

恐山の方にしましても、恐山の円通寺は曹洞宗ですか、近くに天台の蓮華寺があるわけですが、地藏堂をどちらが管轄するかという問題があると、天台系の蓮華寺さんが地藏堂を管轄するとすると、そこに慈覚大師開宗伝説、勧請開山と言っているかどうかわかりませんが、そういうようなことが行なわれたのかもしれない、というふうに、これまでいろいろな方が考察しておられるわけです。

先ほどの『私聚百因縁集』というのが、浄土宗の浄信という勧進聖の撰だという話をいたしました。が、そういうような勧進聖との關係とか、ある

いは関東の場合には、関東天台と言っています。が、そういう学的な組織、そういうものができ上がっていくと、その中でいろいろなお寺さんが慈覚大師の名前を標榜するとか、そういう所が多分にあったのではないかと。

それから、折角、地図を出しておいて、触れないのでは申しわけありません。で、私がどうも気になるのは徳一關係のお寺さんというのは、これはおおむね薬師如来が中心になっております。慈覚大師を伝える寺院は、多く天台の浄土教、その常行堂なんか次々と南から北へ向かって、関東から東北へ向かって造られていく、そういう勢力の広がりというものに重なって見えてくるわけです。それまでの薬師信仰が後退していく、そして阿弥陀如来像、阿弥陀堂が増えていく、これは天台宗の勢力が北へ向かって行ったわけなんだろうが、そういうことと先ほどの勝野先生のおっしゃる勧請開山とかという問題は、これは重なっていることなかもしれません。

『慈覚大師円仁にまつわる伝説と信仰』ということで、問題点を十分指摘できたかどうかかわかりませんが、注意すべきは以上に指摘したようなところを、どういうふうに丁寧にこれから見ていくか、あるいは解釈していくか、また一般に言われているのは、行基伝説とか、聖徳太子の伝説・信仰とか、そういうものと慈覚大師とが重なるところもあるといった指摘もあります。問題は多岐にわたりますけども、天台宗の東北への伸展の指標とされているということも申し上げて、問題提起のつもりなので、あとは先生方にいろいろお話を伺いたいと思います。（拍手）



# 『伝記・伝説に関わる史実と信仰』

大正大学教授 木内堯央 先生  
 早稲田大学名誉 三崎良周 先生  
 教授天台宗勸学 斎藤圓眞 先生  
 大正大学講師 斎藤圓眞 先生  
 中尊寺佛教学 佐々木邦世 先生  
 研究所主任

司会 実は、先ほど三崎先生のほうから要望がございまして、最初に佐々木邦世さんの方から、口を切っていただきたい。彼は史学の出身でございまして、伝記・伝説にかかわる史実という意味で、問題提起をされた当人でもございまして、木内先生とはまた別の角度から、お話ししていただければと思っています。どうぞよろしくお願います。



佐々木 それでは私から考えておりますことを、申しあげます。お手もとの資料「寺伝へ中尊寺慈覚大師開山の検証」は史実はどの辺にあるかをご覧ください。

中尊寺の寺伝について言いますと、大体、既存の中尊寺の説明書、解説書のベースを成すのは石田茂作博士（昭和五十二年没・奈良博物館長）の執筆監修された『中尊寺大鏡』（昭和十六年）とか、『中尊寺』（昭和三十四年・朝日新聞社）でございしますが、仏教考古学という分野を拓かれた茂作先生においてなお「厳密な史的考証の上からは、未だ慈覚大師開山というお寺の伝え、これを支持するに足る有力な史料のあるを知らない」と、冒頭に書いてございます。果たしてそうなのか。支持するに足る有力な資料は、本当に無いのか、ということですね。

次に、中尊寺で大きな著書というと、昭和四十二年、金色堂修理落慶の年に河出書房新社から刊した『中尊寺』（藤島亥治郎監修）ですが、その序に、

当時の貫主でございました今東光師が、春聴じゃなく今東光の名で自著してありますから、そのとおり記示しましたが、こう書いています。

「寺伝によれば當山の開基は慈覚大師円仁と言ふ。歴史学者は明徴を欠くが故にこれを信じない、しかしながら天台の一沙門として私は絶対にこの寺伝を信じて疑わない。」

ということになりますと、確かな根拠がない故に学者は信じていない。しかし、われわれは断乎信ずると。これでは、それ以上の実りある思索はそこで終わってしまうのでございませぬ。これも本当に明徴を欠くのかどうか――。

そこで検証いたしますと、現存する史料の中で慈覚大師開山の初見は弘長二年（二二六二）の座主下知状の写しでございませぬ。で、ありますが、それあった、と言つてとびつくわけにはいかないんですね。これは、裁判の一方の言い分を陳べたものなんです。当時、中尊寺には天台宗の衆徒側と、真言の流れを汲む人々がいて対立していたわけです。その相論の場で、衆徒側のほうから言わせる

と「すなわち訴えるところは」とあって、「慈覚大師開山として数代相承の上、弘台寿院と有り」と言つただけなんです。そもそも天台宗を弘めるという意味の弘台寿院と称したのだから、天台を本旨とするのが当然なんだという、これはあくまでも一つの主張なわけです。だから、これで慈覚大師開山だと確定したものではないわけです。

つぎに、先ほど木内先生がお話しになったように勸請開山ということが当然考えられるわけですし、それに事実、山内の法泉院には「慈覚大師の法孫円祥が」と伝えてきた。拙院、円乗院と申しますが、やはり「大師の法孫清雅が開基」ところなっております。真珠院はもっと詳しく、同じく「法孫覚応が元慶三年（八七九）の草創」と伝えられているわけでございますから、つまり大師の門弟のさらに弟子の方々が下向して来られて、草庵に法灯を点じ、あくまでもそれを大師の開山ということにした、勸請開山ですね。宗教的な虚構と申しますか、そういう荘厳をなさった、謂れ・抛り所をつくられたのだと、こう解釈もできます。

□

さて、私が申し上げたいのは、第三の視点です。『吾妻鏡』の「文治の注文」の記述から何が読みとれるか。この注文は平泉研究に携わった誰でもが引くところなんです、実際には、史学研究者においてもその読み方が正確か、一定しているかというところ、そうでもないんですね。その「関山中尊寺のこと」というところですね。

當国の中心を計り、山頂の上に於て一基の塔を立つ。また寺院中央に多宝寺（多宝塔）有り。釈迦・多宝像を左右に安置す。その中間に関路を開き旅人往還の道となす。

関山の山頂に一基の塔を建てた、と書いてありますね。また、別に寺院中央に多宝寺（多宝塔）あり。釈迦・多宝の像を左右に安置す、と。その中間に関路を開き、旅人往還の道となす。何度も読まれた文章であり、また論著に引かれる文章ですが、私は、このほど著いた『平泉中尊寺』金色堂と経の世界——（吉川弘文館）の中で申し上げたのは、

この釈迦・多宝を左右に並べたというのは、多宝寺の中のこと、多宝塔の中のことであり、「その中間に」というのは、この一基の塔と多宝寺（塔）との間、のことを言うんですよと書きました。いろいろお手紙頂戴しましたが、概してそこまで読めなかった、と。ながらく平泉の遺跡調査を指揮してこられた藤島亥治郎先生にして、「何十年も中尊寺をやってきたが、ここに気がつかなかったのは、何とも悔しい思い」と認めてお手紙くださいました。これは釈迦と多宝の間じゃない。塔と塔の間でなければ、関路なんか開けるわけがないのでございます。これはまったく明白なことでございますが、さて、そこで何が読めるかという今度は道路の問題じゃないんですね。多宝塔のほかに一基の塔があったということは明らかかわけですが、それが何であったかということですが、

そこで、史料にあけておきました『門葉記』如法経の「如法経（らんしょうけい）濫觴（らんしょう）類聚記」ですが、

〔山家要略記〕

根本如法堂（楡皮葺き方五間の堂一宇）

安置す。多宝塔一基（高さ五尺）

また旧き白木の小塔（如法経を奉納す）

塔の右に金色の釈迦像一体を安置す。

塔の左に多宝仏像一体を安置す。

天長十年慈覚大師年四十に及び：命の久しからざるを知り、叡山の北洞に幽閉のところ、（ちぢき）塾居三年練行……石墨草筆手自ら法華経一部を書写し四種三昧を修行す。すなわち彼の経を以て小塔に納め、堂中に安置し、首楞嚴院と号す。後人この堂を如法堂という。  
（仁明天皇）嘉祥の皇帝、慈覚大師の奏状に依り作料を給い造立し、如法、一乗妙法蓮華経ならびに数体の仏・菩薩像を安置す。……

長元四年八月七日 前小僧都覚超

この場合には、多宝塔の中にもう一つ白木の小塔があつて、それに如法経を奉納したとあります。そして、「すなわち彼の経を以て小塔に納め、堂中に安置し、首楞嚴院と号」した。後人この堂を如法堂と言った、と。そしてこれは嘉祥年間のこと、慈覚大師の奏上によってこれを造立し、

妙法蓮華経と仏像を安置した、ということが記されております。ここが大事なところでございます。

つぎに『今昔物語』巻第十一を挙げておきましたが、それには

「慈覚大師始めて楞嚴院を建てたること」第

二十七

如法に精進して法華経を書き給ふ。すでに書きおはりて後、堂を起て、この経を安置し給ふ。如法経、是に始る。皆、誓を発して「この経を守り奉らん」と誓へり。

とあります。注意されますことは、ここに「如法経、是に始まる」というんですね。慈覚大師が初めてこの楞嚴院を建てたということ、「如法経」というのは、慈覚大師に始まるのだと。ただし、經典を如法に書写するということは、むしろそれ以前からやっていたんですが、それが法華経の書写である場合に如法経とだけ言っているのです。そして、長元四年の覚超「如法堂銅簡記」に見える上東門院（道長の娘、彰子）の如法写経の埋納を契機

に如法経が普及した。兜木正亨氏もすでに指摘されているように、それが即法華経を指し、鎌倉時代になると「その殆どが如法経とあるだけで、固有名詞として慣用されて」いた、ということですが。

ここまで申し上げると気がつかれたでしょうか、中尊寺は寺院中央に多宝塔があり、それと別に山頂に、それと対を成すもう一つの塔があった。その塔というのは如法塔であつたらう。そう見るべきで、それこそは慈覚大師に始まる如法経を安置した塔であつた。中尊寺は、大檀主藤原清衡の発願に成る紺紙金銀字交書一切経書写という大事業を通して、つまり堂塔建立の当初より、経山としての寺観を呈していたことに思いを致せば、だからこそその依拠として慈覚大師に始まる法華経書写すなわち如法経を納める塔を山上に仰ぎ、そこから必然的に開山慈覚大師鑽仰となつたものであろう、と受けとめられるわけです。

史的考証の上からは、慈覚大師開山を支持するに足る有力な依拠は、そこにあるのでございませ

て、「明徴を欠く」のではなくて、史料をそこまです読めなかったということではございませぬ。

□

ところがこれにも落とし穴が一つございませぬので、あらかじめ補説として申しておきます。慈覚大師開山だと言いなながら、中尊寺は公文書である文永元年（一二六四）の関東下知状（鎌倉幕府による裁判の判決文）の中で、「當寺（中尊寺）は園城寺の法を伝う」と書いてあるんですね。なんだ違うじゃないかと、慈覚大師だつたら山（比叡山）であり、いわゆる三井園城寺の方は、智澄大師円珍（寺門）の法灯ですから違うんだということになります。これも、史料に「隆覚申す如くんば」とあるんです。これについて高橋富雄氏は次のように解釈しておられる。「研究史上から見れば、平泉寺院が園城寺の法を伝える寺門派天台宗であることを確認しているところに、これまでの他のどの史料にも見られない重要性がある」（『中世文書から見た平泉問題』）と、こう論説されてるわけです。しかしそんなこ

とはございませぬ。まず一つには、園城寺の法と

わざわざこの裁判の中で取り挙げているのは、意図があつたことだと思われまふ。それは、源氏は三井園城寺とは特に深い因縁がありまして、はやく義家のころから三井寺を氏寺とし、遺髪を園城寺青龍院に埋めたと伝え（『吾妻鏡』）、ことに頼朝の代になつてからは明らかな事象だけ挙げても、

・ 文治元年（一一八五）、鎌倉の勝長寿院落慶供養導師 三井本覚院公願

・ 建久元年（一一九〇）、上京し園城寺青龍院修理料として砂金十兩施入す。

・ 建久三年十一月、公願、鎌倉永福寺供養に下向。

・ 建久四年、永福寺の隣地薬師寺落慶式 導師は園城寺真円

・ 正治元年（一一九七）、頼朝死す。遺命により遺髪を地藏尊胎内に納め、園城寺唐院に安置される。

・ 「境内古図」の如意寺の分に大慈院の一字あり。

「鎌倉右大将、朝敵の怨霊を宥めんが為にこれを建立す」

といった具合です。

文治五年（一一八九）に奥攻め、平泉を攻めたときも、また、こちらから凱旋してすぐ鎌倉に永福寺を建てるときも、皆頼朝は園城寺と連絡の上やつてるんです。そして、頼朝の遺命でその遺髪が園城寺唐院に納められたわけです。頼朝がやったということは、鎌倉幕府にとって、単なる先例というよりは正義の拠り所なのでございまして、つまり、ここに問題として取り上げられる文永元年の関東下知状に引くところは、平泉寺院の衆徒側の代表である隆覚の言い分ではない。鎌倉幕府に訴訟に及び、そもそも源家に縁の深い、殊にも幕府の正義の拠りどころである頼朝が厚く帰依した園城寺との関係を強調することで裁判を有利に導こうとしたということは十分考えられることとして、高橋氏が言われるようなことは何も「確認して」などない。

なお、申し上げれば、中世寺院や個人における、法流の帰属というものは、近世における宗派観のようなものとは異なつて、個々に、かつ多岐にわ

たり、決して普遍的でも確定したものでもない、ということをご認識いただきたい。

してみれば結論として、この中尊寺の場合において、現存する史料の中からも、「開山慈覚大師」は汲みとれる、それなりの根拠のあることで、慈覚大師本人が来たかどうかじゃなくて、それを鑽仰するがゆえに、当初の伽藍設計の中において如法塔を建てたこと自体に、慈覚大師は十分に意識されていた。したがって以来代々大師を開山として鑽仰してきたのは自然なことである。こういうことでございます。

司会 非常にご熱心なご提案で、まことにありがたいございました。鎌倉幕府の裁許状や『今昔物語』、あるいは『吾妻鏡』等に出てくる文面の正確な読み方から始まりまして、むしろ慈覚大師円仁師を鑽仰する必然性がある、開山にしたのではなからうか、というようなご提案だったと思います。

慈覚大師円仁は、西暦八三八年から八四七年までの九年間、たいへんな苦勞をされて、ことに唐

の武宗のとき、法難（会昌の廢仏）に遭いつつも、天台宗が当時まだ不備であった特に密教面の聖教等を伝え、受法研鑽して帰られまして、吾が法門が大いに充実した、ご承知のとおりでございます。続きまして、斎藤圓眞先生からは、大師円仁が中国へ入唐求法された、それに係わる何か新たなお話を付け加えてくださるということで、期待しております。



斎藤 このシンポジウムのタイトルは、「史実と伝説」でございますが、事実の誤解が新しい伝説となり、今現在、史実として定着しつつある、そういう一例につきましてお話をさせていただきます。

慈覚大師が入唐なさいまして、そして約十年の求法の末に日本へ帰ってまいります。その帰ってくる際に、長年ずうっと大師につき従って苦勞を共にした丁雄萬という従者がいるわけですが、彼を中国に置き去りにした、そのようなことが最近刊行された中央公論社の中公文庫『円仁の入唐求

法』に深谷さんという人が現代文になさっているわけですが、その中にはっきり書かれているんです。

円仁は仏教弾圧で長安を追放され、帰国の船を探して約二年間各地を放浪するわけです。なかなか帰国船がつかまらない。ようやく最後に見つけた船が赤山で待っているというところで、また急遽赤山の方へ戻るので、どうも間に合いそうもない。そこで丁雄萬という従者に「先に赤山へ行って、その船を待たせておいてくれ」と。それを逃しますとまた帰国できないわけです。そこで中国人の人を一人雇って、丁雄萬、正式には丁勝小麻呂を先発させます。この「丁勝」という姓の人たちは、今日で言う福岡県と大分県の県境のあたりにたくさんおりまして、いわゆる帰化人秦氏の系統でございます。したがって丁雄萬は中国語を話せるわけですね。もともとは水夫として遣唐使船で行くわけですが、大師があちらで遣唐大使から従者として与えられる、そういう人です。この丁雄萬の記事が、それ以後出てこない。

これは実は『入唐求法巡礼行記』を英語に翻訳して、そして細かい注をつけられたE・O・ライシャワー博士（前の駐日アメリカ大使で、ハーバード大学の東洋学研究所の教授でもありました）が、別の研究書『*Pen-nin's Travels in Tang China*』の中で誤まった解釈をされたのが原因となっております（ただしこの誤まりは博士の英訳という偉業自体を損なうものではありません）。この研究書は田村完誓氏によって『世界史上の円仁―唐代中国への旅―』として日本語に翻訳されておりますが、残念ながら誤訳がありますので、その部分を正しい訳で申しますと、

……しかし今度は呪わしい逆風が長く吹き続けることとなった。円仁は金の船（金珍という人の船なんです）が、円仁等に乗せないで出発することを恐れて（田村訳・乗せないうちは出発しないであろうと判断して）、彼の従僕、丁雄萬を派遣して、陸路（山東半島の突端）赤山へ急がせた。これが日記に登場する丁の最後となった。おそらく赤山で船便を失った彼は、そのまま中国に留まることとなったのであろう。

このように書かれております。その後、いろいろな先生方がまたこれを承けて叙述されるわけです。

例えば、「七月十三日の記録は、丁雄萬が登場する最後の場面である、おそらく赤山で船便を失った彼は、ついにそのまま円仁と別れて、中国に留まることになった」、こういうものもあります。

あるいは、これは兩宮義人氏が下野新聞社から出されているものですが、それによりますと「風信が一週間も早ければ、この忠実な従僕は同行できたであろうに、風は気まぐれであった。丁雄萬の運命がどう狂ったか知る由はない」このようにだんだん悲劇的に書かれているわけです。そして先ほど申しました最も一般に読まれます中公文庫の中では、「陸路（海陽県、赤山に至る手前）乳山に着いたとき、円仁等はすでに金珍の船に乗船出航した後で、彼は置き去りにされた」、このように発展していってしまうわけです。

ところがこれは事実と相違して、まことに遺憾でございます。慈覚大師は決して置き去りにな

んかしていません。先ほど、佐々木さんが、もの読み方をすっかり読まなければいけないとおっしゃっておりますが、『巡礼行記』もそうです。

簡単な記述ですが、それをきっちり読むと、やはり円仁と一緒に帰ってきているわけです。何よりも、その後に智証大師円珍が入唐いたします。その折に太宰府に提出いたしました請文、それに対して公驗、今で言うとお出航許可証というんでしょうか、さらにそれが福州に着きますと、向こうでまた公驗、ビザが貰えますが、智証大師が直筆で書いた申請文、これら二通は国宝として上野の国立博物館に現在も所蔵されておりますが、その中にはっきり随行者名として訳語丁雄萬、歳四十八とあるわけです。

『巡礼行記』もきちんと読みますと、

〔唐大中元年（八四七）・日本承和十四年七月〕

廿日到乳山長准浦。得見金珍等船。

便載三人物。上船便発。

という記事が後に出てきます。その中の「載人物」を「人物を載す」というふうに読むからいけ

ないのであって、「人と物」、つまり付き従ってきた弟子の惟正、それから従僕の丁雄萬、さらに円仁の消息を尋ねて延暦寺から派遣されてきた性海、この四人と荷物を船に載せた、というふうに読まなければいけないと思うんです。そうすれば確かに丁雄萬は、慈覚大師に従って一緒に帰ってきたということがわかります。

それではなぜ慈覚大師が丁雄萬を先に行かせたか、これは各地で求得した聖教類という大きな荷物を秘かに運びながら旅しなければならぬので、どうしても身軽な人に先に行ってもらわなきゃならないと、そういったようなことがあったからです。

いずれにしろ、中公文庫のような根拠のない解釈が活字になりますと、慈覚大師という方は十年も付き従った従僕を彼の地に置き去りにして帰ってきたなんていうような事実でない伝説ができてしまうということになってしまいます。まことに遺憾なわけです。ですからこの点については、ぜひ、事実を知っておいていただきたいと思うわけで

す。とりあえず、この一点だけお話させていただきます。

司会 ありがとうございます。特にご承知のように入ドウィン・O・ライシャワーさんの『Ennin's Diary - The Record of a Pilgrimage to China -』『Ennin's Travels in Tang China』という有名な学位論文がございます。それを斎藤先生が述べられたように、亡くなりましたが立正大学教授の田村完誓という方が、『世界史上の円仁―唐代中国への旅―』というところで翻訳されたわけですが、最後のほうに出ている今の丁雄萬という水夫といえますか、その通訳を兼ねた方の消息について誤りがあるということがございます。これは、まだ、どこにも詳細な経緯・論証が論文報告されていないようです。その証拠というものが、後に円珍さんが大宰府のほうに提出したそういういわゆるビザ申請に当たるところに、ちゃんと四十八歳という丁雄萬の名前が載っているということですね。

それでは、最後になりましたが、天台宗の勸学、密教ご専門の三崎良周先生にお願い致します。三崎先生は例の『慈覚大師研究』にも「慈覚大師の密教における一、二の問題」と題されまして、蘇悉地経に見られる本尊、仏頂尊について論考されておりです。この中尊寺も藤原三代の秀衡公の念持仏と伝えられている、一字金輪仏頂がございませうが、そういう点にも触れてお話を賜ればと、よろしく申し上げます。



三崎 失礼いたします。今回のこのシンポジウムは、慈覚大師の伝記と伝説の合間、それを目標として、その間に何かがあるか、何を考えられるかということが、一つテーマ

であったように初めのころの通知にはありません。私、慈覚大師の伝記はだいぶ丁寧に読みましたんですが、いわゆる伝説まではなかなか手は伸びませんし、またあまり考えるところをしながらかかったのですが、今回のテーマは「伝記と伝説の合間」という非常に微妙なところを狙った研究で

ありシンポジウムであると思われ、それで一人だけでおやりになったんでは、ちょっともの足りないだらうと、そこでパネラーとして三人を集めて、そして木内先生の話はどういうふうにか意義あらしめる、ということ考えたのではなからうかというふうに思っております。

とにかく私は伝説についてまではあまり考えませんでしたので、これをどういうふうに取り扱ったらいいかということを思ったわけです。

言うまでもなく諸国回遊の伝説といえは、弘法大師が圧倒的に多いですね。あるいは天台でいうと、性空上人とか、奈良時代に『靈異記』に出てくる東大寺の大仏建立に力を尽くした行基などがいますが、そういう人の、やはり同じような話が、あっちにもこっちにも伝えられているわけでございます。こういう話をするによって、むしろその祖師といいますが、そういう方々が全国にその足跡を示し、それでそこにお寺が建ったということの証明にするわけですね。

私たちは普段、教理においても、歴史的なことに

おいても、事実ということを目がけて研究をしておるわけです。伝説・説話を狙うというようになことはあまりしておりません。伝説・説話を狙いとする考え方というのは、これはよく言われる民俗学で、柳田国男氏とか、ああいった方々の学問には、民俗学的なものとして、そういう伝説が非常に用いられます。そこにおいては、信仰的な問題ばかりではなくて、その土地でなければわからないような面白い伝説がちこちにある。それがまた一つの問題になるわけですね。

そういうことはどうして起きるのかと、それをどういうふうには評価したらいいかと、評価の問題になってくるわけですが、そういうことを考える学問もあるわけですから、われわれがこの伝説をもとに信仰のあり方というものは、昔はどうであったかということを、われわれは知ることができるところです。今日いわゆる学問的なものにみんななってしまうと、話に面白くなってきておるわけですね。昔はこのような伝説的な話しによ

私はあまり経験ありませんけれども、大正、昭和の初めぐらいまでは、そういう喩え話みたいなのが、布教師の話の中にも、たくさんあったのだと思うのです。これを今も話してきますと、やっぱり話の辻褄が合わないというところのほうで、目についてしまうようです。今は理屈的に納得できないと、どうも話も進まないということになってしまふので、いわゆる伝説・説話というものが布教にはあまり重んじられなくなってきております。しかし、かつてはそういうことになって伝播していたということは言えるわけです。

しかし古くとも、例えば書写山の法華経談義とか、ああいうふうなものを、もう少し今の布教なんかに取り入れていいのではないか、その題材ではなくて、その話っぷりみたいなものを、もっと取り入れていいのではないかというふうに思うことはあります。ですから、昔のものはみんな通用しないという意味でなくて、説話の中にある真实性というものを、どういうふうに見つけていくかということが、最も大事なことであろうというよ

うに思うわけです。

それ故に、あっちにもこっちにも慈覚大師がおいでになったということを、それをどういうふうにわれわれが受けとめていくかということにおいて、その話は真実にもなるし、単なるお話で終わってしまうということにもなるわけです。

そこで伝記というものは、やっぱり事実を書いたものが伝記であり、伝説というのはそれを何らかの形で脚色したものと、一応区分けができるだろうと思います。そこで目的に応じて、その内容を変えていくわけですね。誰がどういうふうにして変えていくかと、根拠のないところには、そういうものを変えて話をつくるわけにいきませんから、しかし何かの根拠があれば、その話をもっともらしくこしらえていくというところにおいて、いわゆる伝説、おのずからにできる伝説もありますが、作爲的にできた伝説も少なからずあるだろうというふうに思うんですね。このところをわれわれがその作者の気持ちになって理解していくことは必要だろうと思います。もちろんその本を

丁寧に確実に読むということも必要ですけども、やっぱり作者の気持ちというものを把握しないとイケないというふうに思うわけです。

こんなことを言っていると、もう切りがありませんので、いい加減にしますけれども、例えば今日のお話でも、これは一例ですが、木内先生の話の中で、gのところですが、慈覚大師が入唐して会昌の破仏に遭ったとき、不動明王の加護を受けた、ということが『今昔物語』等に出てる。こういう伝説について余計な知識はないほうがいいということも言えるのです。それは、慈覚大師のときには、いまだ不動信仰というのはほとんど行なわれていなかったと言っただろうと思います。これは非常に大きい問題です。一般には不動明王信仰が日本に入ってきたのは弘法大師空海が唐から請来してから、というのが定説のように言われますが、私は智証大師円珍がまず初めて、その次にはその弟子の、比叡山無動寺の相応和尚ですね。これらの方々が一番早くに不動信仰を持ったと思

われるのです。弘法大師ということになると、波切不動の話があるんですが、これは『秘藏記』（密教の伝承に関する重要な解説書）などよりもっと後ですね。『秘藏記』の中には五大明王の一として出てくるんです。軍荼利明王とか、降三世明王とか、不動明王とか、五尊の中の一尊としては出てくるんですが、単独に不動明王が出てくるというのではない。しかしそれを真言宗では採って、波切不動に結びつけるのです。唐から帰ってくるときに、不動明王が現れて、剣で波を切ってそれで無事に日本へ帰ったという話です。その不動明王を祭ったのが初めだという話などもあります。が、しかし実際見ると、五明王の一つとして書かれているということがありますし、もう一つ、不動明王の姿形、これ美術品に姿形の変遷がありまして、それを確かめると、智証大師あたりが將來したもの、胎藏図像というものがあるので、この中にある不動明王像が最も古いということです。密教図像といえますと現図曼荼羅をすぐに出しますけれども、こういうところにやっぱり

美術史の方の見解が非常に必要になってくるわけです。事実というものを、われわれはどういうふうに見ていったらいいだろう、また、この先後を争うという意味ではなくて、信仰がどのようにして起きてきたかということについては、やはり年代的、それから人というものを、はっきりさせないといけません。

どちらからか漠然と盛んに行なわれるということもありますけれども、しかし問題によってはやはりある人間がそれを伝播させた、また軌道に乗せたということも、このことの大きい要素として考える必要があるわけです。そういったようなことで、いわゆる真偽というものを見窮めることができます第一で、その真偽を見るためには、やはりいろいろな文献を正確に読まないといけない。そしてその時代のほかのものと対比して、これはやっぱり飛び跳ねだというようなことも考えてみないといけません。

先ほど、木内さんの紹介されたお話で本寺の仏さんが、嘉祥元年と言っていましたね。これはちよ

つと無理なんです、慈覚大師円仁はその前年の承和十四年に博多へ着いたんです。そしてその年は博多で過ごして、嘉祥元年になってから博多を出発して四月か五月頃に比叡山へ着いたのです。

これは相当はつきりしていることですから、それは無理なんです。しかしその話の意味は別のところにあるのでしょから、そのところを強調すればよろしいわけです。伝説と伝記との合間を行くという、非常にこれはユニークな学会であろうというふうに思っています、今日ここにおいでの方も、山家学会で企画したことこのういう意味合いというものを、やはりよくお考えいただければ、というふうに思います。また後で何かありましたら補足いたしますよう。(註)

(補註) 三井寺に、智証大師が観見して絵師に画かせた不動明王像の絶品が奉祀されている。「黄不動」という。実はこの画像には不動明王像の特徴である肩掛けが画かれていない。ある研究者はこれを目し、肩掛けはインドにおける階級身分を示すもので、これを画いていないこの像はインドの状況を知らない者の画像である、と低く評価している。しかし智証大師が請求した胎藏図像の不

動明王像は肩掛けをしていないのである。胎藏図像は善無畏が大日経を漢訳する際、みずから画いたものとされている。これは伝承説と事実と交錯する顕著な事例である。

司会 どうもありがとうございました。

今、三崎先生がおっしゃった木内先生の資料をもとにしまして、例えばgの「会昌の難にあい不動の加護を受ける」という『今昔物語』の話で、しかしまあその「会昌の難」あの当時には不動信仰というのはなかったんだ、波切不動の信仰もあつたかどうか、そういう伝説と事実ということになりますと、いろいろな問題点が出てくるということですね。智証大師円珍あるいはその後の相応和尚と続いて、不動尊の信仰が盛んになった。胎藏図像、あるいは現図曼荼羅等ございますが、そういうようなものをちゃんと歴史的に考察すると、いろいろと問題が出てくるんだ、というお話でした。

せっかくの機会でございますから、時間の許すかぎり二、三フロア・ディスプレイに持って

いったらいいかなと思いますので、ご質問等ございましたら、どうぞ。じゃあ西郊先生。

西郊 斎藤先生にちょっとお伺いしたいと思えます。慈覚大師のご誕生地について、いろんな説がございます、それぞれおれのとこだ、否、おれのとこだっておっしゃるようですが、その辺についての意見を伺いたい。

斎藤 『日光山紀行』に「盤窪と云ふ所あり。

慈覚大師生湯浴みたまふ所とかや」とありますが、実際はどうかとなりますと、服部清道先生がお書きになったものですとか、所見もいくつかございまして、私も実際にあそこ(栃木県下都賀郡岩舟町下津原手洗窪)のところへ行ってみましたけれども、それぞれがみなさんご自分のところだというふうに信じて伝えておられ、また、それなりのものもあるには在るわけです。産湯をつかったと言われている池は、今でも現存して横に祠が建っております、祠の中はちょっと覗けますが、何か石が置いてあるぐらいなんですけど。ただ、慈覚大師のお父さんというのは、あの辺の駅長であったという

ことは、佐伯有清先生もお書きになっておられます、おそらくそういうことではないかと思えます。場所の特定についてはちょっと、その程度しか今お答えできません。

司会 よろしいでしょうか。あと数分ございますが、佐々木先生、ひと言ありましたら。

佐々木 木内先生の資料ご覧の通りいっぱい数字が並んでおります。ですが、数字が多いということが、即事実ということではないわけです。なぜ多いかというと、江戸時代になって新地建立の禁止令のためです。新たに自由にお寺を建立して、税金逃れされちゃ財政が困るわけで、既存の寺院に限る。それで宗旨は何々、本山はどこで、それから開山は誰と、由緒の書き出しをさせられるんですよ。で、俄に作った所も多かったんだと思いますね。だから私は、この論文が関口先生の名前に出されましたときに、「寺院総覧なんかには依つたものの、いくら数値を分析して表示してもどれほどの意味があるのか、疑問ですね」なんて生意気申しまして、大先生の不興をかった覚えがあります



すが、今でもそう思いますよ。むしろ、表われた数値は少なくとも、伝承の中にはしっかりと受けとめるべきもの、宗教的虚構として受けとめるべきものもあるでしょう。事実と認められないから、事実でないから意味がない、ではなくて、不確かなものの中にもそれぞれの意味があるわけですから、逆に言うと、事例の数がいっぱいあるから事実だ、ということにはならないだろう、と言いたいわけで、あまり数に迷わされないほうがいいと思います。

司会 木内先生、どうぞ。

木内 今、佐々木さんのおっしゃったのは、そのとおりでございまして、先ほど三崎先生に指摘していただいたことを含めて申し上げますと、ここにaからkまで並べましたのは、『慈覚大師伝』に書いてあることをはみ出しちゃった事柄です。『慈覚大師伝』にそのことが当たっているものは、入れませんでした。そういう表なのです。それから同じ意味で不動尊のことも、そういうつもりで出しました。

いま、先生方のお話を聞いて、私がかもう一つつけ加えておこうかなと思いましたが、比叡山の横川の仏様というのは、聖観音で、あと毘沙門天と不動尊、それが入唐の途中で慈覚大師を護つてくださったから、それを祀りしたんだと、そういう話がございます。それまではバラバラの三尊なんですけれど、それが横川の三尊というふうになるようになります。これは（残念ながら、この間焼失してしまいましたけど）、上野の両大師堂がございますが、そこに三つ、大きな懸仏がありまして、それは比叡山の三塔を表している懸仏なんです。その一つが横川なんですが、真ん中は観音様じゃなくて、阿弥陀如来になってまして、そして毘沙門天と不動尊という、そういう一つの懸仏。あと釈迦堂の西塔、それから薬師如来の東塔と三枚同じ大きさの懸仏がありました。そういうふうには横川の三尊というのは、観音と不動・毘沙門か、あるいは観音菩薩が阿弥陀如来になるかという、そういう形で、これは前に武覚円先生のお話があったときに聞きたいと思って聞き損なっちゃった

んで、そのうち比叡山の先生方に聞きたいと思ってるんですが、この三尊というのがセットになりまして、例えば湖東にもありますし、大原にもあります。それから関東、東海地方、それからずうっとたどって来ますと、横須賀のあたりまで阿弥陀如来と不動尊と毘沙門天の三尊という、横川の三尊と仮に呼ぶとすれば、意外なほどずうっとあるんですね。

これは逆に言うと、横川の布教の賜物ですよ。横川が横川として独立して、何らかの勸進なりなんなりしてその布教をしていった。そして天台宗を広めていった、その証だと思いませんか。その証をたどっていくと、そこに慈覚大師が必ずくっついてる。そしてもう一つは、その横川の三尊というの、顕著なのは、先ほど申しましたのは、横須賀の浄土宗のお寺さんですけど、浄土寺とい

いましたかね、そこのお寺さんの像は運慶作でございました。それからこの間ちょっと千葉県のほうで展覧会がありまして、そこでも出品されましたが、やはり横川の三尊というのがありました。

事実よりも深い真実という世界がある。この真実から見れば、事実はみな象徴である。寺院の縁起は真実で構成される。開山の榮譽を、尊信する先徳に託された。中尊寺の法儀や伝統の至るところに、大師の芳躅ほうちくが色濃く遺っていることに驚かされる。やはり寺伝は、厳然として揺るぎない真実なのである。

山頂の「一基塔」は円仁に由来する如法塔で、法華経八卷「如法写経」を納めたに違いない。

清衡公所願の金銀交書経はじめ、二代・三代と相嗣いで写経作善は、紛れもなく開山大師円仁の「如法写経」の精神の尊い継承である。

『大法論』十一月号掲載

今回の学会の論を踏まえての中尊寺貫首の見解であり、本誌巻頭に法灯を高く掲げる所以である。



村中祐生氏



川勝賢亮氏



藤波洋香氏



スライドで解説する多田孝文氏

## 第四回 山家学会総会並びに 学術大会発表プログラム

平成十二年六月十七日(土)～十八日(日)

於：平泉 中尊寺

### 第一日目 六月十七日(土)

11:30 受付開始

12:00 中尊寺諸堂参拝・記念撮影

1:00 開会式 法楽 (中尊寺本堂)

1:30 第一部 シンポジウム

「伝記・伝説に関わる史実と信仰」

司会 大正大学教授 一島 正真 先生

(中尊寺広間)

#### 基調講演

「慈覚大師円仁にまつわる伝説と信仰」

講師 大正大学教授 木内 堯央 先生

### 2:00 パネルディスカッション

パネラー

大正大学教授	木内 堯央 先生
早稲田大学名誉	三崎 良周 先生
教授天台宗勸学	大正大学教授
斎藤 圓眞 先生	中尊寺佛教文化
研究所主任	佐々木邦世 先生

### 3:30 第二部 講演

「東北の仏教美術」

講師 東北大学教授 有賀 祥隆 先生

4:30 バスで懇親会会場(ホテル武蔵坊)へ移動

5:00 懇親会

### 第二日目 六月十八日(日)

9:00 山家学会総会 (ホテル会議室)

9:30 学術発表会 (発表十五分、質問五分)

#### 第一部会

一、「中尊寺ハス」の一考察

中尊寺仏教文化研究所員 菅野 澄円

二、依憑天台集撰述についての一考察

大正大学総合仏教研究所研究生 本間 孝継

三、黒石寺蘇民祭と岩手の蘇民信仰

黒石寺住職 藤波 洋香

四、関山における伝承と史実

— 衣関の実在をめぐって —

中尊寺仏教文化研究所主査 菅野 成寛

五、日光山における慈覚大師円仁来山伝説

栃木県立博物館学芸員 千田 孝明

六、中尊寺毛越寺はなぜ慈覚大師開基か

大正大学教授 川勝 賢亮

七、慈覚大師求法の地——

中国青州龍興寺出土佛群（未公開）の報告

大正大学助教授 多田 孝文

大正大学講師 池田 晃隆

大正大学講師 霜村 叡真

二、法道仙人開基伝説の問題点（下）

如意寺住職 宇代 隆信

三、廣智禪師論考

普賢寺住職 日下部 公保

四、『首楞嚴経文句』から

『首楞嚴経文句』を見る

佛東方研究会研究員・学習院大学講師

岩城 英規

五、敦煌地方における天台教学の伝播

— 長安から敦煌へ —

浅草寺勧学所長 京戸 慈光

六、顔真卿に見る天台思想

大正大学講師 秋田 光兆

七、火宅からの大乘

— 大乘菩薩僧の死生観 —

山家学会会長・大正大学教授 村中 祐生

第二部会

一、湛然における六即行位解釈の一断面

大正大学大学院 長倉 信祐

12:00 閉会式

— 第二十一回 西行祭短歌大会記念講演

桜の花の歌

藤岡 武雄

中尊寺にやって来ましたのも、今回で五回になるかと思えます。それも大抵、夏から秋の季節でした。春の桜の頃は岩手にきたことが無かったので、いつ頃が桜の満開になるのかわかりませんでしたが、もう桜が咲いているかと思いました。

私の住む伊豆方面では、年の暮から咲き出し、四月初旬まで各地で見られます。

さて、桜の花と申しますと、この地にゆかりの深い西行は、

願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎのち月のころ  
と詠んだことは有名です。

「願うことなら桜の花のもとで春死にたいものだ。釈迦入滅の二月十五日のこの頃に」といった

ような意味になるかと思いますが、西行自身が、願った釈迦入滅翌日の二月十六日の日に、桜の花のもとで亡くなったのです。

陰暦の二月は、今日の三月下旬か、四月上旬の頃となります。

このように、西行が願った日に亡くなるという、死が予期的の中したことに驚いた藤原俊成は、願ひ置きし花の下にて終りけり蓮の上もたがはざるらむ  
と、ふつうの美を求める歌としては評価することは出来ないが、求道者の特殊な詠歌として評価したのであります。

俊成の歌は、西行が極楽浄土の蓮花の上に迎えられることはまちがいないと信じる気持を詠んでいます。  
また、藤原定家は、

望月の頃はたがはぬ空なれど消えけむ雲のゆくへかなしな  
と、三位中将公衡へ西行の往生の見事さをたたえた歌を送っています。



西行は奥州平泉に二度ばかり来ておりますが、最初は一一四七年の三十歳の時に平泉の藤原秀衡のもとで年を越し、翌年の春、平泉の束稲山の桜、羽前滝の山の山寺の桜を見て、高野山へと帰っております。その後、一一八六年、六十九歳の折、東大寺砂金勸進のために平泉にやってきたわけです。その途次、静岡県掛川の狭谷の中山で詠んだ、年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山

で、西行の代表的な歌ともなっています。

ところで、古人は桜の花への限らない想いを歌っているが、桜の花のどういった点に感動しているか、昔の人たちと現在の人たちの捉えかた、表現のしかた等にふれてみたいと思います。

○古典にみる桜の花

あさみどり野辺の霞はつつめどもこぼれてには  
ふ花ざくらかな よみ人しらず

〔『今昔物語集』に見える歌で、春の昼に咲

きこぼれる桜〕

——こぼれて匂う——

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花つ  
散るらむ 紀 友則

（春の光の中ではらはらと散る桜）

——花の散ることの美——

さくら散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪  
ぞ降りける 紀 貫之

（「空に知られぬ雪」は桜のこと。）

——花の散ることの美——

いにしへの奈良の都の八重さくらけふ九重に  
ほひぬるかな 伊勢大輔

（八重桜が献上された際に即座に詠んだ歌）

——匂う花——

山里の春のゆふぐれ来て見れば入相の鐘に花ぞ  
散りける 能 因

（鐘の響きと散る桜）

——花の散ることの美——

葛城や高間のさくら咲きにけり龍田のおくにか  
かる白雲 寂 蓮

（白雲にまごう桜花）

——遠山桜の美——

さくら咲く遠山鳥のしだり尾のながし日も  
あかぬ色かな 後鳥羽院

（見飽きることのない遠山の桜花）

——遠山桜の美——

名もしるし峰のあらしも雪と降る山ざくら戸の  
あけぼのの山 藤原定家

（山桜が雪のように降る）

——雪のようにふる桜花——

山深き谷吹きほる風のうへに浮きてあまぎる  
花の白雪 藤原為家

（動きのある散る桜）

——雪のようにふる桜——

野の宮の榎の下道けふ来れば古葉とともに散る  
さくらかな 香川景樹

（古葉とともに散る桜）

——花の散ることの美——

ここに挙げた桜の歌は僅かですが、凡そ古典に  
みる桜の歌は、四点に絞ってみる事ができます。

1、こぼれて匂う花桜

2、花の散ることの美

3、遠山桜の美  
4、雪のようにふる桜

桜花の美を、どういった観点でとらえているかということは、古人が桜の花のどのような情景を美



と認識していたかがわかるのではないのでしょうか。

近代の桜花を歌った作品をみてみましょう。  
五百枝張る老木のさくら咲きさかりかがやく花  
となりて立てるも  
窪田空穂

——輝く桜花——

さくら、さくら、長き廊下の出はづれに明るく  
咲いて朝月夜なり  
前田夕暮

——桜の明るさ——

やはらかにわが黒髪の匂ふなりさくら咲く夜の  
湯がへりの道  
四賀光子

——夜桜の艶やかさ——

桜ばないのち一ぱいに咲くからに生命をかけて  
わが眺めたり  
岡本かの子

——生命感——

桜の花ちりぢりにしも  
わかれ行く 遠きひとり  
と 君もなりなむ  
積 迢空

——晴れやかさ——

うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かんと

すなり山桜花

若山牧水

——力のみなぎる花——

峡底の春は寂しく残るとふ桜のかげに女なりけり  
島木赤彦

——桜と女——

桜ばな咲きのさかりをこもりゐて狂ふをみなに  
物をいふなり  
斎藤茂吉

——見えない桜——

「散るさくら」ではなく、「輝く桜花」であったり、「艶やかな花」であり、「生命感」のみなぎる花といった捉えどころの違う歌となっております。桜を視野の内にながら「女」や「狂女」をうたったりした歌もあります。古典の歌のように、「雪のように」とか、「花の散る美」といった類型的な表現ではなく、生活を視野にして桜がうたわれたり、人やものとのとり合わせによって描かれたり、桜花の把握の仕方に拡がりが見えてきます。さらに、

さくらばな見てきたる眼をうすずみの死より  
甦りしごとくみひらく  
雨宮雅子

さくら木を仰ぐ咽喉もと膨らみていま昇りくる  
言葉をまてり  
春日真木子

夕光のなかにまぶしく花みちてしだれ桜は輝きを垂る  
散りなびき風にしたがふ花びらを頭の空白にな  
るまで見をり  
森山晴美

光りつつへだてあひつつ花びらは雲の鱗のやう  
に降りくる  
大西民子

「さくらの白」と「うすずみの死」が二重写し  
になったり、「まつ盛りの桜を見あげる赤ん坊の  
やわらかい咽喉」から、出てくる言葉を捉えたり、

「しだれ桜は」輝きを垂れるさまを写真したり、「散る花びら」を「頭の空白」になるまで見ていたり、「花びら」は「雲の鱗」と同化しあったりした桜が詠まれています。

このように現代は、「桜の美」を固定化したところからの脱却がはかられており、創造的世界が拡がりつつあります。

なんと、桜の花の美は無限の拡がりをもって詠まれていくことでしょう。（文学博士、『あるこ』主宰）

# 平泉の片鱗<sup>へんりん</sup>

八重樫 忠 郎

はじめに

記録や伝承を基軸としていた平泉研究に、発掘調査という方法を持ち込んだのは、岩手の考古学の祖ともいえるべき小田島祿郎であった。昭和五年のことである。以後、寺院を中心に断続的に調査は続けられてゆく。

最初の調査から半世紀以上経った昭和六十三年、大きな転換期が訪れた。柳之御所遺跡の大規模発掘調査によってである。北上川により流失したと思われる柳之御所遺跡が、往時の状態を現し始めたのである。衝撃が走り、一躍平泉が目されることとなった。平泉研究も一気に躍進している。この追い風に乗って平泉町も、調査員の増員、個人住宅の全面調査を打ち出した。

この柳之御所遺跡の効果により、恒常的な発掘

調査が行われ、多くの資料の蓄積がなされた。発掘調査の成果とは、掘り出したモノに限らず、それらから生活や文化までをも推測することである。ここではその蓄積の一部であるが、酒宴と道について紹介したい。

## 一、酒 宴

かわらけ

かわらけという素焼きの皿が、平泉で大量に使われるようになるのは、基衡晩年ごろからである。このかわらけ、完全な形で発見されることが多い。すなわち現代のように壊れたから、つまりうつわとしての機能が失われたから捨てると、いうものではなかった。有名な清少納言の『枕草子』に、「きよしと見ゆるもの、かわらけ」という一節がある。「きよし」とは清浄とか、けがれないという意味である。当時の人々はかわらけについて、「きよし」と見ていたのである。この感覚と、完全な形で発見される、逆にいえば壊れるまで使わないを結びつけると、使い回しのない個人の使用、

プラス短期間の使用ということになる。かわらけは酒宴において、個人個人が使い、その終了とともに廃棄されるものだったのである。それ故、一箇所から大量に発見されることが多いのである。余談だが、かわらけは現在も使われている。皇太子様御成婚の際も、愛知県常滑窯で生産された素焼きのかわらけが用いられた。本来であれば再使用できぬよう埋めるのだから、現在は博物館に展示されている。一般の結婚式でも多くは漆塗り皿だが、まれに白色のかわらけが使われることもある。ただしこの場合は、おそらく、意味を反して密かに使い回しをしていることだろう。

かわらけを使えるクラス

当時かわらけを大量に消費していたのは、首都である京都と平泉くらいであろう。しかし一歩その空間を出るならば、皆無とでもいい。すなわち京都的な空間でのみ消費される、貴族文化そのものなのである。当然のことながら、使える階級は最上層クラスに限られる。



見つかったかわらけ（穴があけられたものは儀式用）

彼らは大量にかわらけを消費し、みずからの権威を見せつけた。ところで大量消費したということは、大量に生産させたということでもある。かわらけ作り職人、またそれらを支えた下々は潤ったに違いない。当時の貴族社会の一見ムダとも思える行為は、搾取だけではなく、還元という側面を持った、ある意味で政治行為そのものだったのである。現代も見習って欲しいと思う。

#### 当時の酒宴

酒宴、簡単にいえば呑み会だが、当時の呑み会は、君臣秩序の確認と合意形成の場であった。君臣秩序とは上下関係のことである。個人对个人に止まらず、それを参会者全員が受け入れる場なのである。合意形成とは、意見をまとめるということである。つまり酒宴は、当時の政治そのものといえるだろう。

呑み会をこのように直視している人は、そう多くはないだろうが、まさしく現代同様といっている。今は「ウサ晴らし」も加わるやもしれぬが。



かわらけの出土状況

酒宴イコール政治となれば、いかに酒宴が大事なものであったか、お判り頂けるだろう。その場で、貴族文化の象徴たるかわらけを使うのである。さらにもう一つ平泉藤原氏は、重要な道具を酒宴に持ち込んだ。陶磁器の壺である。

#### 威信材としての陶磁器

陶磁器とよくいうが、陶器と磁器は似て非なるものである。日本では当時、陶器しか生産できず、磁器が国産化するには、なお四百年の歳月が必要であった。そのため磁器はすべてが中国からの輸入品である。また陶器も大半が愛知県からの搬入品であった。つまりすべて遠隔地から持ち込まれたものなのである。当然のことながらそれらを使える階級は、その地方の政治や経済を掌握した人々に限られる。藤原氏はその代表であった。

藤原氏は酒宴において、その壺を酒器として使ったのである。徳利のようにそれで酒を注いだかどうかは判らない。とにかく酒宴の場に置いたのである。参会した人々の目には、「装い新たな焼

きもの」と映り、それらを使える藤原氏の財力にひれ伏すことになるのである。遠隔地からの搬入品という側面を利用した藤原氏の処世術であった。ちなみに平泉において、かわらけが大量に消費された場所は、柳之御所遺跡である。またかわらけが大量に見つかる穴、つまり大きな酒宴の跡が多いのもここである。この柳之御所遺跡には、白磁四耳壺も異常に多い。白磁四耳壺が大きな酒宴の場所に多いということは、この壺が最も高級品という意識の表れとも考えられる。白磁四耳壺を目の当たりにした参会者は、ただ威に打たれたことだろう。

のちには壺そのものが、権威の象徴として位置付けられていくことになる。このように壺を威信材として使う手法は、鎌倉幕府を経て、数百年後の戦国武将まで引き継がれる。この手法が、京都で生まれず東国で発生したこと、さらに戦国時代まで継承されたことに疑問を抱く人もいるだろう。しかしこれは簡単である。京都貴族は威を示すまでもなく官位(階級)が定まっていること、藤

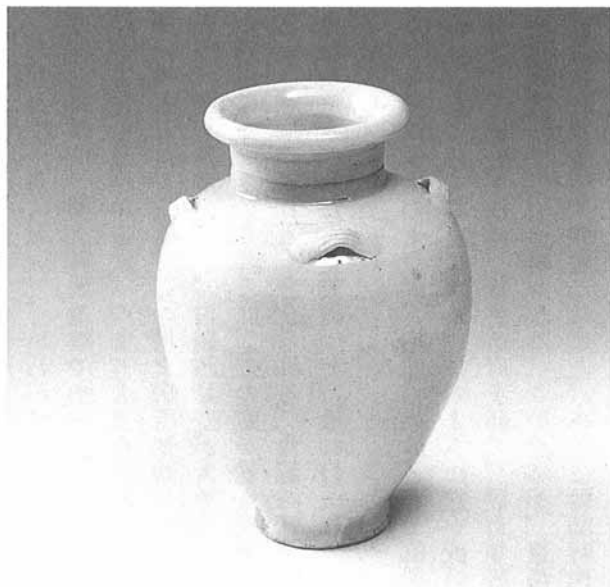
原氏や後の戦国武将は、威を周囲に示さねばならなかったからである。

#### 平泉内の酒宴

かわらけと壺が加わって、個性豊かな平泉型酒宴が完成した。さてこの酒宴、どこでどのような規模で行われたのだろうか。

平泉において最大の酒宴会場が、柳之御所遺跡であったことはすでに述べた。換言すれば最大の政治の場であったともいえよう。平泉駅前付近でも、大規模な宴会が行われた痕跡が見つかった。柳之御所遺跡並の規模であり、一つの穴から五百点以上のかわらけが出土しているのだ。一人が五点のかわらけを使ったとすれば、百人以上の酒宴ということになる。ただし柳之御所遺跡に較べると、その頻度は少ない。中尊寺金色堂北広場も多い。この付近では、公的ともいえる大規模な酒宴が行われたのである。

酒宴の参会者が少ないからといって、私的なものとは即断できない。しかし少人数であれば、私



白磁四耳壺

的な性格を帯びやすいことも事実であろう。駅前から毛越寺にかけては、小規模な酒宴の痕跡が多い。これは近年判りかけてきた当時の市街地状況にも一致している。

ここまででは、酒宴という政治について述べてきた。以下では平泉の道を読みとり、両者の関連を考えてみたい。

#### 二、平泉の道

##### 四代の痕跡

平泉藤原氏初代清衡期（一〇五六―一二八八）の遺物が、まとまって見つかっている地区は、中尊寺境内のみである。点的な出土状況としては、柳之御所遺跡と志羅山遺跡の一部でも確認できるが、清衡の時期には中尊寺しかなく、他地域は荒涼としていたのだろう。

二代基衡（？―一二五七）は金鶏山に経塚を造り、平泉のシンボルタワーとして位置付けたようである。その山頂からの子午線を、毛越寺やその近隣の基軸としている。史実どおり毛越寺を造営

し、平泉市街地の礎を造っている。しかし脳溢血により頓死したことで、その多くは三代秀衡に引き継がれたらしい。基衡の時期には、いまだ平泉という空間全体に開発は到っていない。

三代秀衡（？―一一八七）は毛越寺を完成させ、都市とも呼ばれる平泉市街地を形成した。秀衡は亡父の遺業を完成させることにより、自他ともに認める奥の御館へと成長したのである。無量光院を建立し、柳之御所遺跡を再整備している。平泉の成熟期とわかっていい。

四代泰衡（一二五五―一一八九）の痕跡は、政権を執った期間が短すぎ、考古学的には秀衡期と重複し見えない。

##### 平泉の道

道は家と家を、空間と空間を結び付けるものである。人々や物資はもちろんのこと、文化や技術、また当時は疫病や亡霊さえも道を通ってくると考えられていた。すなわち道なくして人間の生活は成り立たない。



しかしこの道というもの、意外に手間のかかるものである。常にメンテナンスしないと通行できなくなるからである。平泉内の道は、公共の場として基衡と秀衡が設定し、また維持管理したものである。

構造的には現代同様、両側に側溝が伴う。石を敷き詰めるなどという舗装道路は、一部でしか確認されておらず、多くが粘土層をむき出しにしたものである。

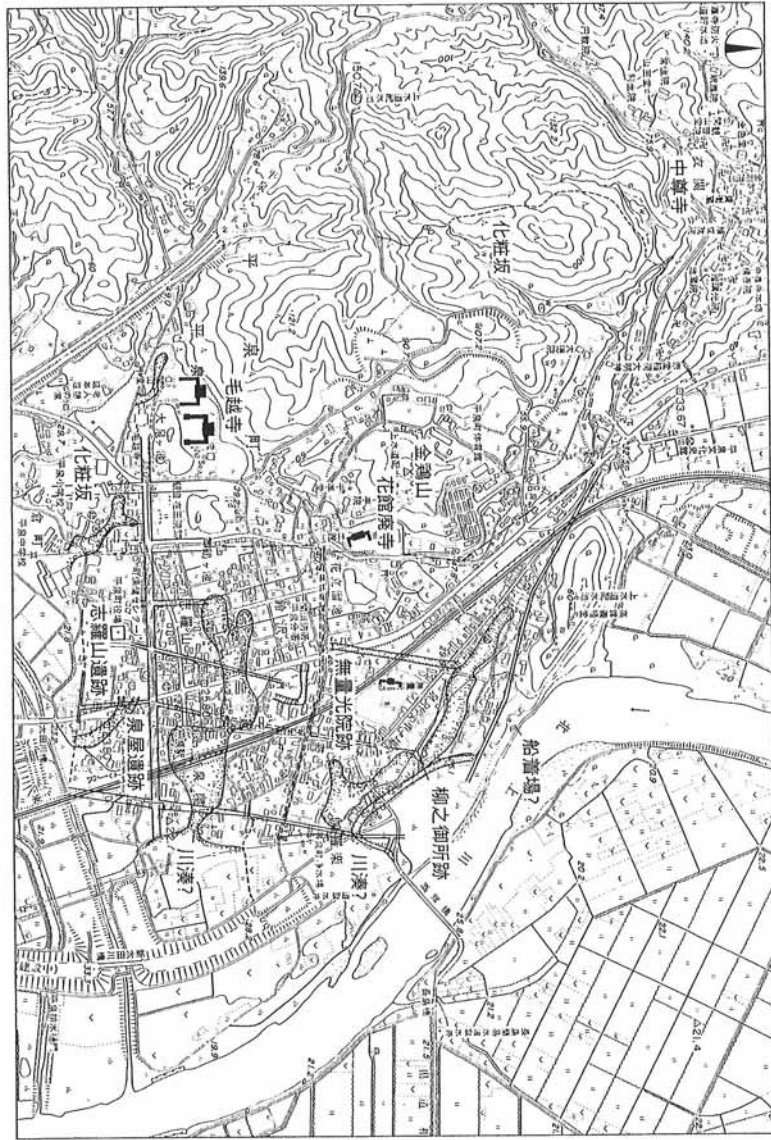
毛越寺南大門から泉屋につながる二〇呷幅の東西路を設けた。計画に基づいて設置されたという意味では、平泉で最初の道である。おそらく毛越寺造営時、二代基衡の晩年頃であろう。この道は平泉の基軸になったばかりでなく、毛越寺造営に必要な物資の運搬にも欠かせないものであったと考えている。この道の東端は、通称鈴沢の池と呼ばれる沢が北上川に注ぐ部分に位置している。おそらくここには、北上川で運搬した物資の荷揚場、すなわち川湊があったのである。この道は、JAと保険センターをつなぐ小道として、現代まで踏

襲されている。

京都同様、おおむね一二〇呷(四百尺)単位で、南北路を取り付ける辻(交差点)を設けている。直交する道も出来ていないのに辻を設けるとはおかしな話である。なぜかというとうと、辻には魔物が住みつきやすいと考えられていたため、計画性を持って位置を決定しておいたのである。そしておそらく、辻の祓(はら)いという儀式を行ったに違いない。

しかし南北路は、平泉内部の開発に併せて設けられたため、一斉には取り付けられなかったようである。図を見れば一目瞭然だが、明瞭に軸線が異なる道路がある。端的にいえば毛越寺に類似した軸線の道路は基衡が、以外の斜めの道路は秀衡が造った可能性がある。しかし実際はそのように単純にはいかないだろうが。

道路が判り始めたことにより、興味深いことが見えてきた。志羅山遺跡やその近隣では、現在まで踏襲された道が多いのに対し、柳之御所遺跡では地割は残すものの踏襲された現道は皆無である。このことは、多少の差はあれ絶えず志羅山遺



平泉の道 (1/20,000)

跡近隣には人が暮らしていたこと、柳之御所遺跡には人が住まなくなった時期があることを示している。出土遺物からその時期とは、鎌倉から室町時代にかけてである。鎌倉幕府みずから滅ぼした藤原氏の酒宴会場という禁忌が生きており、再びの使用を拒んだためだろう。人の往来がなくなり、道は自然に消えたのである。

#### 車の通行できる道

側溝まで含んだ道幅は、百尺（約三〇呎）基本とし、三分の二である約二〇呎、三分の一である約一〇呎、それ以下に分けられる。現在のところ約三〇呎幅の道路は、毛越寺と観自在王院跡の間、観自在王院跡の東隣の南北路、泉屋付近の南北路の三条の道である。約二〇呎幅の道路は、毛越寺から泉屋に抜ける道と南北路が一条見つかった。多くは一〇呎前後のものが多く、幅の狭い道としては、無量光院跡から柳之御所跡へ向かう一、五呎幅の道などもある。

道幅を問題にするのは、観自在王院跡西隣から

記録通り車宿くるまどりが見つかったからである。この牛車ぎょしやのガレージは、二間×十間の規模を有することから、牛車は最大で十台、牛車の大きさは幅二・七呎長さ四・五呎程であったと推定される。牛車以外にも荷駄やその他の車もあったに違いない。それらが往来できる道は、平泉内でもそう多くはない。中尊寺と毛越寺間で車が往来できる道は、観自在王院跡東隣の南北路、柳之御所遺跡堀内地区に行ける道は、南の伽羅葉からくからの道と西の堀外地区からの道のみである。無量光院跡への道としては、現中尊寺通りにおおむね平行する道しかない。牛車で無量光院へ行った後、さらに柳之御所遺跡へ行くとうすると、一旦南下したあと東西路に入り再び北上しなければならぬ。無量光院と柳之御所遺跡間の直接の往来は、徒歩によって行われた可能性が高いように感じられる。すると近隣に車宿が必要になる。

#### 平泉の玄関

平泉の中心地区は、南は太田川・東は北上川・

北は衣川、西は毛越地区けこしまでである。この地区は、外部に較べて六十倍以上の遺物量がある。すなわちまったく異なる空間なのである。ではこの中心地区への出入口はどこにあったのだろうか。

現在の南からの入り口は、国道四号線が担っている。しかし調査により、このように南から道路が繋がっていなかったことは明白である。祇園地区ぎんと志羅山南部地区の間には、太田川の氾濫原が広がり、橋や渡しを設けることが不可能だったのだらう。地形的に太田川を越えやすいのは、八つ花形と呼ばれる平泉小学校がある半島状の丘陵付近である。祇園付近を通った人々は、おそらくここから平泉入りしたのである。都市の境界に残る化粧坂地名けわさかが、この付近に残っていることも傍証になるかもしれない。

この八つ花形の南部に立ったとき、すなわち平泉に足を踏み入れたとき、毛越寺と観自在王院が視野に飛び込み、さらに北側が上がって行く地形の彼方、ほぼ正面に、金鶏山が見えたはずである。これほど平泉を印象づける入り口はない。

西の達谷窟たつこのいわや方面からの道も、ここに繋がっていた可能性もあるが、または毛越地区を通り、毛越寺の西側にも通じていたのかもしれない。東からの道は北上川によってよく判らなくなっている。北からの道は、衣川を渡り関山丘陵に接していたのだろうか。

#### 三、まとめにかえて

平泉の地割りぢわりが、明瞭になってきた。その地割りの中に庭園や屋敷が含まれている。大きな屋敷を構え、その周辺にそれらを維持する下々の人々もいたようである。鉄や銅製品を作る工房、織物や漆製品工房などが含まれるブロックもあった。しかしこれら各種手工業者をすべて抱えていた空間は、柳之御所遺跡のみである。平泉の各ブロックは、屋敷とそれらを維持する人々によって成り立った、いわゆる居館きかんなのである。

これら各ブロックごとの酒宴の様子も、徐々に見えてきている。庭園を有するブロックでは、比較的大きな酒宴が催されている。それらを集めて

酒宴を行う場所が、柳之御所遺跡なのであろう。

このように考えるならば平泉は、居館と大規模な寺院しかないということになる。藤原氏と高級官僚、それらを支えた工人、また僧侶ぐらいしかなかったのかもしれない。極論すれば、居館と寺院の集合体なのである。平泉外から見れば、忽然と現れる浄土に見えたやもしれない。

平泉の大きな特徴は、多少の差はあれ、各所からかわらけが発見されるということである。つまりかわらけを使用できるクラスの人間しかおらず、都市民というか庶民の存在は、まったくうかがえないのである。

京都にしる鎌倉にしる、河原者や道々の輩、非人と呼ばれる人々がいた。彼らは牛馬の解体を行い、死人から衣服をはぎ取った。野蛮だが、都市内の清浄を維持するには必要な連中である。それは彼らが死体を遺棄するなど、都市内に発生するケガレを除去する部分を担っていたからである。事故死した動物をついばむカラスにも似ている。その彼らが平泉にいないということは、やはり平

泉は居館の延長ということなるのではないだろうか。

都市平泉という用語が生まれて、十年が経った。今も「平泉は都市だったのか？」と、つい考えてしまう。明瞭な都市の概念規定がまだないところをみると、永遠に判らないものかもしれない。別に都市と呼んでもいいのだが、その場合には京都や鎌倉とは違うタイプの都市を想定しなければならぬだろう。

おわりに

日々の食生活の影には、毎日血まみれになり、屠殺・解体などを行っている人々が必ずいる。食生活に限らず、し尿処理など生活の根底を支える仕事は多い。都市の必要条件であろう。

小学生が「海で泳ぐ魚」と題し、海で泳ぐ切り身を描いたという新聞記事を読んだことがある。ただならぬ時代が到来しつつある。私たちは、常に彼らの存在を忘れてはならない。

(平泉町文化財センター)

## 季語に寄せて

〈不動堂の栞〉

〈第二十九号〉十一月



残すところひと月、テレビの「元祿繚乱」と共に今年も暮れそうです。なにせ、不景気には、「判官(義経)物」か「忠臣蔵」を、の諺どおり。そして〈大河ドラマ〉を観光させるのが各地の菊花展で、菊人形も華彩繚乱。

菊着せぬ忠臣蔵の敵役

〔産経俳壇〕／京都府 中川龍吉

まさか着せないわけではあるまいが、日本人の感情を言いて妙ですね。なぜ、かくも世の中が忠臣蔵・大石内蔵助最前かというと、

なるやうにならぬ此の世の日向ば、

〔読売俳壇〕／茨木市 西村美津子

つまり現実の裏返しと見ることもできそうです。本懐を果すことができた内蔵助像に自分を託しているわけです。ともあれ、天候もまあまあなら、作柄もまあまあで、みちのくの秋は

中尊寺黄金の稲田巡らして

〔読売俳壇〕／足利市 金井寿美子

稔りの景が見えたようです。さて、師走の街はなにか気忙しいものです。だからこそ、少し心にゆとりを――。

お互いの今日に小さく手を触れて

道問う人と渡る信号  
〔読売歌壇〕／滋賀県 宮園佳代美

事故を起こさぬよう、事故にあわぬようお気をつけてください。

〈第三十号〉十二月



平成十一年も暮れました。それぞれのご家庭でも、

身辺に慶弔のあり冬隣

〔読売俳壇〕／前橋市 豊島秋生

もう少し広く、世間一般について言えば、

年こしやいまは真打なき世なりけり 加藤郁乎

真にリーダーシップを発揮してくれる人がいない、という慨嘆。そして、

天変地異 人為多難の世紀末

指呼二千年は如何に展けん

〔産経俳壇〕／和歌山市 辻万亀

といった、漠然とした不安を多くの人が抱いているのではないでしょうか。でも、決して、「自分だけは何とか」などと考え、ありもしないうまい話や、財産を喜捨すればするほど助かる、病氣も治るといった誘いに乗らないことです。

慇ろに盛る仏飯の今年米

〔寒雷〕／西野幸三郎

そういう日常の「家庭」のあり方が大切なのではないでしょうか。さて、新年です。

一といふ簡潔がよし年新た

〔翼の上に〕／矢島渚男

降る雪や明治は遠くなりけり 中村草田男

たしかに、去年と今年とは棒のように繋がっているわけですが、けれども、しかし、あえて、切替える。それが人生、人の世の知恵とも言えます。どうぞ佳い年をお迎えください。

〈第三十一号〉一月



二〇〇〇年問題で開けた新年も、初護摩の二十八日が過ぎた。

無事であったからか、あるいは暖冬の故か、なにか力が抜けたようで締まらない感じしてませんか。

雪解けて力抜けたる伽藍かな

清崎敏郎

ぼかぼか温ったかな日の寒行なんて、やる方も締まらない。少々難儀でも、冬はやはり雪が降った方がいいようです。

大いなる感慨ですね。しかしその間には、「心中暗然」たる時代があったわけです。これからの一〇〇年、人類を脅かす三つ（梅原猛の言う）、環境問題、核問題、そして人間の内面的崩壊と、どうなるのでしょうか。

人生はただ一同の質問にすぎぬと

書けば二月のかもめ 寺山修司

いや、新春からあまり暗くなっても……。それでは、

節分や土間に溶けたる傘の雪 鈴木真砂女

作者は御年九十五歳。しゃきしゃきの現役でいらっしやいます。

〈第三十二号〉二月

木屑・鉄屑・骨屑和しつ 涅槃西風 磯貝碧蹄館



釈尊が亡くなられたことを涅槃といひ、二月十五日です。それで、昔から陰曆二月十五日ころに吹く西風のことを涅槃西風と云ったわけですが、この句の「木屑・鉄屑・骨屑」がどこでどう和したのか、私にはわかりません。ただ先ごろ、例のニッソー（栃木県）から請け負った産業廃棄物が隣市でも不法投棄されていたことがわかり、しかも、事が発覚するや廃棄物処理業の社長がさっさと自殺してしまいました。掲句の、作者の主題とは関係なく、ふと、そんな時事に思いを致してしまいました。簡単に「リサイクル」などと云っても、状況は難しいものがあるようです。

究極はゴミとなるべき物あまた

せつせと作り地球を汚す

〔読売歌壇〕／日野市 島 賢三

まずは、あまり必要でない物を造らない、使わないという発想が求められます。

地球の汚れ具合を撮影して、宇宙から帰った毛利さん。

「やはり私たちが住んでいる地球がいい」と。

ことに、日本人の心には、朧なる月もよくて――

水の地球すこし離れて春の月 正木ゆう子

作者の瑞々しい感性がうかがわれますね。いや、いくつになってもこうした瑞々しさが大事でしょう。

梅一輪思老期てふ語剣りける 〔朝日俳壇〕／和泉市 関根哲男

まだまだ余寒あり、思い出したように降雪も。

〈第三十三号〉三月

人がみな大きく動く春の雲

〔読売俳壇〕／兵庫県 南 孝



毎年のことですが、四月になりますと、進学や就職で、家を離れて新たな生活に入る若者の澆刺とした姿を目にします。期待も大きいでしょう。気持ちも弾んで、自然、身の動きも大きく見えるわけです。

ただ、その中に入れなかった人もいるわけですね。第一志望校と反対方向の列車に乗る人。「不採用」の、機械的な三文字を突きつけられた人。そして未だ採用とも不採用とも、何も手にしていない人――。

そういう人に、つい「頑張れ」と声をかけてしまいますが、彼らは頑張ったけれども、うまく結果が得られなかったわ

二もとの梅に遅速と愛す哉 与謝 蕪村

けでしよう。だとすれば、「頑張れ」コールは控える、否、抑止すべきなんですな。

早く咲きだす梅の花もあれば、遅く咲き始める花もある。

そのままを愛でている。人もそれぞれで、順調に合格・就職・結婚・昇進する者もいれば、折に回り道をする人もいる。しかし、どちらがどうか、それは、本人が後になって思うこと。

さて、遠く離れて暮らす親と子の電話の片言にも、なにか響くものがあります。

受話器より俺と始まる子の声に

変りなき暮らし伝わって来る

〔毎日歌壇〕／萩市 北村行生

父の電話は柱に釘を打つやうに

用件だけを言ひて切りたり

〔朝日歌壇〕／神戸市 北村行生

「俺」の方は今月の、「父」の方は昨年、いずれも河野裕子選です。

子育ての用の済んだ方には、次の一句を。

退屈もまこと良きもの春の雨

〔毎日俳壇〕／静岡県 夏目幸男

### 〈第三十四号〉四月

身の内も霞みぬららし花粉症

〔毎日俳壇〕／大分県 清家信博



鶯と遠くにききて朱印受く

〔産経俳壇〕／大和市 宮澤 昂

中尊寺にお参りされる方も、日一日と多くなってきたようです。

そして、まもなく連休。五月四・五日には、中尊寺御神事能があります。

三百年来の伝統で今も一山の僧が「能」を勤めるのです。

遮那王に兵法授くる大天狗

舞台踏み音にわが固唾のい

〔読売歌壇〕／鎌倉市 田中 博

今年の番組は四日が「竹生島」、五日が「鞍馬天狗」。

可愛い稚児達が舞台上に花を添える。いや、観客の目は完全に遮那王（牛若丸）に、稚児たちに向いているようです。物語は鞍馬山、掛け句は鎌倉の方。今年の舞台は平泉です。

当節、天気予報に、洗濯日和・花粉症情報に加わってきた。

観光客の中にも、寺の職員にも大きなマスクが目立つ。まったくお気の毒だが、一体、どうしてこういう事態になったのか。杉が悪いのか、風の、花の所為なのだろうか。

日光街道や中尊寺月見坂の杉並木もあるが、杉樹といえは屋久杉。しかし、屋久島に杉花粉症の人はいない、このこと。そうすると、人間の細胞が脆弱になったのか、あるいは促成苗やら団地造林やら自然界に手を出し過ぎた高度成長期社会の、人為のツケかも知れない。

木々のおのおの名乗り出たる木の芽哉 小林 一茶

自然の営みは、なにも変わっていない。春がくれば、木々それぞれに芽吹くだけ。一茶、二十七歳の句。書簡の挨拶、まさに「万象萌え出ずる好節」です。

一枚脱いで着ては木の芽風

〔毎日俳壇〕／西尾市 鈴木マユミ

### 〈第三十五号〉五月



少年触れては青葉の並木夜の幹

飴山 實

〈NHK俳壇〉で選者の鍵和田柚子氏がこの句を紹介し解説していた。

「青葉の並木道、夜その幹に一本ずつ触れて歩く姿に、少年の孤独な心が」と。ふと、去年の新聞に少女が幹ごとに手を触れていく歌があったのを思い出して、保存してあった「歌壇」「俳壇」欄を探すと、ありました、ありました。

自転車に立ち乗る少女幹ごとに

片手に触れて花の下ゆく

〔毎日歌壇〕／愛知県 松本二男

選者の篠弘氏は、その少女の姿態に「のびやかな世代への

憧れをもって、作者が目を細めている」様子が見えるよう  
だ、と。

前句との違いは、夜の青葉の並木か日中の明るい花の下か、  
という状況の相違ですね。それが、孤独・不安に対して、  
のびやかな世代、憧れをもって、となる。

今の十七歳に象徴される世代には、目を細めて眺めるどこ  
ろか目を覆うばかり、一体どうなっているのか、とテレビ  
で聞いた風な総評論家になっているのでは。無論、問題は  
深刻ですが、古今を通じて思春期は突っ走ってしまいやす  
いもの。考えてみれば昔、私どもの時代だって甚だ危なっ  
かしかつたわけですね。

それを棚に上げて論じても如何か、とわが息子・娘を眺め  
ながら自問自答した次第です。

さて、季節は、間もなく梅雨に。庭の草も伸びやすく、

夫は法話吾は草引く寺暮し

〔朝日俳壇〕／群馬県 酒井せつ子

組織だ、予算だ、宣伝・報告だ、というのは事業ですね。  
マニュアルを入手して、文書や携帯やらで、人数を集めて  
大会を盛会にすることは、違うのです。  
違うといえは、これも気になる。

蓮池や折らで其のまま魂祭

芭蕉

間もなく七月、「中尊寺ハス」も開花の季節です。境内の、  
大池跡に咲いた蓮は、そのまま金色堂の供花に、精霊を  
慰めることになる。わざわざ切ったりしないで、池に咲い  
たままでお供えしよう、との句意ですね。

さすが芭蕉、などと他人事のように言ってもらえません。こ  
の句、芭蕉が四十五才の、「奥の細道」の旅に出る前年の  
句です。わたしども、とうにその年齢を過ぎているわけ  
ですから、やはりそういうところまで思い至らねば、と考  
えさせられました。

### 〈第三十六号〉六月

かたつむり濡れ一隅を照らしとり

橋 間石



木濡れ日の、庭の木にかたつむりがいた。かたつむりが、  
そこにいたからどうだというわけではない。無論、われわ  
れの生活にはなんらの意味もないかもしれない。ただ、か  
たつむりは、かたつむりとして、そこに今、いる。少し濡  
れた跡をつけて、うごめいているだけなんです。俳人・  
橋間石にはそれが見逃せない、実在として、景のなから  
切り取って句ができたのでしょ。

「一隅を照らす」などと云うと、何事か為そうと周りを見  
渡して構えるようですが、本当は、そうではなくて、自分  
がそこにいることが、周囲とかかわって「らしく」いるこ  
とが、即、照らしていることなんで、そうあればいい。

錆びついた時間の色に身を染めて

散れないバラが吊るされて

〔読売歌壇〕／滋賀県 宮園佳代美

ドライ・フラワーも花の身になれば、たしかに哀れこの上  
もない姿と…。

### 〈第三十七号〉七月

涼しさや 鐘とはなるる かねの声

蕪村



「閑さや」なら芭蕉、「涼しさ」なら蕪村のこの句がまず  
思われます。

朝、本堂の掃除を済ませ、六時の鐘を撞く。大気が湿りを  
含んで、鐘の表面がしっとり濡れたように見える季は、鐘  
はやわらかに鳴を発し、余韻を引きます。五回……六回

……とつづく。かすかな震響がつぎの鐘声にあらたまつて、七回・八回と撞き続くから、すすろに涼感がわくのです。

椅子涼し 待つ身といへば それもそう

綾部仁喜

一昨年の八月、この栞で、「弔電のまだまだ続く暑さかな」(静岡 村松史基)を紹介して、「弔電は、遺族の方に宛てたもの。無理に人に聞かせるものではない。まして、猛暑・酷寒に苦痛を強いて」と書きました。読んで、もつともと諒解してくださった方も少なくなかったようでした。そしてそのおひとりに、隣市の老舗の前社長がいらした。先ごろ亡くなられて、お悔みに伺ったところ、弔電は、ごく親しい方からの二通を読んだだけで、他はご遺族に目を通していただいているからと、二百通ほど奉呈のみでした。実に落ちついた雰囲気、故人の気持ちを承けて涼しささえ感じられた告別式でした。

気配りと いふ涼しさの ありにけり

(「毎日俳壇」／鯖江市 木津和典)

夏の季節、暑いにつけ、涼しさを覚えたにつけ、寺の住職、方丈、僧侶が俳句や短歌に詠まれることが多いようです。お盆の棚経やら、墓参の折りに接する機会があって、それに緑陰や墨染めの姿に、少しは涼しさを想うからでしょうか。しかし、こういうのもあります。



〈第三十八号〉八月

信仰は心耕と説く寺涼し

(「河北俳壇」／宮城県 佐々木百合子)

僧正の袈裟の辺りの炎暑かな

(「河北俳壇」／福島県 横山芳美)

宗門のきまりで、正式には僧正は紫衣に緋の袈裟を着することになっているわけですが、その緋の袈裟を掛けた姿が暑苦しく見えたのでしよう。たしかに、洪茶に染めた薄物の如法衣の方が、見た目には涼やかですね。

唱名のごとと一山の蝉しぐれ

(「読売俳壇」／町田市 原沢昇司)

わたしどもは「称名」と書きますが、仏名を、とくに「南無阿弥陀仏」と名号を称えますね。境内の蝉しぐれが、あたかも一山の僧がひたすら称名を称えているように聞かれたのでしよう。

泉の底に一本の起夏了る

『蕨手』飯島晴子

水底に、銀色の匙が透けて見える。この夏、だれかが落と

したのであろう。夏もおわった、という感懐。だが、この句の作者も、この夏命を終わりにした。「自死」という、あと何年かあったであろう人生を省略して――。病んでおられたらしいが、いずれにしても、あつてはならないことです。

おん僧の戻りし気配きの、龍

(「毎日俳壇」／塩釜市 杉本秀明)

季節はもうすぐ秋、わたしどもの中にも、山の幸の在り処を熟知している方がいまして、その気配よくわかります。

〈第三十九号〉九月

思考力おとろえ残暑の頭丸る

(「読売俳壇」／東京都 原島明玉)





今年、暑が続いたせいで稲の生育も十日ほど早かったようです。

お陰さまで、作況指数は一〇五とか。まあ、それも穫れたらとれたでまた悩みもあるのでしょうか。農業も商業も、購買意欲がもう少し高まれば、と言われる。様々な食品を並べるコンビニのせいとか、若者の体が華奢さしやになって食欲も落ちたのでしょうか。それとも、生産が過剰で……。

朝七時パン食はむ人のあまたいる

コンビニ前の多国籍軍

〔毎日俳壇〕／三重県 大西昭司

とんぼ来る金色堂と水平に

〔俳句研究〕十月号／神蔵 器

組んだ手にあごを載せてる少年の

脱皮だっぴしている塩からトンボ

〔読売歌壇〕／千葉県 小鷹美佐子

しかし、歌人・小島ゆかりさんは、今月の同紙連載「気になるあの人」5に、つぎの歌を引いて、こんなふうに書いていますね。

半開きのドアのむかうにいま一つ

鎖かぎされし扉とあり夫つまと暮くらせり

栗木京子

もちろんこれは心理の表現。どんなに愛し合う恋人同志でも、どんなに親しい夫婦や親子であっても、人間は心を全開にはできない。自分も相手もそうだ。もし全開にする相手だったら、なんだかおっかなくていたたまれなくて、とてもいっしょには暮らせない。だって人間はみな一人一人、孤独で淋しいのだ。一人だからこそ、同じように孤独で淋しいもう一人を愛し、思いやる心が生まれるのではないか。

そう思えば、「ひとりの音」も「秋深し」も、自然に受け入れられるでしょう。

選者の俵万智氏は、トンボを心の内に飼かっている少年、初恋あるいは母親への反発……?と。そして十月。菊まつり、七五三のお参りで、東北の秋も深まってゆきます。

やれやれと思ふ向もなく来る寒さ、

〔朝日俳壇〕／横浜市 小野文江

〈第四十号〉十月



独りにはひとりの音の秋深し

〔読売俳壇〕／盛岡市 小林路子

「惻々さくさくとしたものを読後に感じる」と選者の能村登四郎氏の感想。悲しい、痛ましいと感じられたわけですね。これは、たしか一昨年の読売紙上で読んだ句でした。

蓮の枯れて立つのも時季の景です。『俳句研究』から二つ。

あらひざらひ萎葉とさらし破蓮

〔花暦〕館岡沙織

生きざまの死にざまとなり蓮枯るる

〔海〕高橋悦男

いま、中尊寺の境内は菊花・菊・菊。みなさんの丹精の賜物たま、まさに精華。でも、

捨てられたまゝに咲くのも菊の花

小林一茶

一茶の、「茶「らしい」句です。何となくクリスタル、でなくて、おぼえてしまっていたのです。

\* 茶「季語に寄せて」は、不動堂にご祈禱を申し込まれた方に、月際に添えて隔月に発信しております。

# 研究／出版

平成11年11月以降

## 〔仏教〕

『止観明静』—多田厚隆『摩訶止観』の講述— 多田孝正・多田孝文 編・発行  
『金光上人関係伝承資料集』(一一五頁)

阿川文正監修・遠藤聡明・金子寛哉・片山泰徳 編著

浄土宗宗務庁内教学局同刊行会

## 〔歴史〕

『次子相続・母太郎』 『東北学院大学論集』歴史学地理学第33号 大石直正  
『岩手県平泉町柳之御所遺跡出土銅印』 平川 南

平泉遺跡群発掘調査報告書『柳之御所遺跡—第50次発掘調査概報—』

岩手県教育委員会

「みちのくの都のくらしを復元する—平泉—」 入間田宣夫

『ものがたり日本列島に生きた人たち—遺跡・上— 岩波書店

『寺塔已下注文の基本テキストと中世都市論—

『吾妻鏡』文治五年九月一七日条と平泉研究の問題点—』 川島茂裕

『史海』第47号

## 〔考古〕

『最新情報出土白磁四耳壺と印章』 『柳之御所資料館開館記念講演資料』

(ふれあい歴史のさと事業推進委員会) 平泉町教育委員会

『柳之御所遺跡の暦年代』

『山形考古』第6巻第4号

『柳之御所資料館常設展示図録』

佐藤嘉広  
平泉町

平泉文化フォーラム2000『瓦からみた平泉文化』

(ふれあい歴史のさと事業推進委員会) 平泉町教育委員会

『平泉の都市プラン—変遷と史的意義—』 『寧楽史苑』第45号

前川佳代

『平泉・柳之御所の性格—加羅之御所比定論—』

仲田茂司

『阿部正光君追悼集』(阿部正光君追悼集刊行会)

『柳之御所遺跡に礎石建物がある可能性』 『岩手考古学』第12号

羽柴直人

『東日本における青磁の出現時期』 『貿易陶磁研究』第20号

八重樫忠郎

『中世前期の輸入陶磁器について—90年代の概観—』

八重樫忠郎

『中近世土器の基礎研究』第15号

『鴛鴦文銅象嵌鏡轡について—法優寺殿跡出土轡との比較を中心に—』 久保智康

『志羅山遺跡第46・66・74次発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

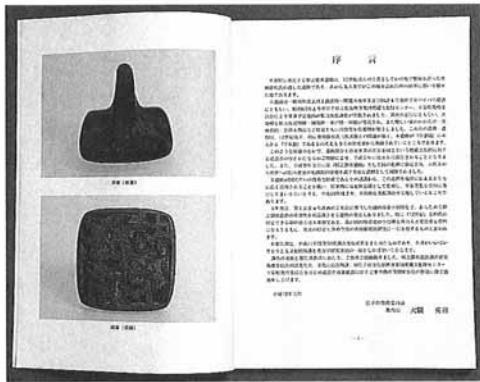
## 〔美術〕

『経絵の諸相』 『信の美—写経のこころ』 中尊寺

有賀祥隆

『装飾経の発生と展開』 『信の美—写経のこころ』 中尊寺

島谷弘幸



(茨城 小泉不二男氏)

三月二十五日、二十六日に開催されました全国椿サミット岩手・大船渡大会に、前後合わせて三泊四日の行程で参加いたしました。東京出発のツアーの一行約三十名とともに、椿旅を楽しんでまいりました。以下ご報告いたします。

二十四日(金) フラワー&ガーデニングショウ見学後、バスで仙台へ。

二十五日(土) サミット1日目 大会と交流パーティー

二十六日(日) 現地視察 世界の椿館・三面椿を見る

二十七日(月) 平泉見学 記念植樹、帰路へ。

翌日は、雪の中尊寺を訪れまし

た。千田貫首より法話をうかがい、重要文化財のツバキ文様の笈(おい・室町時代)を特別に見せていただきました。さらに、野外能楽殿の前に、紅・白それぞれのワビスケの記念植樹が行われました。昼食後、東北自動車道で一路東京へ。車内にて、村内さんよりベトナムでのツバキ調査の苦労話などを伺いながら、八時すぎ東京駅に着き、解散しました。



大会旅行中、中尊寺(会員)を訪問。紅白のワビスケを記念植樹する。  
(右、飯牟礼副会長さんと貫首)

(妙法院門跡 大久保良順師)

天台宗神奈川教区が、平成十二年度天台宗布教師連盟 関東信越地区協議会・研修会神奈川大会開催にあたり、当番教区として中尊寺前貫首故多田厚隆大僧正の講義『摩訶止観の講述』を上梓し、記念とされることは誠に意義深いことと思う。大僧正は昭和五十五年神奈川教区から中尊寺にご晋山になったが、この講述はその年八月から毎週一回開講されて第十講に至って終了されている。けれども、中尊寺一山その他の向学心に燃えた青年僧たちの要望に応じて、次々に講ぜられているし、外の会場にも出講されているので、その講義は誠に多い。大僧正の天台宗学顯揚についての熱意のほどが窺われる。その講席では常に、天台宗の

教えを理解せず、天台宗の寺に住むことの怠慢を叱っておられた。『摩訶止観』の理解実践こそは天台宗学を中心である。従ってその講義が聴けることは幸甚である。一口に『摩訶止観』といってもその十巻を講ずるのでなく単純に素読するだけでも、相当の時間を必要とするし、正直いって常に閱讀を心がけている者でも、箇所によっては常時辞書等の力を借りなければならず、通読も理解もそう簡単ではない。そのこともあってであろう、大僧正は『国訳一切経』諸宗部三に、田村徳海大僧正の名を以て国訳された『摩訶止観』の巻頭にある、これも田村大僧正述とされる『摩訶止観解題』をテキストとして用いられた。その『国訳

一切経』の一冊は、実質多田貫首のお若いときの労作であったはずで、従ってその『解題』もまた同様で、この講義は大僧正にとっては薬籠中のものであり、縦横無尽に説かれてある。その中に現れる語彙・書名・人物などから、天台宗史や教理の大概にわたって広く深く且つ平易に説明されて、宗学の基礎が尽くされると云えよう。大僧正の宗学のご理解は、何時も現実生活の中でなされていたが、恐らく師主多田孝泉師を通じて江戸末期の慧澄和尚の蘊蓄抱負を継承されているのであろうと想像する。とにかく、この十講を味読して、天台教学の復習とし、そこから自らの信念を布教敷衍されることを望み、序文とする。

## 鼓声山月に入る 別所教育老僧

(菅原光中)

修正会（元旦より山内諸堂を巡り九カ座修法。八日に結願）大徳院別所坊、先代の教育老僧が修法した時分は、現在より寒さも厳しく、結願の日も三日目、あるいは五日目に迎えることもあって、一日に勤める座数も多く、骨身にこたえたはずです。特に、牛玉導師という最も大事な役を永年勤められました。とにかく仏器に手がくっついてしまいう冷え込みでしたから、印を結ぶ指もこごえ、一度毎にまるめた手に息をふきかけ、手指をこすってはまた印を結ぶ、といった難儀なこと、下座に居る衆僧も「ナムクサマンダボダナンポロン」と真言をくり返し、老僧の修法が終えて打金が鳴らされるのをひたすら

待ったものでした。

一山法要（本坊をはじめ一山十八坊が総出仕で勤める年間四十八箇座に及ぶ法要）

老僧が法要出仕する時の所作は、まづ短めに結んだ緋絞白五条をかけ、中啓をほんの少し上下にふり乍ら、歩々小さく合て入堂して行く。上座に着くや眼鏡をひたいに押し上げ、指を口に軽くつけるや持参の経本をゆっくりめくる。梵唄読経のお声は古い鐘の音が土器に響いたような感じでした。それがいつも変ることなく渋い味わいと土着の風格をかし出していったように思います。

大徳院老僧はハヤシ方の小鼓役を担われ、勤められた舞台は数知れない。楽屋で鼓の調べに念を入れて、紐の締め具合、鼓のしめり加減をなんども整えている。やっと気がすむと傍らに用意された御神酒を、茶わんに七分目ほど満し、抹茶と同じように二口三口で頂戴される。ヨイショノと鼓と床几を取ってかまえ、半幕をこすって橋掛りから舞台へと向う。全ての所動が型になっていた。鼓と法躰が一体となって序破急と段々に進まれるが、見ていて今にも床几からひっくり返るので、と何度か心配したこともあり、小生も老僧の手ほどきを受けました。近頃まで拙い鼓の役を勤めてきましたが、能を楽しま

れた老僧の境地にはまだ／＼至りません。

稽古を終えての酒のことや、檀用での細かな心配りなど、思い出されることは山ほどあるのですが、振り返って見れば、老僧に接することが出来たのは、ほんの四、五年位だったでしょう。

老僧の双手の湯飲みに

御酒つげば

慈顔はころび

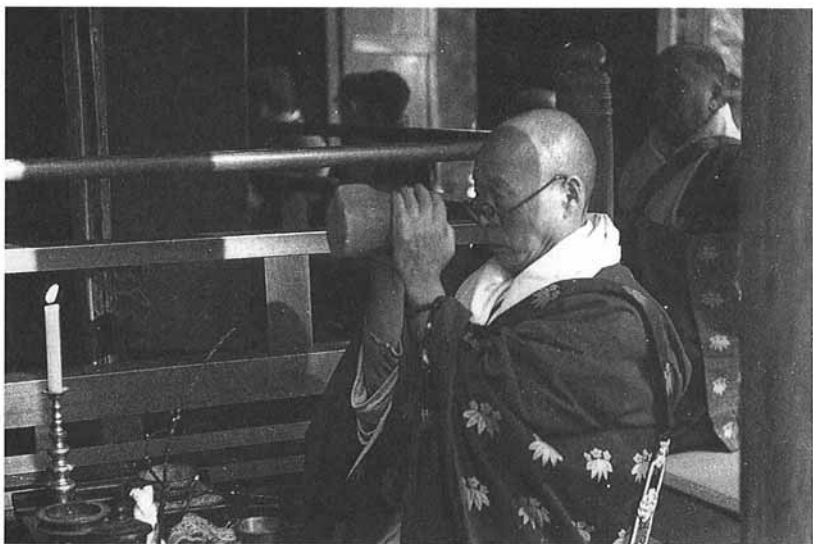
紅葉狩り

別所老僧ほど、美味しそうに酒をたしなまれた人を未だ知らない。

大僧正 佐々木教育師

大正三年三月十六日大徳院住職  
昭和四十七年七月二十一日遷化。

〔老僧追憶 了〕



□平成十一年

十一月六日

教区法要 一五五名 於石巻市東雲寺  
伝教大師報恩法要（唄散華対揚、伝教大師和讃）  
法話 興福寺 嶽内真弘師



十一月十三日

一斉托鉢 教区四〇名 毛越寺、中尊寺

十一月十四日

教区研修会 四三名 於中尊寺

〔大般若経理趣分〕の読誦と伝授

講師 真珠院 菅野澄順



□平成十二年

三月十五日

布教養成所研修会 於毛越寺

〔私の布教の工夫と実践〕

講師 興福寺 嶽内真弘師

四月三日

御修法七佛薬師大法奉修参勤 於延暦寺

中尊寺貫首 千田孝信師

六月十六・十七日

布教師東北北海道地区協議会及び研修会 四〇名

於瑞泉閣

〔開山一一五〇年中尊寺新讃衡蔵建立と平泉文化〕

講師 中尊寺貫首 千田孝信師

六月二十二・二十三日

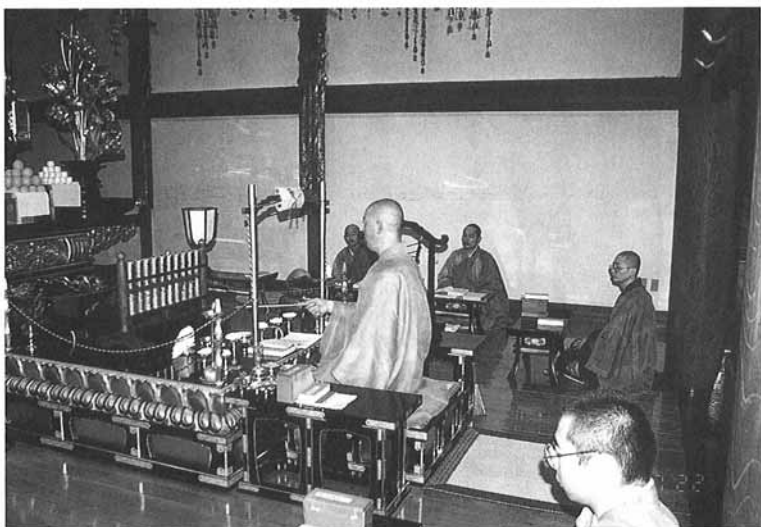
保護司・民生児童委員会総会 於神奈川県箱根湯本

地藏院 佐々木秀円出席

七月五日

人權啓発中央研修会 於宗務庁

金剛院 破石澄元出席



七月二十二日

〔不断経〕 陸奥仏青一七名出仕 於中尊寺本堂

□ 褒章 (平成十一年十月二十日)

住職三十年勤続表彰 願成就院 三浦高信

一宗公職歴任表彰 積善院 佐々木仁秀

(平成十二年十月二十三日)

住職三十年勤続表彰 大徳院 佐々木賢有

□ 学階授与 (平成十二年四月二十七日)

准講師 円乗院 佐々木邦世

□ 教師補任 (平成十一年十月十三日)

権律師 積善院法嗣 佐々木律秀

(同年十月二十九日)

権律師 地藏院法嗣 佐々木秀史

(平成十二年四月二十一日)

権僧正 積善院 佐々木仁秀

大僧都 薬樹王院 北嶺澄仁

僧都 自性院 北嶺澄照

少僧都 長楽寺 佐々木慎有

権少僧都 円教院法嗣 千葉快俊

□ 得度 (平成十二年二月二十七日)

願成就院法嗣 三浦智信

(同年九月十五日)

□ 敬吊 観音院法嗣 清水秀法

(平成十二年二月二十七日)

□ 観音院住職 大僧正 清水秀澄 八十八才

(同年八月五日)

□ 住職任命・解任 薬樹王院住職 権僧正 北嶺澄仁 六十五才

□ 解任 (平成十二年二月二十七日) 清水秀澄

□ 解任 (同年八月五日) 北嶺澄仁

□ 任命 (同年四月十八日) 観音院住職 清水広元

□ 任命 (同年九月一日) 薬樹王院住職 北嶺澄照

☆ 地球救援募金

八万五千五百八拾六円 中尊寺

☆ 伊豆諸島三宅島噴火救援募金

実施中

### 御神事能番組

五月四日

法楽  
古実式三番

開口 清水広元

祝詞 菅野康純

若女 佐々木長生

老女 北嶺澄照

大鼓 菅野宏紹

小鼓 菅原光聡

笛 佐々木秀厚

後見 菅野澄円

ツレ 佐々木五大  
シテ 北嶺澄照

### 能 竹生島

ワキ 菅野成寛

ツレ 菅野澄順

間 佐々木慎有

太鼓 菅野宏紹  
大鼓 佐々木長生  
小鼓 菅原光中  
笛 佐々木秀厚

開口

清水広元

五月五日

能

### 鞍馬天狗

シテ 佐々木邦世

ワキ 菅野康純

間 西谷の能力

木の葉天狗

菅野澄円

稚児衆 佐々木恭亮  
(沙那王) 千葉 晃  
子方 佐々木亮王

太鼓 菅野宏紹

大鼓 千葉快俊

小鼓 佐々木仁秀

笛 清水広元

秋の藤原祭り 中尊寺能 十一月三日

能

### 枕慈童

シテ 佐々木五大

ワキ 菅野康純

ツレ 佐々木秀厚

太鼓 菅野宏紹  
大鼓 千葉快俊  
小鼓 佐々木仁秀  
笛 清水広元

# 執務日誌抄

平成十一年十月～十二年九月

平成十一年

◇十月

- 四日 天台宗東京教区第六部一行六八名団参（貫首挨拶）。
- 五日 東京教区第七部一行八九名団参（貫首挨拶）。
- 六日 東京教区第三部一行五八名団参（貫首挨拶）。
- 七日 一関信用金庫五十周年記念式典・祝賀会。貫首出席（於一関ペリーノH）。
- 八日 仏文研邦世 大東町戦没者追悼式記念講演（いのちの季節）。

- 九日 貫首、多賀城市東北歴史博物館開館記念式典に出席（管財澄元・随行長生）。
- 十二日 東京教区第一部一行六七名団参（貫首挨拶）。
- 能申合せ（大広間）
- 陸奥教区寺庭婦人会岩手支部一行磐井三十三観音巡り来山。
- 十三日 東京教区第五部一行七一名団参（貫首挨拶）。
- 十四日 中尊寺杯職場対抗野球大会開会式（執事長 於商工会館）
- 十六日 全国生コン連合会長南博俊様一行二五名来山（貫首案内）。
- 十七日 お経を読む会（願成就院高信）
- 社会福祉法人黄金荘収獲祭（執事長）

- 平泉文化フォーラム99（歴史と文化を生かした町づくり）執事長ほか 於平泉郷土館
- 十八日 東京教区第二部一行三〇名団参（貫首挨拶）。
- 東北歴史博物館見学会（第一班、常住院ほか五名 於多賀城市）
- 十九日 東京教区第四部一行六二名団参（貫首挨拶）。
- 貫首、一関市にて講話（一関地区法人会、於ペリーノH）
- 平泉町戦没者追悼式（本堂）
- 県観光連盟観光客誘致説明会（二十日、事業部澄円 於名古屋中日パレス）。
- 白狐堂例祭（山内葉樹王院）
- 教区所長光中・副所長澄順、宗務庁へ出張（二十日）。
- 二十日 第十四回中尊寺菊まつり開幕法要（十一月十五日）
- 東京教区第八部一行八二名

- 団参（貫首挨拶）。
- 岡山教区寺庭婦人会一行一五名団参（会長・龍城院龍景子様、陸奥教区社会主任澄元案内）。
- 仏文研邦世、東京へ出張（三十一日、中尊寺開山一五〇年祭山家学会開催打合せ）。
- 新讚衡蔵前に勸募者芳名看板設置。
- 二十三日 医療法人三秋会長澤秋子氏出版記念・卒寿祝賀会（執事長 於日サンルート一関）
- 二十四日 「丸八会」（名古屋財界グループ）一行来山（執事長案内）。
- 軽米町民大学歴史コース一行来山（管財澄元案内）。
- 二十五日 横浜市曹洞宗正観寺様団参。新讚衡蔵建設委員会
- 新讚衡蔵建設報告会（鈴木嘉吉委員長）
- 二十六日 貫首、宇都宮市にて講話（栃木県立栃木女子高等学校文化講演

- 能申合せ（能楽堂）
- 教区所長光中・副所長澄順・庶務主任仁秀、仙台へ出張（一部仙岳院）。
- 二十八日 秀衡公御月忌（金曼供 本堂）
- 二十九日 ドイツ・ラインラントプファルツ州首相クルト・ベック氏一行三〇名来山（貫首挨拶・執事長案内）。
- 松井建設社長松井角平様来山（貫首応接）。
- 三十日 教区所長光中ほか四名、石巻市東雲寺へ出張（教区法要習礼）。
- 全国ブロック紙（火曜会）編集局長一行来山（邦世案内）。
- 三十一日 国際大学交流セミナー「日本事情―岩手を中心とする風土・文化の实地研修」一行来山（貫首挨拶・邦世案内）。
- 執事長、東京へ出張（一

- ◇十一月
- 一日 秋の藤原まつり開幕 藤原四代公追善法要、稚児行列、常の如し。
- インターナショナルプラス チックリサイクル99一行来山（東北大学奥脇昭嗣氏ほか）。
- 二日 菊供養会
- 郷土芸能奉演（平泉町達谷窟 毘沙門神楽）。
- 三日 能「殺生石」狂言「しびり」仕舞（地元・小桜会）
- 郷土芸能奉演（江刺市行山流角懸け鹿躍、平泉町行山流長部鹿踊り）。
- 菊まつりモデル撮影会
- 町功労者表彰式（執事長）
- 四日 貫首、水沢市にて講話（水沢市常盤公民館高齢者教室）。
- 宇都宮市宝蔵寺黒崎貞遠大

- 僧正本葬儀、当山より常住院高円・積善院仁秀・円乗院邦世参列。
- 一関地方振興局土木部より平泉駅前広場利用・整備計画につき聞き取り（執事長応対）。
- 五日 DCカード各支店長一行来山（総務慎重案内）。
- 勸公共政策調査会理事長山田英雄氏ほか来山（執事長案内）。
- 貫首、日光へ出向（輪王寺前御門跡柴田昌源大僧正通夜・密葬）。
- 町産業文化祭開会式（執事長）。
- 六日 教区法要（伝教大師報恩、於石巻市東雲寺、所長光中ほか六名出張）。
- 檀信徒総代旅行（法務部長生、教区法要出席後作並温泉）。
- いわき市内郷青年会議所一

- 行来山。
- 七日 栃木県佐野市佐野共同高等産業技術学校校長福田完輔様一行来山（貫首応接）。
- 八日 東北歴史博物館見学会（第二班、利生院ほか二名 於多賀城市）。
- 県観連教育旅行現地研修会来山（札幌市内中学校担当者一行、事業部澄照案内）。
- 三重県上野市長今岡陸之様来山（執事長応接）。
- 執事長、県広報誌「いわて王国」に開山一五〇年祭のインタビューを受ける。
- 九日 法務仁秀・宏紹、府中市へ出張（福聚教会東日本奉詠舞大会）。
- 財務行政懇談会（執事長 於役場）。
- 十日 如法写経十種供養会（七三名 出仕 本堂）。

- 二〇〇〇年平泉イベント観光客誘致説明会（執事長・事業部澄照 於盛岡北日）。
- 県観連旅行エージェンメントとの意見交換会（事業部澄照 於鶯宿・日森の風）。
- 十一日 国道4号線平泉バイパス開通式（執事長出席）。
- 柳之御所資料館開館式（執事長・管財澄元）。
- 日本原子力燃料株式会社顧問野沢清御夫妻来山（邦世案内）。
- 東北地方建設局長田崎忠行氏・同道路部長水本良則氏・岩手工事事務所長佐藤宏明氏来山（貫首応接・執事長案内）。
- 十二日 岩手県観光総合研修会（事業部澄照 於日花巻温泉）。
- 貫首、北上市江釣子公民館にて講話（随行宏紹）。
- 仏文研邦世、湯沢市了翁禅

- 師顕彰準備会に出張（十三日、於グランドH）。
- 十三日 一隅を照らす運動陸奥教区托鉢（町内、貫首ほか一〇名出向）。
- 十四日 教区研修会（「大般若経理趣分」読誦と伝授、講師・真珠院澄順 受講者四三名、内、一山二二名）。
- 岩手県文化財愛護協会創立三十周年記念式典（貫首・随行邦世 於盛岡グランドH）。
- 菊まつり表彰式（大広間）。
- 県観連観光客誘致説明会（十七日、事業部澄照 於大阪ヒルトンH）。
- 十五日 平泉町民号（十七日、九州方面 宏紹）。
- 東北歴史博物館出陳仏像抜魂法要（執事長・管財澄元・法務部長生ほか 於多賀城市）。
- 十六日 仏文研邦世 一関市で講話（「古聞のすゝめ」一関市小中学校校長研修会）。

- 十七日 埼玉信用金庫一行団参（最終二八班、不動堂にて祈禱）。
- 十八日 職員研修旅行（第一班 十九日、出羽三山 秀厚同行）。
- 二十一日 願成就院長女結婚式（本堂）。
- 二十二日 「岩手山青年の家」主催（陸奥街道平泉）一行来山。
- 二十三日 天台会御建夜（結果勤 本堂）。
- 二十四日 天台会厳修（御影供 本堂）。
- 平泉イベント観光誘致説明会（執事長・事業部澄照 於仙台 匂当台会館）。
- 栃木龍蔵寺様来山（貫首案内）。
- 二十五日 職員研修旅行（第二班、宏紹）。
- 平泉観光レストセンター小野寺邦夫氏のJTBスタンプ会会長就任を祝う会（貫首ほか四名出席 於日武蔵坊）。
- 新讚衡蔵建設委員会。
- 二十六日 教区副所長澄順・庶務主任仁秀、仙台へ出張。

- 二十七日 仏文研邦世 盛岡「歴史フォーラム」基調講演（如意輪講式）に聞く、於盛岡西部公民館）。
- 二十九日 貫首、日光へ出向（輪王寺前門跡柴田昌源大僧正本葬儀、随行澄元 於紫雲閣）。
- 教区所長光中、宗務庁へ出張（一日、宗務所長会議）。
- 東北歴史博物館出陳中の旧関伽堂薬師・騎師文殊菩薩像、新讚衡蔵に還座。
- 三十日 念法真教長谷川霊信師来山貫首応接・案内）。
- ◇十二月
- 一日 月次大般若会（本堂）。
- 貫首、盛岡市にて講話（岩手県信用農業協同組合「友信会」定期総会、随行快俊 於盛岡グランドH）。
- 丈六薬師入魂法要（新讚衡蔵）ホテルオークラ副社長橋本保雄



- 様来山（総務慎有案内）。
- 二日 平泉町観光推進実行委員会  
東北誘客キャラバン（～三日、仙台方面、事業部澄照）
- 三日 岩手県交通ガイド研修（執事長・邦世・広元 本堂）
- 四日 臨時一山会議
- 七日 薬師会（讃衡蔵）  
町観光推進実行委東京誘客キャラバン（執事長・事業部澄元 於根津弥生会館）
- 八日 金色堂諸仏入魂法要（東北歴史博物館「金と銀展」より選座）  
毛越寺通白鹿モニュメント  
除幕式（執事長 於駅前交差点）  
山内年末風景マスコミ取材。
- 十日 日本ツバキ教会副会長飯牟礼五郎様来山（明春三月椿協会開催につき打合せ、貫首・邦世応援）。
- 十一日 新讚衡蔵の企画展運営打合せ（～十二日、執事長・管財澄元 於仙台市博）。

- 十二日 平泉駅前広場第一回ワークショップ（執事長出席 於役場）
- 十三日 ㈱フタバ産業梅村雅彦会長  
歓迎レセプション（執事長出席 於日武蔵坊）  
澄順、大津市へ出向（前毘沙門堂門跡・法曼院住職菅田玄昭 大僧正通夜・密葬、於滋賀院）。
- 中尊寺職員忘年会（於岩間会館）
- 十四日 弥陀会（本堂）
- 十五日 平泉町観光協会理事会（事業部澄照）  
一関・平泉水辺プラザ整備懇談会（執事長 於ペリーノ日）  
宗務庁主任研修（～十六日、庶務主任仁秀・財務主任慎有）
- 十六日 平泉町観光推進実行委員会（執事長）  
新讚衡蔵建設委員長鈴木嘉吉氏来山。
- 十七日 白山会（本堂）

- 十九日 お経を読む会（大徳院後住慎有）  
中尊寺菊まつり反省会（春興於泉屋）
- 二十日 境内諸堂・仏像煤払い（マスコミ取材一社）  
貫首、盛岡市へ出向（岩手放送新春対談番組録画撮り、随行 広元 於盛岡グラウンドH）。
- 二十一日 一関経営者協会月例会（総務慎有 於Hサンルート一関）  
節分講中会議（於泉橋庵）  
県観連教育旅行誘致宣伝幹事会（事業部澄照 於県民会館）  
管財澄元、東京へ出張（開山一一五〇年祭「企画展」經典借用打合せ、於東京根津美術館）。
- 二十二日 初詣警備会議（執事長・管財澄元於西行苑）  
貫首・総務慎有、鎌倉へ出向（平山郁夫画伯宅）。
- 二十四日 文殊会（経蔵）

- 執事長、盛岡市へ出張（NHK盛岡放送局へふるさと自慢コーナー）出演。
- 柳之御所資料館前イルミネーション点灯式（執事長）
- 修正会準備（結果勲）
- 二十五日 TBS「王様のランチ」  
境内撮影（～二十八日）
- 二十八日 恒例御供餅つき
- 三十一日 午後三時 一山総礼  
TBS系年末風景生中継。

平成十二年

◇一月

- 一日 〇時 新年祈祷護摩供修行（本堂）  
六時 東山町「若水送り」  
着  
九時半 正月祈祷護摩供（本堂）  
十時半 総礼  
修正会 釈迦供（本堂）

- 二日 九時半 正月祈祷護摩供（本堂）  
十時 修正会 薬師供（峯菜師）  
十四時 謡初め（庫裡広間）
- 三日 九時半 正月祈祷護摩供（本堂）  
修正会 山王供（山王堂）  
十一時半 元三会 慈恵供（本堂）
- 四日 修正会 熊野供（瑠璃光院）
- 五日 修正会 文殊供（経蔵）  
大般若会（利生院弁財天堂）  
梵焼供（結果勲、開山堂）
- 六日 修正会 釈迦供・月山供（釈迦堂）  
結果、本日より寒修行（町内托鉢）  
中国天台鼎盛双一氏・池玉東氏来山（開山一一五〇年祭書道展に中国天台の子供達の書奉納

- 七日 修正会 白山十一面供（本堂）  
大般若会（本堂）  
十四時 修正会 弥陀供（金色堂）  
春の祭礼神事能番組決定「竹生島」「鞍馬天狗」  
町新年交賀会（執事長）  
事業部澄照、IBCラジオで開山一一五〇年祭を紹介。
- 八日 修正会 旧関伽堂薬師供（讃衡蔵）一字金輪仏・千手観音法楽  
修正会結願  
十三時 恒例「金盃抜き」
- 十日 開山一一五〇年祭「映像と法話」受付開始。
- 十一日 執事長・事業部澄照、県庁ほか新年挨拶回り。  
一関地区防火演習担当者打合せ会（管財澄元 於泉屋）

十二日 県政懇談会知事との対話  
 (執事長 於平泉郷土館)

十三日 前文部大臣有馬朗人参議院議員来山(前日、一関にて講演。貫首挨拶・執事長案内)。

十四日 慈覚会(御影供 本堂)  
 防火演習全体打合せ(執事長・管財部康純 於平泉レスト)  
 黄金王国推進委員会全体会議(事業部澄照 於一関市役所)  
 記者クラブ懇談会(執事長ほか、八社二名)  
 お経を読む会(積善院仁秀)

十七日 総務慎有、東京へ出張(銀座村越画廊)。

十八日 念法真教桶屋良祐師ほか三名来山。  
 管財澄元、東京へ出張(十九日、一一五〇年祭企画展、浅草寺・東博・植村和堂氏ほか)

二十日 菊まつり写真コンテスト審査会(広間)

十一日 建国記念の日奉祝会(執事長 於小島神社)  
 貫首、一関市にて講話(親子チャリティ狂言の会、随行宏紹 於一関文化センター)。

十二日 「木六駄」を観る会(野村万作・萬斎師ほか。於能楽堂)

十四日 涅槃会御逮夜(本堂)

十五日 一山協議会(広間)  
 涅槃会(本堂)  
 お経を読む会(金剛院澄元 事業部澄照、名古屋・大阪へ出張(十八日、修学旅行誘致説明会)。

十六日 町観光協会役員会(執事長)

十七日 教区所長光中、群馬県へ出張(宗務所長会長祝賀会、於伊香保)。

十八日 貫首、栃木県鹿沼市で講話(栃木県市町村文化財保護審議委員会、於鹿沼市民文化センター)。

二十二日 貫首、大津市へ出向(前毘沙門堂門跡菅田玄昭大僧正本葬儀、随行長生 於滋賀院)。

二十三日 一関地区防火演習(中尊寺特設消防隊出動)  
 中国青年指導者代表团一行来山(管財澄元案内)。

二十四日 一山協議会  
 新讃衡蔵建設委員会  
 県観連教育旅行誘致宣伝幹事会(事業部澄照 於盛岡振興局)

二十五日 貫首、江刺市にて講話(ホテルニュー江刺新春講演会「経清、清衡と江刺」、随行慎有)。

二十六日 花巻温泉発丑会(執事長出席)  
 町観光協会役員会(総務慎有・事業部澄照・澄元 於泉橋庵)  
 管財澄元、関西方面へ出張(二十八日、企画展示借用依頼、於青蓮院ほか)。  
 一関信用金庫理事長八重樫次男 様来山(貫首応接)。

十九日 陸奥教区檀信徒会役員会(教区所長光中ほか)  
 仏文研邦世、愛知平泉寺・京都西方寺へ史料探訪(二十二日)。

二十日 NHK「にっぽん列島小さな旅」に寒行者ら放映。  
 平泉一一五〇年祭みちのくゴールデンルート会議(総務慎有 於盛岡日メトロポリタン)  
 管財澄元、東京へ出張(華鬘引き取り、東博より)。  
 日本棋院梶原武雄九段・袴陽子四段来山(執事長案内)。

二十一日 貫首、平泉郷土館にて講話(三町一村議会議長・副議長・議会運営委員長・常任委員長協議会)。

二十二日 貫首、一関市にて講話(丁Aいわて南園芸特産推進大会、随行澄元 於ダイヤモンドパレス)。

二十三日 貫首、福島県須賀川市にて

二十八日 初護摩(不動堂)

二十九日 山内利生院法事(本堂)  
 北上川流域連携交流会(NPO法人化に伴う臨時総会、執事長 於Hサンルート一関)

三十一日 管財澄元、盛岡市へ出張(金色堂模型回収、県立博物館より)。

◇二月

一日 月次大般若会(本堂)

三日 恒例大節分会関取琴錦招く。  
 歳男歳女一〇八名。町内園児が豆を撒く。  
 本日、寒修行満行。

四日 天台宗ハワイ別院荒了寛師来山(貫首応接)。

六日 貫首、京都へ出向(前座主山田恵謐大僧正七回忌追善の集い、随行澄元於都ホテル)。

七日 東北銀行取締役古明地宏氏来山(執事長挨拶)。

八日 中尊寺坂下交差点改良工事に伴う設計立ち入り説明会

二十五日 貫首、花泉町にて講話(花泉町社会福祉大会特別講演、随行澄元 於総合福祉センター)。  
 岩手日日文化賞贈呈式(総務慎有 於ペリーノH)

二十七日 町観光協会定時総会(執事長・事業部澄照 於商工会館)  
 山内願成就院法嗣智信得度式(本堂)

二十八日 一老分、山内観音院住職清水秀澄師、遷化。  
 岩手朝日テレビ「平山郁夫画伯と奥のほそ道」平泉中

- 二十九日 尊寺を描く」放送。  
観音院秀澄師密葬（自坊）、火葬。  
雪解けて古道心院跡の臺 孝信
- ◇三月
- 一日 月次大般若会（本堂）  
（狹）フタバ産業平泉工場新築工事地鎮祭（総務慎有）。
- 三日 平泉町観光審議会・文化観光施設等整備運営委員会（総務慎有 於役場）
- 四日 観音院秀澄師通夜（自坊）  
観音院秀澄大僧正本葬儀・告別式（本堂）
- 五日 貫首、「一隅を照らす運動」群馬地方大会にて講話（六日、於群馬県伊香保町）。
- 六日 不動堂にて秘仏御開帳のため不動尊像抜魂遷座。同入魂法要（峯薬師堂）  
町観光推進実行委員会（事

- 七 日 業部澄照 於役場）  
接客向上研修会（事業部澄円・職員四名 於平泉郷土館）
- 九 日 町内長島保育所お別れ遠足 六〇名来山。
- 十一日 貫首、東京へ出向（二十二日、孝道教団法嗣岡野正純師結婚式、随行慎有 於新高輪プリンスH）。
- 十二日 教区所長光中・庶務主任仁秀・財務主任慎有、陸奥一部（宮城県）寺院会へ出張。
- 十三日 管財澄元、盛岡市へ出張（企画展打合せ、於NHK盛岡放送局）。
- 十四日 狹小西美術工藝社小西倬也氏、八角須弥壇（模）・経箱十合奉納（貫首応接）。
- 十五日 寺院婦人岩手支部役員会  
平泉町観光協会写真コンテスト審査会（事業部澄円 於観光案内所）  
布教師研修会（於毛越寺）

- 十六日 旧讃衡蔵諸仏抜魂法要  
貫首、宇都宮市へ出向（更生保護法人尚徳有隣会創立九十周年記念式典、於ブラザイン・くらみ）。
- 十七日 町観光協会企画宣伝部合同会議（事業部澄照・澄円）  
県観連教育旅行誘致宣伝幹事会（事業部澄照 於つくし園）  
町観光協会役員会（総務慎有）  
基衡公御月忌（胎曼供 本堂）  
お経を読む会（円乗院邦世・「秀衡母」に見る女性の信仰）  
定例一山会議（大広間）
- 二十日 春彼岸会法要（法華三昧）
- 二十三日 県観連通常理事会・総会（事業部澄照 Hニューカーリーナ）  
新讃衡蔵建設委員会（最終回、於一関蔵H）
- 二十四日 開山会護摩供（開山堂）  
新讃衡蔵落慶法要・記念式典（披露席 於平泉レスト）

- 二十五日 「源義経公東下り保存会」総会（事業部澄照、於滝沢漁店）。
- 二十六日 安達流主宰安達瞳子様来山（邦世案内）。
- 二十七日 町観光推進実行委岩手県内誘客キャラバン（執事長 梶戸ほか）  
日本椿協会一行八一名来山、記念植樹（釈迦堂前・紅白一対。貫首挨拶）。
- 二十八日 教区所長光中、宗務所長会議に出張。
- 三十日 町観光推進実行委岩手県内誘客キャラバン（三十一日、於久慈市・二戸市 事業部澄照）  
願成就院高信、常勤を解く。
- ◇四月
- 一日 月次大般若会（本堂）  
一字金輪仏抜魂法要  
平泉文化会議所総会（執事長 於役場）
- 二 日 管財澄元、東北歴史博物館

- 三 日 へ出張（中尊寺経資料収集）  
貫首、御修法出仕のため本山へ出向（十二日）。
- 達谷西光寺開山一二〇〇年大祭法要（一老常住院高円・随行澄円 於毘沙門堂）
- 四 日 事業部澄照・澄円、盛岡市へ出張（開山祭テレビCM打合せ）。
- 五 日 澄元、東京へ出張（六日、野村万斎師稽古場「野村よいや舞台」披露）。
- 七 日 「映像と法話」試写会（職員）。
- 八 日 仏生会（本堂）  
お経を読む会（釈尊院成寛）
- 九 日 陸奥仏教青年会総会（執事長）
- 十日 平泉町観光協会「東下り行列」主要役者発表会（事業部澄照 於平泉レスト）  
「映像と法話」試写会（観

- 十二日 光岡関係者・職員）  
陸奥教区寺院婦人、岩手支部総会（執事長出席 於毛越寺）
- 十三日 弁慶力餅競技会保存会総会（事業部澄照出席 於泉屋）  
町観光推進実行委誘客キャラバン（十四日、新潟県方面 事業部澄円）  
えさし郷土文化館落成式・祝賀会（管財澄元出席）  
総務慎有、名古屋へ出張（十四日、開山一二五〇年祭説明会、於JTB中部営業本部）  
京都科学社長片山英伸氏来山（貫首応接）。
- 十四日 産経新聞盛岡支局長塩塚保氏来山（執事長応接）。
- 十四日 菊まつり協賛会総会（大広間）  
春の藤原まつり交通警備会議（執事長・管財部康純・事業部澄照 於西行苑）

- 県観連教育旅行誘致幹事会  
(事業部澄照 於えさし藤原の郷)  
県観連事務局長菅原誠郎氏来山。
- 十五日 観音院四十九日法事(本堂)
- 十六日 毛越寺開山一一五〇年慈覚大師鑽仰法要(貫首出向)  
恒例花まつり
- 十七日 神事能申合せ(大広間)
- 十八日 一山協議会
- 十九日 秘仏開眼・慈覚大師尊像遷座法要  
中尊寺開山一一五〇年祭統一取材
- 株式会社コイワチケン設立披露宴(貫首・執事長 於日武蔵坊)
- 二十日 開山一一五〇年祭開闢法要(十一月十日、秘仏御開帳・映像と法話)  
黄金王国推進委報道関係招待(事業部澄照・澄円 日武蔵坊)
- 三日 源義経公東下り行列(経公役・タレントの妻夫木聡。人出七万五千人と観光協会発表。盛全) 郷土芸能奉演(いわき太鼓)。田辺市長脇中孝氏一行来山(貫首挨拶・執事長案内)。
- 四日 古実式三番  
神事能「竹生島」  
郷土芸能奉演(平泉町赤伏神楽・胆沢町村ノ木沢念仏剣舞・同都鳥鹿踊)。
- 五日 古実式三番  
神事能「鞍馬天狗」  
郷土芸能奉演(江刺市角懸鹿躍・平泉町達合毘沙門子供神楽)。  
弁慶力餅競技大会表彰式(参務秀圓 於滝沢魚店)
- 六日 五日間の観光客入り込み数は十七万八千人(平泉町観光協会発表)。
- 六日 山王講(山王堂)

- 二十一日 町観光協会(役員会、事業部澄照)  
春の藤原まつり打合せ会(事業部澄照 於泉橋庵)
- 二十二日 貫首、京都へ出向(京都山科毘沙門堂御門跡森川宏映大僧正晋山式、随行澄円 披露宴・於全日空H)。  
陸奥教区会、一隅理事会  
陸奥教区寺庭婦人岩手支部総会(大広間)
- 二十三日 一関交通安全協会三十周年記念式典(執事長 於ベリノH)
- 二十五日 貫首、大阪へ出向(念法真教本山諸堂落慶、於大阪市金剛寺)。  
一関地区防災協会総会(管財部康純 於両警消防組合本部)  
町観光推進実行委幹事会(事業部澄照 於役場)
- 二十六日 黄金王国推進委総会(事業部澄照 於一関市役所)
- 二十七日 町観光協会(役員会、事業部澄照)  
春の藤原まつり打合せ会(事業部澄照 於泉橋庵)
- 二十八日 貫首、京都へ出向(京都山科毘沙門堂御門跡森川宏映大僧正晋山式、随行澄円 披露宴・於全日空H)。  
陸奥教区会、一隅理事会  
陸奥教区寺庭婦人岩手支部総会(大広間)
- 二十九日 第二十一回 西行祭短歌大会(貫首挨拶・執事長案内)。  
(講師 藤岡武雄師)
- 三十日 貫首賞「姑と我と夕食作り」  
つつ粥金買わむ話決めたり(千田庄子・前沢町)
- 三十一日 春の藤原まつり始行  
法要、稚児行列、常の如し。  
郷土芸能奉演(胆沢町柳田念仏剣舞)。  
中尊寺総代会総会  
開山護摩供(開山堂)  
東下り行列レセプション(執事長・事業部澄照 於日武蔵坊)  
郷土芸能奉演(達合窟毘沙門坊)

- 二十七日 神事能申合せ(能楽堂)  
群馬教区禅養寺様二九名団参回向。  
中華人民共和国国家文物局副局長郑欣森様一行来山(貫首挨拶・執事長案内)。
- 二十九日 第二十一回 西行祭短歌大会(貫首挨拶・執事長案内)。  
(講師 藤岡武雄師)
- 三十日 貫首賞「姑と我と夕食作り」  
つつ粥金買わむ話決めたり(千田庄子・前沢町)
- 三十一日 春の藤原まつり始行  
法要、稚児行列、常の如し。  
郷土芸能奉演(胆沢町柳田念仏剣舞)。  
中尊寺総代会総会  
開山護摩供(開山堂)  
東下り行列レセプション(執事長・事業部澄照 於日武蔵坊)  
郷土芸能奉演(達合窟毘沙門坊)
- 十五日 西磐井郡市仏教会(法務部長 生 於一関市祥雲寺)
- 十六日 県観連総会(執事長ほか 於毛越寺レスト。平成十二年度岩手県観光表彰者は平泉町観光協会会長青木茂氏・一関同会長菅原茂氏)
- 十七日 カッコーの会(執事長出席 於ホテルニュー江刺)
- 十八日 町村議会職員一行来山(貫首法話)。  
紫波町蜂神社総代長須川勘十郎氏・同町消防団長藤原恒久氏来山(執事長応接)。  
弘文研邦世、大正大学へ出張(山家学会開催の打合せ)。
- 十九日 教区所長光中、弘前市へ出張。  
商工会青年部総会(事業部澄照)
- 二十日 中尊寺杯ゲートボール大会(執事長 於町営ゲートボール場)

二十一日 お経を読む会（法泉院春興）  
 二十二日 栃木県立博物館館長古口紀夫氏・作家松本富生氏来山（貫首応援）  
 二十三日 藤原まつり反省会（事業部澄照）  
 二十四日 平泉商工会総会（執事長 於商工会館）  
 野の花美術館館長志賀かう子氏来山（貫首応援）  
 二十五日 建設省ウォーキングトレイル舗装試工立合い（観音院南側）  
 二十六日 貫首、盛岡市へ出向（「岩手日日新聞社」企画、県立大学西澤潤一学長との対談、随行邦世 於盛岡Hメトロ・ニューウイング）  
 平泉をきれいにする会総会（管財部康純 於役場）

岩手労働基準協会一関支部総会（総務慎有 於ペリーノH）  
 二十七日 中尊寺杯バスケットボール大会開会式（執事長）  
 二十八日 千厩町婦人会研修一行来山（貫首法話）  
 二十九日 一関地区交通安全協会総会（執事長 於幸生会館）  
 千葉初男氏・岩淵勝次郎氏中尊寺神事能地謡出仕五十年祝賀会（貫首ほか五名）  
 三十日 東北郵政局長より郵政事業への協力に対し、感謝状贈呈される（執事長 於仙台グラントH）  
 三十一日 檀信徒総代旅行（六月二日、神戸方面 法務部長生）  
 「ふれあい歴史のさと事業」推進委員会（執事長 於役場）

岩手労働基準協会一関支部総会（事業部澄照 於盛岡農林会館）  
 福島教区第三部永蔵寺様一九名団参（貫首挨拶）  
 ◇六月  
 一日 月次大般若会（本堂）  
 法務仁秀・宏紹、神戸へ出張（福聚教会創立五十周年記念フェスタ神戸慶讃法要）  
 平泉菊花会総会（春興 於泉屋）  
 四日 伝教会（御影供 本堂）  
 執事長、東京へ出張（ふるさと平泉会総会、於東京池之端文化C）  
 六日 町観光協会役員会（事業部澄照）  
 八日 芭蕉祭俳句大会事務局会議（事業部澄照 於役場）  
 九日 朝東北電力ほか電力会社一行来山（貫首法話・執事長案内）

十日 TBSラジオ「土曜ワイド・永六輔その新世界」で貫首インタビュー（八時三〇分～一三時 山内）  
 喜校会連合会発表会（能楽堂）  
 日本国際協力事業団一行来山（貫首挨拶・執事長案内）  
 十一日 法華経一日頓写経会（二三名参加）  
 前平泉町長穂積昭慈氏勲四等瑞宝章受章祝賀会（総務慎有 於毛越寺レスト）  
 十三日 水沢市正法寺町田大謙山主晋山式並びに庫裡修理落慶法要（貫首出席・随行慎有）  
 十四日 慈覚大師報恩法要（胎曼供）

山家学会打合せ。  
 十五日 中尊寺門前会総会・研修会（貫首・執事長ほか）  
 十六日 布教師会東北・北海道地区協議会総会・研修会（十七日、於H瑞泉閣）  
 一関信金総代会（総務慎有）  
 弁慶力餅競技保存会研修会（事業部澄照 於西行苑）  
 十七日 開山一五〇年祭山家学会学術大会開催（開会式・法楽 本堂、学術発表 大広間。十八日発表、於H武蔵坊）  
 十八日 ふれあい歴史のさと事業「歩き・み・ふれる歴史の道」東北ブロック大会一行来山。  
 十九日 管財澄元、東京へ出張（企画展「信の美」運営打合せ、於東博）  
 二十日 自在坊蓮光忌法要（本堂）  
 二十二日 貫首、天台宗議會「新成会」に出席（二十三日、於熱海）。

二十五日 山内瑠璃光院法事  
 東北大学教授有賀祥隆氏・青山学院大学教授浅井和春氏、美術工芸品調査に来寺。  
 二十六日 建設省一関前堀排水機場・平泉排水機場竣工式・北上川学習交流館起工式（執事長 於フライダルホール豊隆）  
 「社会を明るくする運動」実施委員会（執事長 於保険C）  
 県観連教育旅行誘致宣伝幹事会（事業部澄照 於盛岡プラザ）  
 二十八日 管財澄元、文化庁へ出張（金色院復元について）  
 陸奥一部永清寺様三〇名団参回向（導師貫首）  
 観世流観世元信師来山（仏文研邦世案内）  
 芭蕉翁追善法要（本堂）  
 芭蕉祭俳句大会（講演・仏文研邦世「それぞれの平泉―賢治・青柳から楸柳・有馬氏まで」大

広間)  
三十日 NHK教育TV「趣味悠々  
／歴史みち らくらくウォー  
キング」ロケ(執事長出演)  
日光市長斉藤隆男氏来山(貫  
首応接)。

◇七月

一日 月次大般若会(本堂)  
前平泉町消防団長菅原惇氏勲  
五叙勲祝賀会(執事長 於毛  
越寺レスト)。  
日光市教育委員会一行来山  
(貫首応接)。  
二日 一山協議会  
四日 平泉水かけ神輿警備会議  
(管財康純 於商工会館)  
五日 葛巻町高齢者大学一行四一  
名来山。  
六日 管財澄元、京都博・奈良博  
へ出張(企画展打合せ)。  
七日 貫首、盛岡市へ出向(一日  
盛岡保護観察所長)。

九日 如法写経十種供養会、頓写  
法華経奉納式  
中尊寺杯ソフトテニス大会  
(執事長 於町営テニスコート)  
十二日 県観連旅行エージェンツ招  
待者一行来山。同交歓会(事  
業部澄照・澄円 於つくし園)。  
十四日 慈覚大師報恩法要(御影供)  
一関観福寺様檀徒一行随喜。  
十七日 清衡公御月忌(胎曼供 本堂)  
惠泉女短大学長島時子氏来山  
(中尊寺へス開花状況確認)。  
十八日 県観連教育旅行誘致宣伝部  
総会(事業部澄照 於G.P.田老)  
十九日 町「社会を明るくする運動」  
街頭宣伝(執事長)  
胆沢町「愛宕成人大学」一  
行来山(貫首法話・講師仏文研  
邦世)。  
二十日 J.R.東日本「座禅&ウォー  
キング」来山(事業部澄照・  
澄円)。

(二十一日 法華経不断経習礼(陸奥仏青)  
群馬教区遍照寺様団参(貫  
首挨拶)。  
平泉水かけ神輿前々夜祭  
(執事長 於観自在寺院跡)  
二十二日 不断経読誦(陸奥仏青・本堂)  
管財澄元、仙台へ出張(平  
等院展) 於仙台市博)。  
木場木遣り保存会木響会、金  
色堂前にて木遣り奉納(同  
奉納額を納める)。  
富岡八幡葵太鼓奉演。  
江東区長室橋昭氏来山(貫首  
応接)。  
江東区長ならびに富岡八幡  
宮神輿連合会歓迎会(貫首・  
執事長ほか出席 於日武蔵坊)  
二十三日 平泉総社神輿渡御(金色堂前  
にて貫首挨拶)  
陸奥仏教青年会研修(貫首  
講話 広間)。  
二十四日 管財澄元、東京へ出張(二

十五日、企画展借り出し、於東博)。  
二十七日 大文字まつり警備会議(法  
務長生・事業部澄照 於西行苑)  
県商工労働観光部次長大沼勝氏  
来山(執事長案内)。  
二十八日 総務部広元、盛岡市へ出張  
(二一五〇年祭書道展挨拶)。  
三十日 観光客動態調査(平泉町観光  
商工課 境内)。  
三十一日 平泉町教職員一斉研修会  
(貫首講話)  
江刺教育研究会一行来山  
(写経と拝観)。

◇八月

一日 月次大般若会(本堂)  
ふるさと切手「金色堂」贈  
呈式(本堂)  
二〇〇〇年平泉イベント「柳之  
御所資料館特別展」開催(執  
事長出席)  
三日 管財澄元、相馬市へ出張(全  
文連東北ブロック役員会、於中村

神社)。  
四日 〔平和の鐘〕打鐘、十五時  
半。  
一関七夕祭り審査会(事業  
部澄照 於一関商工会議所)  
五日 山内薬樹王院住職北嶺澄仁  
師遷化。  
六日 盛岡市創玄会一行(書道展と  
りまとめ)来山(総務挨拶)。  
七日 夏安居(結果勲、開山堂)  
町観光協会役員会(執事長)  
八日 薬樹王院澄仁師火葬・通  
夜・密葬(自坊)  
九日 薬樹王院権僧正澄仁師本葬  
儀(本堂)  
十日 梵焼供(結果勲、常の如し)  
大文字まつり打合せ(事業  
部澄円)  
十一日 文化庁長官佐々木正峰氏来山  
(貫首挨拶・執事長案内)。  
十四日 第二十四回中尊寺新能  
能「兼平」(内田安信師)

「殺生石」女体(佐々木宗生師)  
狂言「二人大名」(野村萬斎師)  
十六日 第三十六回平泉大文字まつり  
(最近になく浄火字影明瞭)  
二十日 毛越寺施餓鬼会(二老大徳院  
賢有参席)  
二十一日 県観連教育旅行現地研修会  
(総務快俊 於日花巻温泉)  
二十二日 同一行来山(事業部澄円案内)。  
二十三日 大施餓鬼会御逮夜(本堂)  
黄金王国キャラバン反省会  
(事業部澄照 於一関市役所)  
浄土真宗鹿兒島教区婦人会  
一行一五名来山。  
二十四日 大施餓鬼会・放生会(本堂)  
一関警察官友の会総会(執  
事長 於D.バレス)  
二十五日 大正大学木村周誠氏カルチ  
ャー一行来山(執事長挨拶)。  
東北大学有賀祥隆氏来山(企  
画展打合せ)。  
二十八日 管財澄元、東北歴史博物館

へ出張(企画展示ケース借用)。

二十九日 二〇〇〇年平泉イベント全体会議(事業部澄照 於役場)

東海教区延命寺様一一名団参(仏文研邦世案内)。

三十日 管財澄元、相馬市へ出張(全文連東北ブロック大会)。

群馬教区遍照寺様団参(貫首挨拶・仏文研成寛案内)。

三十一日 町内龍玉寺施餓鬼会(三老利生院円融参席)。

◇九月

一日 月次大般若会(本堂)

(株)フタバ平泉工場竣工式・披露(執事長 於日武蔵坊)

山形県瀬見温泉亀割観音例祭(円教院快恩参席)

二日 (株)フタバ平泉役員一行来山(貫首挨拶・執事長案内)。

平泉文化会議所映画上映会(羽田澄子監督「統一住民が選択した町の福祉」 貫首ほか参加)。

三日 於郷土館 泰衡公御月忌(金曼供 本堂) 開山一二五〇年祭郷土芸能奉演(本日より、胆沢町山流郡鳥鹿鹿)。

五日 大正大学山田昭全氏一行来山(仏文研邦世案内)。

仙台三越平山郁夫展開催(十日、境内素描七点出品、貫首・総務慎重)。

県観連教育旅行誘致宣伝幹事会(事業部澄照 於県庁)。

管財澄元、東博・文化庁・高野山ほかへ出張(八日、企画展示品借用)。

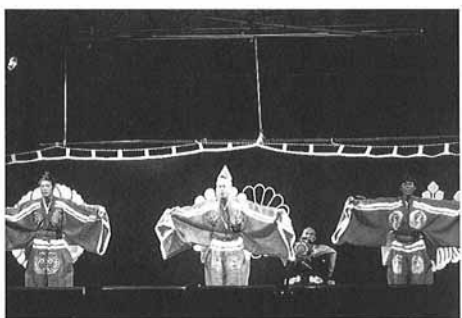
六日 駒沢大学前学長奈良康明氏一行来山(貫首挨拶・執事長案内)。

八日 兵庫教区第四部四一名団参(貫首挨拶)。

全国芸能フェスタ二〇〇〇(義経平泉への道)(岐阜県白鳥町「長滝延年」、福岡県瀬高町「大江

幸若舞」ほか。幸若舞は「和泉城」

「高館」を上演。於観自在王院跡)。



山内真珠院法事

十日 九州西教区大興善寺様四九名団参(執事長挨拶・案内)。

讚蔵企画展「金銀字経の世界」(十月九日)

紫波町五郎沼薬師神社例祭(貫首参席)

大江幸若舞保存会第二七代家元江崎恒隆師・二八代松尾親廣師一行来山(仏文研邦世案内)。

岐阜県白鳥町白山長瀧神社若宮多聞宮司一行一九名来山(貫首挨拶・総務慎重案内)。

十一日 花巻・遠野・平泉観光推進協議会中部地区大手旅行業者現地研修(事業部澄照 於日花巻温泉)

十三日 いっくら国際文化交流会「外務省長期青年招聘事業」一行来山(貫首応接・秀厚案内)。

県観連教育旅行東京会場説明会(事業部澄照 於日エドモント)。

十四日 慈覚大師報恩法要(金曼供) 慈覚大師像御厨子奉納法要(松井建設様より寄贈)

十五日 観音院法嗣秀法君得度式 平泉町敬老会(総務慎重)

十七日 郷土芸能奉演(達谷子供神楽) 十八日 兵庫教区第五部正福寺様ほか八〇名団参(貫首挨拶・真珠院澄順案内)。

十九日 赤堂稲荷例祭(護摩供) 白山比咩神社山崎宗弘宮司一行一五名来山(貫首挨拶・総務慎重案内)。

管財澄元、日光へ出張(うるし博物館の巻柱模型借用返却)。

岩手国際交流協会(財)海外研修員一行来山。 二十日 県観連教育旅行札幌・苫小牧会場説明会(事業部澄元)。

二十二日 菜樹王院四十九日法事 二十三日 般若心経金字写経会(七五名出仕 本堂)。

二十四日 埼玉教区普門寺様三五名団参(執事長挨拶)。 管財澄元、大阪・広島・京

都・東京へ出張(二十九日、企画展経巻搬入)。

梵焼供初行(十月一日、地藏院後住秀厚) 二十六日 白山比咩神社北村伸一郎権宮司一行一六名来山(貫首挨拶・総務慎重案内)。

町社会福祉大会(執事長) 東北銀行頭取箱崎安弘氏来山(貫首応接)。

二十七日 町観光協会役員会(事業部澄照) 南総教区観音教寺様二三名団参(貫首挨拶・仏文研邦世案内)。

二十八日 酒田三十六人衆須藤秀三郎様代参(貫首挨拶・仏文研邦世案内)。

二十九日 貫首・執事長、達谷西光寺秘仏御開帳参拝。

三十日 栃木教区薬師寺様七名団参(貫首挨拶)。

◇十月

- 一日 月次大般若会(本堂)
- JR東日本「座禅&ウォーキング」一行来山。(執事長法話。)
- 二日 慈眼会(本堂)
- 菊まつり役員会
- 惠泉女学園短期大学長島時子氏来山(中尊寺ハス観察。)
- 三日 貫首、鳴子へ出向(天台宗議會東西会派交流会。)
- 野の花美術館長志賀かう子様来山(貫首応接 仏文研邦世案内。)
- 四日 天台宗議會東西会派交流会一行来山(貫首挨拶 執事長案内。)
- 水沢市民総合大学「臥牛館」史学部一行来山(執事長挨拶。)
- 仏文研邦世、大正大学仏文化研究会出席(翌日大津、京都)。

- 五日 各県大阪事務所一行来山(執事長挨拶 事業部澄照案内。)
- 七日 「奥の細道」垂井サミット(執事長 於岐阜県垂井町文化会館。)
- 事業部澄照、澄円宮城県利府出張 誘客キャラバン(利府ショッピングセンター。)
- 八日 尺八供養献笛 琴古流尺八盛岡竹友会十一名(貫首挨拶。)
- 郷土芸能奉演(衣川村川西大念仏剣舞。)
- 九日 伝教大師集字般若心経奉納式(本堂。)
- 企画展「信の美」特別鑑賞会 開幕法要、レセプション(平泉レスト。)
- 郷土芸能奉演(江刺市奥山行山流清衡鹿踊。)
- 十日 讚衡藏企画展「信の美」写経のころ(十一月十日。)

- 十一日 元衆議 船田元様一行来山(貫首挨拶。)
- 秋能申合せ(大広間。)
- 浄法寺町町長清川明彬様他議員一行来山(貫首挨拶案内。)
- 桜川排水樋門景観検討委員会(執事長 役場。)
- 建設省若手工事事務所長佐藤宏明氏来山(貫首応接。)
- 十二日 福島教区龍興寺様四二名団参(執事長挨拶・管財澄元案内。)
- 仏文研邦世講義(「陸奥話記」を読む〈最終回〉)於胆沢町愛宕公民館。)
- 十四日 慈覚大師報恩法要(常行三昧供。)
- 十五日 二〇〇〇年平泉イベント義経伝説新世紀「新たな飛翔」(郷土館 執事長・仏文研邦世)江刺市長及川勉夫妻来山(貫首挨拶。)
- 琵琶奏者田中旭泉氏来山

- (貫首挨拶 案内。)
- 黄金荘取穫祭(執事長。)
- 郷土芸能奉演(達谷窟毘沙門神楽。)

十七日 群馬県常住寺蘭実中様御夫妻、故師実円大僧正墓参のため来山(貫首・老分ほか遺弟挨拶、執事長案内。)



ひろさちや夫妻来山(貫首挨拶 案内。)

- 十八日 内外情勢懇話会(執事長 於ペリーノ日。)
- 十九日 天台宗法灯護持会副会長大島雄次様(安田生命保険相互会社会長)来山(邦世案内。)
- 貫首、寛永寺へ出向(神田秀順大僧正晋山式 随行澄円)群馬教区慈眼寺様三二名団参(総務慎有挨拶。)
- NHK盛岡放送局「ゆうY O U岩手」内にて企画展「信の美」生中継(管財澄元。)
- 山内薬樹王院白虎堂例祭。菊まつり開幕法要。
- 二十日 茨城教区観音寺様二四名団参(貫首挨拶・総務慎有案内。)
- 教区法要習礼(於毛越寺。)
- 二十一日 群馬教区薬王寺様二二名団参(貫首挨拶・執事長挨拶。)
- 郷土芸能奉演(衣川村川西大念仏剣舞。)
- お経を読む会(常住院後住長

- 生。)
- 二十三日 福島教区円満寺様二二名団参(貫首挨拶。)
- 二十四日 佐々木多門氏結婚式(本堂 戒師貫首。)
- 二十五日 真言宗高幡不動尊金剛寺様三三名団参(貫首挨拶・総務慎有案内。)
- 平泉町戦没者追悼式(執事長 於毛越寺。)
- 真言宗金藏院様二六名団参(貫首挨拶。)
- 二十六日 神奈川教区様二七〇名団参(貫首挨拶。)
- 仏文研邦世講演(東北都市景観協議会「景観を読む」於日武蔵坊。)
- 横浜市大聖院様三一名団参(貫首挨拶。)
- 天台宗ハワイ別院荒了寛師来山(貫首挨拶。)
- 二十七日 群馬教区下仁田部檀信徒会様八四名団参(蘭実丞師・蟻



坂是心師は同行、貫首挨拶。  
建設省東ブロック調査官会  
議一行来山（執事長案内）。  
東北都市景観協議会一行五  
〇名拝観（邦世案内）。  
二十八日 秀衡公御月忌（金曇供 本堂）。  
儀礼文化学会一行三五名来  
山（曇供隨喜 貫首挨拶・管財澄  
元案内）。  
二十九日 教区法要習礼（本堂）。  
秋能申合せ（能楽堂）。  
郷土芸能奉演（北上市岩崎鬼



三十日 東京浅草寺貫首清水谷孝尚  
師、観音経読誦の会一行八  
〇名団参（貫首挨拶）。  
日光観音寺様四一名団参  
（貫首挨拶 執事長案内）。  
三十一日 一部光禪寺様一九名団参  
（総務慎有挨拶）。  
暴力団追放一関地区大会  
（執事長 於平泉町体育館）。  
一山協議会  
◇十一月  
一日 秋の藤原まつり開幕（雨天）  
郷土芸能奉演（平泉町赤伏神  
楽）。  
二日 藤原四代公追善法要  
菊供養会（雨天）  
岩手県教育委員会文化課伊藤学  
司氏来山（貫首、執事長応接）。  
三日 中尊寺能「枕慈童」（能楽堂）。  
春季神事能五十年勤仕奉告  
素謡 平泉喜桜会「橋弁慶」  
独吟「八島」岩瀨勝次郎「安  
宅」千葉初夫。  
町勢功労者表彰式（執事長  
於役場）。  
福島教区常光寺様十一名団  
参（貫首挨拶）。  
福島教区常光寺一三名団参  
（貫首挨拶・秀円案内）。  
郷土芸能奉演（平泉町長部鹿  
踊、胆沢町郡島鹿踊、衣川村川西  
大念仏剣舞）。  
四日 貫首一関市にて講演（塑性  
加工連合講演会 於一関工専）。  
衣川村千葉卓司氏より曰奉  
納。  
五日 ファッションデザイナーナトリキ  
ユキ氏来山（貫首挨拶・総務慎  
有案内）。  
西磐井郡老人クラブ連合会  
一〇〇名来山（執事長挨拶）。  
平泉町交通安全運動推進町  
民大会（執事長 役場会議室）。

六日 蔽島神社飯田楯明様来山  
（管財澄元案内）。  
一関商工会議所 両磐イン  
ダストリアルプラザ一行一  
八名来山（総務慎有案内）。

七日 白山比咩神社「加賀一ノ宮  
敬神婦人会」一行三〇名来  
山（貫首挨拶）。  
群馬教区北前橋檀信徒会一  
行一〇八名団参（貫首挨拶）。

十日 開山一一五〇年祭結願法要  
（十種供養写経奉納教区法要）  
NHK学園写経講座（植村  
和堂講師）六五名も参加  
陸奥教区二部檀信徒会（大  
広間）  
陸奥教区研修会

十一日 一隅を照らす運動 天台宗  
一斉托鉢（当山より八名出仕  
於宮城県南方町）。

陸奥教区法要十種供養会 差定

大導師	中尊寺貫首大僧正孝信	伽陀	達谷西光寺（嗣）敬祐
観音寺	真清	実相坊	了章
常住院	高円	千手院	亮康
大徳院	賢有	覚性院	秀維
利生院	円融	長楽寺	慎有
円教院	快恩	法泉院	春興
地藏院	秀円	薬樹王院	澄照
真珠院	澄順	感神院	頼賢
大長寿院	光中	報恩寺	裕道
願成就院	高信	観音院	広元
光円院	頼俊	真珠院（嗣）	英空
白王院	慈順	自性院	亮信
円乘院	邦世	観音寺	亮賢
興福寺	真弘	積善院	仁秀
积尊院	寛弘	妙禅院	浩順
大乘院	久信	金剛院	秀順
千手院	慶信	常住院（嗣）	長生
薬王院	道隆	地藏院（嗣）	秀厚
賢聖院	亮澄		

# 新讚衡蔵落慶式

日時 平成十二年三月二十四日  
場所 中尊寺新讚衡蔵

後 唄 退 堂

松井建設株式会社社長 松井角平様  
参列者代表・平泉町長 鈴木和博様

入 堂

金色堂前より練行 十方念仏  
散華にて 下座入り口上座

表 白

観音経 導師開眼作法

真 言

大日、阿弥陀、薬師、文殊、観音、  
諸天、金輪

焼 香

文化庁文化財保護部美術工芸課長 鈴木規夫様

一関地方振興局長 照井崇様

新讚衡蔵建設委員会委員長 鈴木嘉吉様

株式会社三衡設計舎社長 勝部民男様

## 新讚衡蔵の建設に当たって

中尊寺新宝物館「讚衡蔵」建設  
委員会委員長 工学博士 鈴木嘉吉

近年、寺社の宝物館にも公立の博物館・美術館と同等、またはそれ以上の社会的役割が求められている。新讚衡蔵はその期待にこたえつつ、寺の宗教・文化活動の新たな拠点となることをめざした。その建設に当たっては、次の点を特に配慮している。

まず第一は境内が特別史跡であることに鑑みて、できるだけ地形・地物の改変をさけ、環境に適した建築とすることである。幸いに発掘調査では顕著なる遺跡もなく、一部で発見された古道や溝は基礎工法の手直しで保存できた。また地形の高低差を利用して建設したので、旧地形も保持されている。建物の外観は金色堂覆堂との調和を図り、高さを押えて周囲の木立に溶け込む形とした。

第二は当然に収納する文化財の保存・展示環境を良好に保つことである。そのため収蔵庫には、温湿度に対する万全の処置を施すとともに、展示ケースは厳重な密閉型とし



ている。各所に計測機器を配置して、常時監視するシステムには最新技術を用いた。特別展示などを行う多目的展示室を設けたのも、これからの幅広い博物館活動に備えたものである。利用者空間の快適性と、バリアフリーを心がけたのは改めて記すまでもない。

建設委員会は各自専門の分野を活かしながら、寺と一体となつて新讚衡蔵の建設を推進してきた。中尊寺開山一五〇年の節目に開館する新施設が、中尊寺、そして平泉のさらなる発展に寄与することを切に願うものである。

新讚衡蔵落慶式

——御来賓御芳名(順不同)

鈴木常俊様 日光山輪王寺 御門跡  
 平野宗浄様 瑞巖寺  
 多田孝文様 大聖院  
 藤里明久様 毛越寺 執事長  
 達谷窟浩亮様 達谷西光寺  
 藤波洋香様 黒石寺  
 鈴木規夫様 文化庁文化財保護部美術工芸課長  
 鈴木嘉吉様 新讚衡蔵建設委員会委員長  
 渡邊明義様 東京国立文化財研究所 所長  
 宮野秋彦様 名古屋工業大学名誉教授  
 柳 雄太郎様 文化庁文化財保護部記念物課  
 高橋信雄様 岩手県教育委員会文化課  
 増淵 徹様 京都橘女子大学 教授  
 荒木伸介様 跡見学園女子大学 教授  
 濱田直嗣様 仙台市博物館 館長

千葉初夫様 喜桜会長  
 清水恒輝様 (株)精茶百年本舗 社長  
 小野寺邦夫様 (株)平泉観光レストセンター 社長  
 菊地慶矩様 川嶋印刷(株) 社長  
 西村専次様 小岩金網(株) 社長  
 細川正二様 岩手日報一関広華会長  
 吉田源之丞様 吉田源之丞老舗 代表  
 佐々木一嘉様 (株)佐々木組 社長  
 朝田義明様 朝田建設(株) 社長  
 関口一雄様 小岩金網(株) 副社長  
 鈴木泰治様 (株)日本旅行 東北仕入販売センター所長  
 森 貞夫様 東急観光(株) 東北営業本部長  
 木村 博様 名鉄観光 東北仕入センター所長  
 加藤睦夫様 一関警察署長  
 佐藤志行様 両磐地区消防組合消防本部 一関消防署長  
 千田孝義様 JR一関駅長  
 小野寺眞利様 (株)松栄堂 社長  
 齋藤哲子様 (株)斎藤松月堂 代表  
 関 良彦様 蔵ホテル一関 社長

滝浦静雄様 一関市博物館 館長  
 松井角平様 松井建設(株) 社長  
 浅井克祐様 松井建設(株) 東北支店長  
 小西暁也様 (株)小西美術工芸社  
 勝部民男様 (株)三衡設計舎 社長  
 佐藤宏明様 建設省岩手工事事務所 所長  
 小川正彦様 (株)京都科学 東京支店長  
 菅原喜重郎様 衆議院議員  
 佐々木洋平様 (株)衆議院議員  
 照井 崇様 一関地方振興局長  
 鈴木和博様 平泉町長  
 及川 勉様 江刺市長  
 佐々木秀康様 衣川村長  
 高橋一男様 平泉町議会議長  
 山中邦紀様 弁護士  
 泉 信平様 平泉商工会長  
 八重樫次男様 一関信用金庫 理事長  
 関宮千代丸様 白山神社宮司  
 佐々木宗生様 喜多流職分

菊池 毅様 ホテルニュー江刺 カッコーの会 会長  
 松岡俊太郎様 両磐酒造(株) 社長  
 佐藤暁僖様 世嬉の一酒造(株) 社長  
 八重樫貞子様 中尊寺茶道教授  
 関戸美砂子様 東京都小金井市  
 中澤義男様他 東京都江東区三好  
 伊藤徳雄様 東北電力 一関営業所長

他、平泉町内外より御来賓二百二十三名様

祝賀会次第

於 平泉レストセンター  
 始 午後〇時三〇分  
 進行 執事 佐々木 慎有

一、祝辞仕舞「秀衡」

一関地方振興局長 照井 崇様  
 平泉町長 鈴木 和博様  
 喜多流職分 佐々木 宗生様  
 平泉喜桜会様

一、開会の言葉

執事長 菅原光中

一、挨拶

貫首 千田孝信

一、工事報告

執事 破石澄元

一、感謝状贈呈

新讚衡蔵建設委員長 鈴木嘉吉様  
 設計者 勝部民男様  
 施工業者 松井角平様

一、乾杯

平泉町議会議長 高橋一男様

一、建設委員長挨拶

新讚衡蔵建設委員長 鈴木嘉吉様

一、閉会の言葉

執事 佐々木 仁秀

一、来賓祝辞

文化庁長官 林田英樹様  
 (鈴木規夫氏代読)

新讚衡蔵建設浄財寄進結縁 御芳名 [承前号]

花巻市 みちのくコカ・コーラボトリング(株)様 壹百萬円  
 宮城県 今野 玲子様 (前号記載訂正) 壹百萬円  
 盛岡市 北日本銀行様 七拾萬円  
 一関市 (株)佐々木組様 五拾萬円  
 両磐酒造(株)様 五拾萬円  
 花巻市 花巻温泉(株)様 五拾萬円  
 一関市 東北電力(株)一関営業所様 参拾萬円  
 江刺市 ホテルニュー江刺カッコーの会様 参拾萬円  
 依田 養一様 参拾萬円  
 (株)佐藤技建様 参拾萬円  
 共栄建設(株)様 参拾萬円  
 江刺開発振興(株)様 参拾萬円  
 佐野建設(株)様 参拾萬円  
 白金運輸(株)様 参拾萬円  
 (株)孝輝殿様 参拾萬円  
 平泉町 男山酒店様 (前号記載訂正) 参拾萬円  
 群馬県 蘭 実中様 貳拾萬円

平泉町 葛西石材店様 貳拾萬円  
 丸正建設(株)様 貳拾萬円  
 小岩材木店様 貳拾萬円  
 (株)翁知屋様 (前号記載訂正) 貳拾萬円  
 粟生田 勝吾様 参拾萬五千元  
 一関市 岩手日報一関広華会様 参拾萬円  
 八重樫 貞子様 参拾萬円  
 矢びつ温泉 瑞泉閣様 参拾萬円  
 (株)齊藤松月堂様 参拾萬円  
 横浜市 宇井 彩翔 玲沙様 参拾萬円  
 京都市 吉田源之丞老舗様 参拾萬円  
 江刺市 (株)森忠法衣店様 参拾萬円  
 今野 光夫様 参拾萬円  
 盛岡市 松岡 昭治様 参拾萬円  
 東京都 佐々木 宗生様 参拾萬円  
 東山町 松川 誠様 参拾萬円  
 平泉町 (株)平泉様 参拾萬円  
 岩渕 勝次郎様 参拾萬円  
 吉野屋(株)様 参拾萬円  
 菅原 杏子様 参拾萬円



我孫子市 風間 武治様  
 一関市 高橋 東喜様  
 横浜市 町澤 照子様  
 久慈市 新田 貞治様  
 江刺市 佐藤 繁子様  
 東京都 伊藤 直治様  
 片柳 フミ子様  
 平泉町 鈴木 竹男様  
 小野寺 貢様  
 鈴木 四郎様  
 岩淵 照美様  
 茶谷 茂代様  
 茶谷 高俊様  
 伊藤 正志様  
 高橋 勝司様  
 佐藤 善行様  
 斉藤 重樹様  
 千葉 慶助様  
 千葉 卓治様  
 鈴木 春夫様

(前号記載訂正)

式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円

一関市 阿部 茂様  
 阿部 洋司様  
 高橋 澄様  
 佐々木 久悦様  
 小野寺 隆三様  
 千條 暉征様  
 藤原 修様  
 鎌倉市 中澤 克之様  
 岐阜県 常田 房男様  
 赤畑 春子様  
 熊本県 吉田 浩子様  
 広島県 都市道路開発(株)様  
 弘前市 花田 俊岳様  
 江刺市 依田 アサ子様  
 依田 憲枝様  
 依田 公正様  
 萩田 耕造様  
 菊地 強様  
 菊地 欣郎様  
 菊地 千秋様

式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円  
 式万円

千葉 初夫様  
 泉 信平様  
 (前号記載漏)  
 一関市 (前)一関タクシー様  
 京都市 (前)小野数珠店様  
 高崎市 大門屋物産(株)様  
 盛岡市 奥羽史談会様  
 仙台市 能美防災(株)様  
 東京都 高橋 富雄様  
 石川 登志雄様  
 中澤 義男様  
 平泉町 (前)篤信家様  
 今野 忠夫様  
 (前)平泉牛乳様  
 熱海市 中田敏郎 襟子様  
 衣川村 佐々木 治様  
 佐々木 秀康様  
 一関市 菊地 慶矩様  
 栗原 秀郎様  
 佐藤 哲雄様

壹拾万円  
 壹拾万円  
 壹拾万円  
 五万円  
 五万円  
 五万円  
 五万円  
 五万円  
 五万円  
 五万円  
 五万円  
 五万円  
 五万円  
 五万円  
 五万円  
 五万円  
 五万円  
 五万円  
 五万円  
 五万円

宮城県 大石 洋見様  
 江刺市 菊地 幸一様  
 及川 勉様  
 (前)吉田製麺様  
 鈴木印刷(株)様  
 東京都 関戸 美砂子様  
 土肥 淑江様  
 熱海市 中田義弘 恵美子様  
 中田籐一 千枝子様  
 平泉町 こまつ寿司様  
 むつみ様  
 丸山 一雄様  
 丸山芳広土地家屋調査士事務所様  
 橋本 英雄様  
 橋本 良隆様  
 佐藤 敏雄様  
 山平 省一様  
 斉藤 三哉男様  
 石神 征三郎様  
 (前)インテリアしらやま様

参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円  
 参万円

今福 厚好様  
 (有)オフェイスZERO様  
 千葉市 伊藤 俊夫様  
 前沢町 佐々木 長市様  
 千葉 力二様  
 (有)ムラカミ木工所様  
 相模原市 杉藤 利津子様  
 大船渡市 菊池 喜清様  
 大東町 千葉 隆子様  
 町田市 古田 隆吉様  
 東京都 横山 スミ様  
 東京都 耕田 英夫様  
 湯沢市 武石 芳明様  
 二戸市 二戸ハウス(有)様  
 長野県 山口 良造様  
 福岡県 宮田 久子様  
 福島市 加茂 喜代子様  
 平泉町 アピコ商店様  
 須藤 功様  
 菅原 正義様

壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円

菊池 愛祐様  
 菊池 毅様  
 菊池 正仁様  
 及常建設(株)様  
 及川 健様  
 及川 清介様  
 高橋 新平様  
 高橋 又男様  
 佐々木 善基様  
 佐藤 郁夫様  
 佐藤 悦夫様  
 佐藤 雅士様  
 山内 賢一様  
 小原 莊市様  
 小野田 徹朗様  
 松本 富二郎様  
 神田 貞一様  
 千葉 俊一様  
 千葉 千蔵様  
 千葉 文男様

壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円

渡辺 明子様  
 藤田 登茂子様  
 飯森 功様  
 栗生 みよし様  
 (有)及川タイル水道様  
 (有)高松水道工業様  
 (有)千葉技建様  
 (有)大興自動車様  
 今市市 津吹 志津子様  
 埼玉県 秋山 孝次様  
 小玉 光平様  
 上野 良様  
 中村 良英様  
 豊田 市蔵様  
 札幌市 村口 初男様  
 松戸市 渡邊 芳弘様  
 蕪木 峯子様  
 新潟県 小林 藤吉様  
 水沢市 遠藤 倫子様  
 高森 俊文様

壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円

齊藤 清寿様  
 千葉 喜一様  
 千條 一男様  
 舞草 愛様  
 米山町 只野 眞男 ちどり様  
 (有)参拜者(有)篤信家様  
 中尊寺檀家一同様  
 中尊寺総代一同様  
 新讚衡蔵用五色幕 一張  
 (平成十二年十月五日現在)

壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円  
 壹萬円

奉納 平成十二年九月吉祥日  
 開山慈覚大師坐像奉安  
 黒漆本金箔押金具打春日厨子 一基  
 松井建設株式会社  
 取締役社長 松井角平殿

不動尊篤信御奉納者 御芳名

平成十一年十月〜平成十二年九月		
青森県	笠原山不動院代表	七拾四萬八千円
青森県	小笠原喜世様	
黒石市	北山 肇様	九萬円
青森県	盛田 悠三様	七萬五千円
上北郡		
青森県	工藤銀四郎様	季毎御供物
三戸郡		
青森県	笹 隆治様	季毎御供物
中津軽郡		
岩手県	米沢 励様	季毎御供物
二戸市		
平泉町	長島中学校	壹拾参萬六千円
長島町	第八回卒業生	
一関市	山平様	参萬円
	八重樫 昭様	参萬円
	阿部礦産(株)	参萬円
	(株)精茶百年本舗様	五萬円
	川嶋印刷(株)様	壹拾萬円
	豊隆軌道 千葉 幸八様	六萬八千円
東磐井郡	(株)シューアーエンジニアリング様	参萬円
室根村		

伝教大師最澄の書を集字製作  
「紺紙金字般若心経」奉納について

宗派を超えた唯一の国民仏教ともいえる「般若心経」は、今にしてなお、大衆の厚い信仰を集め続けている。「般若心経」信仰は、日本では奈良時代、天皇主導の形で始まるが平安時代初期に到り、弘法大師空海の興した真言宗と伝教大師最澄の天台宗の二大仏教の奨励によって、大衆へと広まっていた。

空海の書いた「般若心経」は真蹟が伝わり尊崇の的となつているが、天台宗開祖、最澄がみずから書いた「般若心経」は、不幸にして現存しない。しかし、最澄が「般若心経」の研究と信仰の奨励に高い関心を寄せていたことは、彼の請来目録に裏づけられている。さらに、最澄に引続いて中国に渡った慈覚大師円仁や智証大師円珍なども多様な「般若心経」の研究書をもたらしており、このことから天台宗において「般若心経」が重視されていたことが窺える。今日われわれの耳に親しい「心経写経」も円仁の「如

宮城県	(株)金成工務店様	参萬円
栗原郡		
古川市	近田千代子様	四萬七千円
仙台市	伊藤 清子様	貳拾四萬円
		清酒五本
	根田 正明様	六萬円
		清酒八本
	川熊 武芳様	壹拾貳萬貳千円
		清酒二十本
	山形県 富本小学校	九萬壹千八百円
	寒河江市 昭和二十年卒業生様	
福島県	箱崎 滋元様	参萬円
いわき市		
福島県	里守屋講中代表	八萬貳千円
岩瀬郡	五十嵐 強様	
埼玉県	埼玉縣信用金庫様	壹拾四萬参千円
埼玉県		
横浜市	宇井 彩翔様	参萬円
	宇井 玲沙様	参萬円
名古屋市	大島 和彦様	参萬円
大阪府	辻林 正博様	六萬円
和泉市		
大阪府	古森谷幸一郎様	参萬円
豊中市		
北海道	佐藤笑美子様	七萬円
札幌市		
台北市	蕭 麗華様	参萬円
台北市		

法写経」の奨励によって隆盛に導かれたものである。

このような道を開いた最澄の自筆の「心経」が現存しないということは、まことに歴史的な痛恨事であったが、今般このまぼろしの「心経」を眼前せしめることがなかった。書家・高橋蒼石氏が最澄の真筆を網羅集成し「般若心経」の全文を集字することに成功したのである。

そこへ本年四月、開山千五百年を迎える中尊寺の千田孝信貫首と飯島とのあいだの仏縁が機縁となり、今秋十月十日より開催される、新宝物館の落慶記念「信の美」展にあわせて、この伝教大師の集字心経を広く一般に紹介することとなった。飯島は、この貴重な経巻を、平安時代の代表的な装飾経のスタイルである紺紙金字経として荘厳し、奉納することを発願、「伝教大師最澄の集字心経を装飾経にして中尊寺と延暦寺に奉納する会」を組織、浄財を集めて奉納することとし、ここに展覧される経巻を完成した次第である。

平成十二年十月吉日

奉納者

〔伝教大師最澄の集字般若心経を装飾経にして  
中尊寺と延暦寺に奉納する会〕

書道史家 飯島 太千雄

莊嚴について

紺紙 和紙の王と称される雁皮を叩解した繊維を、古代の染色を追求する京都の染色家吉岡幸雄氏が染め上げ、平安時代の和紙復元に実績を持つ越前の漉匠・梅田太士氏が二層の薄様として漉き合わせ、更に漬け染と抄造を二十数回もくり返して染め上げたものを、茨城の料紙匠小室義久氏が一枚ずつあく抜き、水張りをして仕上げた。

金字

高橋蒼石氏の集字原稿を高尚堂が特殊なコロタイプ印刷で刷り、飯島主宰の書文で蒔絵技法と金字写経を整合、最高純度の金粉を一字一字に振った後、更に一点一画を象牙で磨いて仕上げた。界線はブラチナ刷り。

表紙

紺紙に金と水金により、全面に宝相華文様を施す。文様は延暦寺所蔵の「紺紙金銀交書法華經」（八巻・重文）を撮影し、その表紙を復元。この「法華經」は平安時代中期の、表紙と見返を有する最古の完本で、最澄創建になる延暦寺に相伝したものである。金銀の蒔絵は書玄製作。

題箋

法隆寺伝来の平安時代初期の紺紙金字経に唯一の例がある革題箋を復元。革工芸作家・猪俣伊治郎氏が子牛革を磨き上げて薄く面取りしたものに、伝教大師の書をコロタイプ印刷した。

見返

表紙と同じく、延暦寺所蔵「紺紙金銀字交書法華經」の見返に用いられている「法華説相図」を金とブラチナで復元。三尊の顔は金箔で印刷不能のため、飯島著『あなただけの名品般若心経』で中尊寺経の経絵の描法に習熟したイラストレーター・菊地ひと美氏が染筆。金銀の蒔絵は書玄製作。

経筥

内筥は漆塗のかぶせ蓋型の桐箱、外筥は桐の印籠箱で、共に越前河和田特製。有職紐は道明特製。箱書きはいずれも千田孝信貫首。

表装

諸所名利への奉納経の表装に実績のある、本郷の伝統工芸士・鯨井勇氏による。軸は前述の「紺紙金銀交書法華經」に倣った水晶軸を特製。仏教における四宝とは瑠璃・披璃・金・銀、本奉納経はその四宝をもって莊嚴した。本文および表紙、経絵が金と銀、紺紙が瑠璃、水晶が披璃に当たたる。



集家澄書摩訶般若波羅蜜多心經





冬の夜の夢にのみ見る中尊寺の  
白き大日のあはれ涙目

馬場あき子

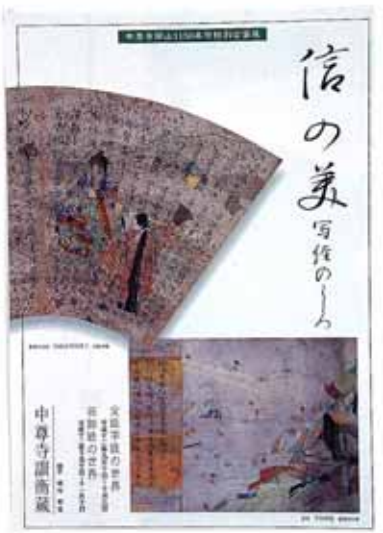
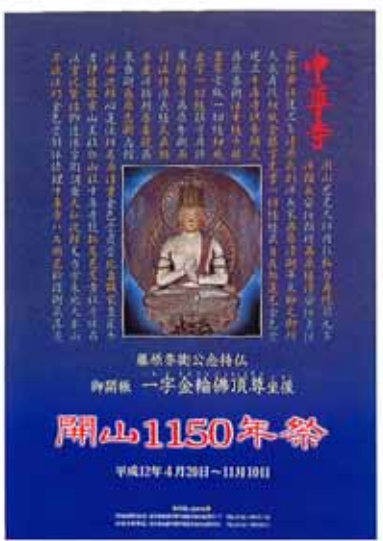
この一冊 絵本おくのほそ道



五十年前夫の転勤で東京から盛岡に行くことになった折国文学者の祖父小野里萬藏から「あちのくは芭蕉が歩いておくのほそ道を書いた土地だ。行ったらまず平泉に行ってみよう」と言われた。盛岡住むようになって折にふれて、芭蕉ゆかりの土地とたづねた。母が晩年新譯に住んでいたを秋田廻りで電車や車で旅をしたこともある。古くは水墨空画での蕪村おくのほそ道画巻本版画と青木林終着で描かれた棟方志功のおくのほそ道がある。私も昨秋思い立ち油絵のぐぐの絵本おくのほそ道を一歩一歩描きつめた。感じはみちのくの一冊がまた、いつか十日出来まりました。

石田文子





『ミセス』平成11年10月号



『大法輪』平成12年11月号



後記

▽「慈覚大師開山一一五〇年大祭」もおわった。円成と言う。思えば三年前が金色堂国定指定百年で、その二年前は平泉九百年祭に協賛、平成元年は芭蕉奥の細道三百年、そしてその三年前の昭和六十一年は秀衡公八百年御遠忌特別大祭であった。十五年のあいだに大祭が五回、三年に一度の割合になる。▽今後十年ほどのあいだは、年表を繰ってみてもさしてインパクトのある歳廻りに当たらないようだ。山が平常であり得るそういう時こそが、自らの本分を思慮し行する、日本仏教の課題にとりくむ好機ととらえたい。貫首が、一昨年号に「爾時」と説き、今回「千載一遇のいま」と言われる謂でもあろう。

(佐々木邦世)

中尊寺〈寺報〉「開山」第七号  
 中尊寺開山一一五〇年祭記念号  
 平成十二年(二〇〇〇)十一月二十日  
 発行 中尊寺  
 (執事長 菅原光中)  
 〒〇二九一四一九五  
 岩手県平泉町字衣園二〇二  
 編集 中尊寺仏教文化研究所  
 印刷 川嶋印刷(株)



〈発行 中尊寺〉